

MOROOKADAIRA SITE

# 師岡平遺跡

平成8・9・10年度県営圃場整備事業古田地区に伴う  
埋藏文化財緊急発掘調査報告書

1999年3月

茅野市教育委員会

# 師岡平遺跡

平成8・9・10年度県営圃場整備事業古田地区に伴う  
埋藏文化財緊急発掘調査報告書

1999年3月

茅野市教育委員会

## 序 文

師岡平遺跡は、このたび、県営圃場整備事業古田地区の実施に伴い、記録保存を前提に発掘調査を茅野市教育委員会が行ったものです。

古田地区の圃場整備事業に伴う発掘調査は平成6年度より行われ、数多くの成果がありました。本遺跡は、平成8・9年度に師岡平遺跡の一部と考えられる威力不動尊東遺跡とともに発掘を行いました。

発掘の結果、中世の集落址と縄文時代前期から中期初頭・中期後半の集落址が広い範囲にわたって検出されました。なかでも、中世の集落址は守矢文書の中に見られる「村岡」と考えられ、文字史料と考古資料によって当時の様相がわかる数少ない貴重な遺跡です。

また、尾根のほぼ全域にわたって落し穴が検出され、平成7年度に調査を行いました久保御堂遺跡の落し穴群とあわせると、茅野市域で発見された落し穴群の中でもっとも落し穴の数が多い遺跡となりました。師岡平遺跡と久保御堂遺跡のある尾根すべてが縄文時代の狩猟域であったことがわかりました。

今回の発掘調査の成果が考古学、地方史研究に十分に活用され、また、今後の埋蔵文化財保護のために役立つことを切望します。

発掘調査にあたり、長野県教育委員会などの各関係機関、地元地権者の皆様の深いご理解とご助力、また、発掘調査に関わった多くの皆様のご尽力により、調査を滞りなく、また、無事終了することができましたことに、心から御礼申し上げます。

平成11年3月

茅野市教育委員会  
教育長 両角 源美

## 例　　言

1. 本書は、平成8・9年度は長野県諿訪地方事務所長小林俊規と茅野市長矢崎和広との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」と、平成10年度は長野県諿訪地方事務所長香坂守義と茅野市長矢崎和広との間で締結した「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」に基づき、茅野市教育委員会文化財課が実施した平成8・9年度県営圃場整備事業古田地区に伴う、長野県茅野市豊平師岡平遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長野県諿訪地方事務所土地改良課よりの委託金と、文化財国庫補助並びに県費補助金を得て、茅野市教育委員会が平成8・9年度に実施した。調査の組織等の名簿は第Ⅰ章第2節4として記載してある。
3. 発掘調査は平成8年度は5月10日から3月21日まで、平成9年度は4月15日から11月12日までを行い、出土品の整理及び報告書の作成は発掘終了後から始め、平成11年3月まで茅野市文化財課において行った。
4. 発掘調査から本書作成までの作業分担は第Ⅰ章第2節4に記してある。また、執筆分担は第Ⅲ章第4節を百瀬が担当し、それ以外は柳川が担当した。
5. 調査区の基準点は国家座標基準点による。遺構全体図の数値は平面直角座標系第Ⅷ系による。また、遺構図面上に表されている北は座標北を示す。
6. 本報告に係る出土品・諸記録は茅野市教育委員会文化財課で収蔵・保管している。

## 凡　　例

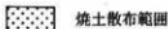
本書の図で用いたスクリントーンや記号の意味は下記のとおりである。



焼土



土器



焼土散布範囲



黒耀石



骨散布範囲



錢



堅緻な面

# 目 次

## 序 文

茅野市教育委員会教育長 両角源美

## 例 言・凡 例

第Ⅰ章 発掘調査の概要.....	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査の方法と経過 .....	2
第Ⅱ章 遺跡の概観.....	6
第1節 遺跡周辺の環境.....	6
第Ⅲ章 発掘の立地と地理的環境.....	10
第1節 遺跡の層序 .....	10
第2節 1区の遺構 .....	11
1. 縄文時代の遺構 .....	11
2. 中世以降の遺構.....	11
第3節 2区の遺構 .....	19
1. 縄文時代の遺構.....	19
2. 中世以降の遺構.....	19
第4節 3区の遺構.....	26
第5節 6区の遺構.....	33
1. 縄文時代の遺構.....	33
2. 中世以降の遺構.....	33
第6節 7区の遺構 .....	44
1. 縄文時代の遺構.....	44
2. 中世以降の遺構.....	61
3. 近代の遺構.....	63
第7節 4・5・8・9区の概要 .....	63
1. 4区の概要 .....	63
2. 5区の概要 .....	63
3. 8区の概要 .....	63
4. 9区の概要 .....	63
第Ⅳ章 結論 .....	65
図版	
抄録	

# 第Ⅰ章 発掘調査の概要

## 第1節 発掘調査に至までの経過

### ・平成8年度

平成8年3月31日 7教文第7-10-5号 「県営園場整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について(通知)」が長野県教育委員会教育長から茅野市教育委員会教育長宛て通知され、事業費32,000,000円(農政側負担28,160,000円 文化財保護側負担3,840,000円)で師岡平遺跡は発掘調査を行うことになった。

平成8年4月1日 8教文第1-2号「埋蔵文化財発掘の通知について(第57条の3第1項)」の提出

平成8年4月8日 8教文第1-13号「師岡平遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知(第98条の2第1項)」の提出

平成8年4月10日 「県営園場整備事業古田地区埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」により長野県諒訪地方事務所長と発掘調査業務委託の契約を28,864,000円で締結。

平成8年4月20日 8教文第1-7号 「平成8年度県営園場整備事業古田地区埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」

平成8年5月16日 8教文第1号 「平成8年度文化財関係国庫事業について(通知)」

平成8年5月30日 8教文第17-2号 「平成8年度国宝重要文化財等保存整備事業補助金交付申請書」提出

平成8年6月12日 8教文第22-2号 「平成8年度文化財保護事業補助金申請書」提出

平成8年8月9日 庁保伝第7号 「平成8年度文化財関係国庫補助事業の交付決定について(通知)」

平成8年9月2日 8教文第225号 「平成8年度文化財保護事業補助金の交付決定について(通知)」

平成8年11月26日 8教文第74-5号 「文化財保護事業計画変更承認申請書」を提出。

平成9年1月29日 8教文第7-2-5号 「農業基盤整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について(通知)」が長野県教育委員会教育長から茅野市教育委員会教育長に通知され、師岡平遺跡の事業費は31,350,000円(農政負担額27,588,000円 文化財保護側負担 3,762,000円)となった。

平成9年1月29日 8諒地上第5-55号「埋蔵文化財発掘調査業務変更委託契約書」により、諒訪地方事務所長と変更契約を行う。

平成9年2月12日 8教文第1号「市内遺跡発掘調査事業の計画変更並びに補助金の減額について(通知)」が長野県教育委員会教育長より通知され、古田工区は32,150,000円(農政側負担 28,292,000円 文化財保護側負担 3,858,000円)に事業費を変更することになった。

### ・平成9年度

平成9年3月12日 8教文第120-3号「埋蔵文化財発掘の通知について(第57条の3第1項)」の提出。

平成9年3月12日 8教文第120-8号「師岡平遺跡埋蔵文化財発掘調査の通知(第98条の2第1項)」の提出。

平成9年4月10日 9教文第7-2-1号 「農業基盤整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について(通知)」で、事業費30,900,000円(農政側負担27,192,000円 文化財保護側負担3,708,000円)で師岡平遺跡の発掘調査を行うことになった。

平成9年4月15日 「県営園場整備事業古田地区埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」により長野県諒訪地方事務所長と発掘調査業務委託の契約を34,232,000円(うち師岡平遺跡は27,192,000円)で締結。

平成9年5月28日 9教文第21-4号 「平成9年度国宝重要文化財等保存整備費及び史跡等購入費補助金交付の申請について」

平成9年7月3日 9教文第31-4号「平成9年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書」を提出  
平成9年7月14日 9教文第2号「平成9年度文化財保護事業補助事業の交付決定について（通知）」  
平成9年7月3日 9教文第1-16号 「国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知書（通知）」  
平成9年11月25日 9教文86-2号「文化財保護事業計画変更承認申請書」を提出。  
平成10年2月2日 9教文第7-2-1号「農業基盤整備事業に係る茅野市内の埋蔵文化財の保護について（通知）」  
が長野県教育委員会教育長より通知され、事業費23,560,000円（農政側負担20,732,000円 文化財保護側負担2,828,000円）に変更することになった。  
平成10年2月4日 「埋蔵文化財発掘調査業務変更委託契約書」により、諒訪地方事務所と変更契約を行う。  
平成10年2月10日 9教文第1号「平成9年度文化財関係国庫補助事業補助金変更交付決定について（通知）」  
平成10年2月13日 9教文第2号「平成9年度文化財保護事業補助金の変更交付決定について（通知）」  
・平成10年度  
平成9年12月の協議により、平成10年度に師岡平遺跡の報告書の作成・刊行を行うことになった。  
平成10年4月14日 10諒地土第5-5号「県営圃場整備事業古田地区埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」によ  
り長野県地方事務所長と発掘調査業務委託の契約を2,578,000円で締結。  
平成10年4月22日 10教文第1号 「平成10年度文化財関係国庫事業について（通知）」  
平成10年6月24日 10教文第1-28号 「市内遺跡発掘調査等費補助について（通知）」  
平成10年5月8日 10教文第11-4号 「平成10年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書」を提出  
平成10年11月6日 10教文第67-1号 「平成10年度文化財保護事業補助金申請書」を提出

## 第2節 調査の方法と経過

### 1. 調査区の設定

最初に表面採取を行い遺物の採取できる範囲によって遺跡範囲を設定した。師岡平遺跡は約60,000m<sup>2</sup>である。その後、工事該当部分の表土除去を行った。この結果、本調査面積は平成8年度分13,500m<sup>2</sup>・平成9年度分11,500m<sup>2</sup>、併せて25,000m<sup>2</sup>となった。これは師岡平遺跡全体の約2/5にあたる。

工事の工程のため一度に発掘することはできなかったので、圃場の工事業者に引き渡した順番で8つの発掘区を設定した。実際に発掘を行ったのは1区から7区であり、8区は途中で埋土保存となつたので表土剥ぎをしたのみで発掘を行わず、遺構の分布状況を記録にのみとどめた。

グリッドについては、調査範囲内に設定し、遺構の記録、遺物の取り上げの基準とした。グリッドの基準は、公共座標 x = 358.330, y = -26546.626を基準点とし、この基準点から一辺10mのグリッドを設定した。ベンチマークは945.209mを設定した。

### 2. 発掘調査の経過

平成7年12月に師岡平遺跡の範囲確認調査時に表面採取を行い、遺跡の範囲を定める。

#### ・平成8年度

遺跡の発掘は圃場の工事に沿って行ったため、前述のとおり発掘区を8つに分け、発掘の終了した所から業者に引き渡していく。1区は5月10日に表土剥ぎを始め、発掘作業は7月11日に終了した。2区は7月19日に表土剥ぎを始め、発掘は10月3日に終了する。3区も7月19日に表土剥ぎを始め、10月25日に業者に引き渡す。4区は7月22日に表土剥ぎを行う。遺構確認を行ったが、確認できなかつたので航空測量後業者に引き渡す。

5区は7月23日に表土剥ぎを行い、発掘調査を行ったが、特に遺構がなかったので航空測量後業者に引き渡した。6区は8月8日に表土剥ぎを行い、発掘が終了したのが12月24日であった。7区は翌平成9年1月6日に表土剥ぎを行い、3月21日に発掘を終了した。発掘期間中は冬季であるので霜と雪、寒さに悩まされた。8区については当初削平する予定だったが、現地協議の結果埋土保存になったため、表土除去後遺構確認を行い記録をとるのみで終了した。

空中写真測量は3回に分けて行った。1回目は1区のヘリコプターによる空中写真測量で7月11日に、2回目はラジコンヘリコプターによる空中写真測量で10月3日に行った。このとき測量したのは2・3・4・5区である。3回目の空中写真測量は12月11日に行い、6区の測量を行った。業者はいずれも朝日航洋株式会社である。

#### ・平成9年度

平成8年度同様、圃場の工事に沿って発掘作業を行う。平成8年度の7区の続きのため発掘区は7区とした。表土剥ぎは平成9年4月16日より行う。6月30日に圃場の工事のため一部を引き渡す。すべての発掘作業を終了したのは11月12日であった。

空中写真測量は一部先に引き渡さなければならなかつたため、2回に分けて行った。1回目は6月25日で、2回目は9月30日に行った。2回ともヘリコプターを使用し、株式会社共同測量社が行った。

#### ・平成10年度

報告書作成を行う。8・9年度とも遺物の洗浄及び注記、復元は行っていたが、図面の整理が思うように進んでいなかつた。本年は主に図面整理を行う。本文執筆は柳川・百瀬で行った。

### 3. 調査日誌（抄）

#### ・平成8年度

5月10日 1区の表土剥ぎを開始する。併せて地番ごとの遺物表面採取も行う。

6月 6日 1区の遺構検出ほぼ終了。道路交差部から東は天地返しの跡がそのまま残っている。

6月24日 遺構分布図作成終了。朝日航洋株式会社より写真測量の打ち合わせのため技師2人来跡。

7月 9日 航空測量に向か全面シート剥ぎと遺物の取り上げ。対空標識の設置、遺構番号のチェックを行う。  
また、朝日航洋株式会社の技師が来跡し、事前の準備を行う。

7月10日 航空測量の補備測量。清掃中に新たな遺構見つかる。

7月11日 航空測量実施。

7月18日 保護協議の結果、遺跡範囲が変更されることになり、面積減となった部分、次年度調査区の道路敷部を調査することになる。

7月19日 2区の表土剥ぎ開始。石鉢の破片出土。

7月22日 南側水路部2ヶ所（調査区2・3）と調査区4の一部表土剥ぎを行う。調査区4・5からは遺構が検出されなかつた。

7月23日 5区の表土剥ぎと2区の遺構確認を行う。

7月24日 2区の遺構確認。保存箇所の表土剥ぎを行う。しかし一部削る可能性がでたため、四賀土木と長野県土地改良課遠藤技師と現場で協議を行う。

7月29日 調査区5の遺構確認を行う。保存地区の表土剥ぎを行う。一部発掘地区が増加した。

7月30日 5区の遺構確認終了。2区の遺構確認続く。

8月 5日 2区の遺構確認。東西方向に走る溝が確認される。5区の土層観察を行う。4区の表土剥ぎを行う。

林靖之・田中洋二郎氏来跡。

- 8月9日 2・3区の遺構発掘。1基の方形竪穴より銭がまとまって出土。6区の調査区設計変更により道路西側の一部を拡張することになる。
- 8月13日 2区の不正形な方形竪穴内のピットより鏡状の金属製品が出上する。
- 8月20日 2・3・6区の調査。現場での協議の結果、若干発掘区が広がる。
- 10月2日 6区表土剥ぎを始める。第2回目の航空測量の事前準備のため、朝日航洋株式会社の技師来跡。
- 10月3日 2・3・4・5区の航空測量を行う。
- 10月25日 3区の引き渡しを行う。
- 12月9日 平面図の作成などを行う。航空測量の準備のため朝日航洋株式会社の技師来跡。県土地改良課遠藤技師来跡。
- 12月10日 昨日に引き続き朝日航洋株式会社で補備測量を行う。
- 12月11日 3回目の航空測量を行う。
- 12月20日 6区の実測が終了する。8区の平面図を作成する。
- 12月24日 6区の発掘作業が終了する。
- 12月26日 8区の調査を終了する。
- 1月6日 7区の表土剥ぎを始める。雪でなかなかはかどらず。
- 3月21日 撤収作業。現場を終了する。
- ・平成9年度
- 4月15日 昨年度の調査分の写真撮影のため清掃作業を行う。
- 4月16日 表土剥ぎを行う。
- 4月24日 表土剥ぎ。中世の方形竪穴の検出をする。市庁舎で県土地改良課遠藤技師・市土地改良課両角・鍛柄技師・市水道課野沢係長と打ち合わせを行う。
- 6月23日 共同測量社が補備測量を行う。
- 6月25日 空中写真測量。ヘリコプターを使用する。
- 6月30日 道の部分の発掘を終了し、業者に引き渡す。
- 8月25日 土坑の半裁などを行う。県埋蔵文化財センターの川崎保氏・兵庫県竹野町教育委員会の松井氏来跡。
- 9月29日 空中写真測量の準備。共同測量社で補備測量を行う。県土地改良課の遠藤技師・市土地改良課両角・鍛柄技師来跡。
- 9月30日 空中写真測量を行う。
- 11月12日 周辺調査を終え、発掘調査を終了する。

#### 4. 調査組織

- ・平成8年度

調査主体者 両角徹郎（教育長）

事務局 宮下安雄（教育次長）

文化財課 矢嶋秀一（課長） 銀河幸雄（係長） 守矢昌文 小林深志 大谷勝己 小池岳史

功刀司 百瀬一郎 小林健治 柳川英司 大月三千代

調査担当者 百瀬一郎 柳川英司

調査補助員 武居八千代 牛山矩子 太田友子

発掘調査・整理作業協力者

今井ちよ 今井洋子 鵜飼澄雄 牛尼敬子 太田和美 大宮 文 小口淑子 河西けさ子  
河西竹春 河西保明 金子清春 木川文訓 北原きよゑ 栗原 昇 小平三行 小平義市  
五味計佐雄 塩原博子 篠原りか子 大勝弘子 大丸多榮子 田中敦子 田中主介 田中 進  
田中達朗 長田富佳 長田 瞬 長田 真 永由照幸 野澤みさ子 花岡照友 林 靖之  
原ちよ子 平尾弘子 福田幸宗 藤森あさ子 北條嘉久男 細田貴助 宮坂ちよ江 宮坂ひとみ  
目黒恵子 森 麗穂 森 大次 守矢ハツシ 柳沢 至 柳沢孝幸 柳沢九五子 柳半年子  
吉田勝太郎 吉田キヨ子 渡辺哲也

基準点測量：株式会社 両角測量

造構測量委託：朝日航洋株式会社

・平成9年度

調査主体者 両角徹郎（教育長）

事務局 宮下安雄（教育次長）

文化財課 矢崎秀一（課長） 鵜飼幸雄（係長） 守矢昌文 小林深志 大谷勝己 小池岳史  
功刀司 百瀬一郎 小林健治 柳川英司 大月三千代 河西克造（長野県埋蔵文化財センター派遣職員）

調査担当者 柳川英司 河西克造

調査補助員 武居八千代 向 和宣 牛山矩子

発掘調査・整理作業協力者

伊藤益郎 岩波ケサ子 鵜飼澄雄 太田和美 太田富希子 大宮 文 小尾勢一 河西保明 河西泰人  
金子清春 北沢もと 北原きよゑ 栗原 昇 小平長茂 小平 寛 小平三行 小平義市 五味一郎  
五味計佐雄 小松とよみ 田中 進 田中達朗 長田智子 永由照幸 野澤みさ子 萩原光哉  
花岡照友 林 靖之 原ちよ子 原 敏江 福田幸宗 藤森あさ子 北條嘉久男 目黒恵子 森 浩子  
森 圭子 守矢ハツシ 矢崎つな子 柳沢九五子 柳半年子 吉田勝太郎 吉田キヨ子 渡辺郁夫

基準点測量：株式会社 両角測量

造構測量委託：株式会社 共同測量社

・平成10年度

調査主体者 両角徹郎（～平成10年5月10日） 両角源美（平成10年7月31日～）（教育長）

事務局 宮下安雄（教育次長）

文化財課 矢崎秀一（課長） 鵜飼幸雄（係長） 守矢昌文 小林深志 大谷勝己 小池岳史  
功刀司 百瀬一郎 小林健治 柳川英司 大月三千代

報告書作成者 百瀬一郎 柳川英司

調査補助員 武居八千代

整理作業員 田中達朗 森 浩子

石器実測委託：株式会社 東京航業研究所

## 第 II 章 遺跡の概要

### 第 1 節 遺跡発掘の環境

#### 1. 遺跡の立地と地理的環境

師岡平遺跡(78)は茅野市豊平9003番地他に位置する。この場所はJR中央本線茅野駅から約4.5kmの所に位置している。遺跡のある尾根状台地の南西側には上古田区があり、東側には大日影区がある。本遺跡はこの2つの集落にはさまれた広い畑地のなかに所在する。遺跡の南西側には小泉山が、東側には大泉山がありこの2つの山にはさまれた形で遺跡が立地している。南側には八ヶ岳に水源を持つ柳川が流れている。この柳川は下流の鬼場で上川と合流し、諏訪湖に注ぎこんでいる。遺跡の北東方向を見ると蓼科山が、南側には南アルプスが、西側には茅野市街地が鬼場城(217)の張り出しと小泉山の間から見える。

本遺跡は標高940mの尾根状台地の上に広がっている。このような台地は、新八ヶ岳期の火山活動による北八ヶ岳火砕流流出期から溶岩丘群形成期までのウルム氷期以降の第四期更新世後期に形成された。これは、八ヶ岳から流れ出た火砕流堆積物や泥流堆積物や御嶽火山起源の新期テフラが交互に堆積して形作られたものである。このような地形が柳川などの小河川によって、手状に東西の細い谷に刻まれて田切地形となる。師岡平遺跡のある尾根状台地は柳川の第Ⅱ段丘面（中位段丘面）となっており、尾根の下部から上部まで約25mの比高差がある。この尾根状台地の南側は柳川沿いに平坦な地形となっており、第Ⅳ段丘面（低位段丘面）を形成している。

師岡平遺跡のある台地は大泉山の貫入によって分断された樅木方面から伸びる台地の末端に当たる。東の大日影集落の辺りから台地が広がり、威力不動尊がその最末端になる。

師岡平遺跡のある尾根状台地はとても広く北西側に深い谷が入り、この谷をはさんで久保御堂遺跡(313)がある。試掘調査や発掘調査の結果から見ると、この深い谷の他に台地上に小規模な谷がいくつか入っている。このような遺跡内の小規模な谷は、谷の上部に中世の遺構が検出されているため、比較的古い段階に埋没したことがわかる。地元の方の話によると場所によっては湿気があるということから、この湿気のある場所は小規模な谷であることがわかる。畑を湿らせる水気が小規模な谷を通り深い谷の所に集められ、一本松付近や谷の頂部から水が湧き出していた。この水は水量が豊富であり、谷の中の田を満たすほどの水量であった。一本松付近の湧水からは、威力不動尊へ引いたと思われる近代の水路が検出されている。

台地上は前述のとおり八ヶ岳の火砕流と御嶽火山の噴出物によって形成されたので、地山はロームである。腐植土による現地表面の黒上の堆積は浅く、浅い所で10cmも剥げばロームが露出してしまう所もある。八ヶ岳西麓はかなり広がっている場所であり、台地上は水性堆積もなく諏訪湖や山梨方面からの強風が直接吹き付け風化の度合が激しいことによるためである。本遺跡の辺りはほとんど南北からの風が吹いている。このような強風に対処するために八ヶ岳西麓では防風林が所々に植えられている。上下古田の集落は風よけのためか、台地南側の斜面に家を建てるケースが多い。本遺跡は中世の集落址であるが、現在の集落立地と異なっている所が非常に興味深い。



第1図 師岡平道跡位置図(1/25,000)



第2図 周辺の道路とその地理的位置(1/20,000)

## 2. 遺跡の研究史

師岡平遺跡の研究史 本遺跡は標高940mの所に位置する総面積60,000m<sup>2</sup>の遺跡である。この遺跡は今回発掘が行われるまでは一度も発掘されたことがなかったが、遺物が表面採取されたり、耕作中に土器が掘り上げられたりして古くから知られていた。『茅野市史 上巻』には「昭和三十年に上古田の小尾茂氏が自己所有の畠から耕作の際に縄文中期末葉の土器を発見したほか、地点は不明だが、前期末葉の晴ヶ峰式の深鉢型土器の胴下半部も発見されている。また、表面採取では前期末葉の下島式土器、中期の曾利式土器が発見されている。」とあり縄文時代の遺跡であるという記述がある。この『茅野市史 上巻』以前の昭和36年に刊行された『滋賀史跡要項』には「村岡平遺跡地 縄文時代」とあり、やはり古くから知られていたことがわかる。同書には旧古田村内に「北ノ平遺跡地 縄文時代」があったことが書かれているが、所在は不明である。『茅野市字名地図』によると久保御堂の東側に「北ノ原」や「北ノ原南通」、「北原」という地名が見られるため、久保御堂遺跡のことを指しているとも思われる。『茅野市史 上巻』記述の前期末葉の土器群は、師岡平・威力不動尊東遺跡の前期末葉から中期初頭の集落より掘り出されたものであると考えられる。

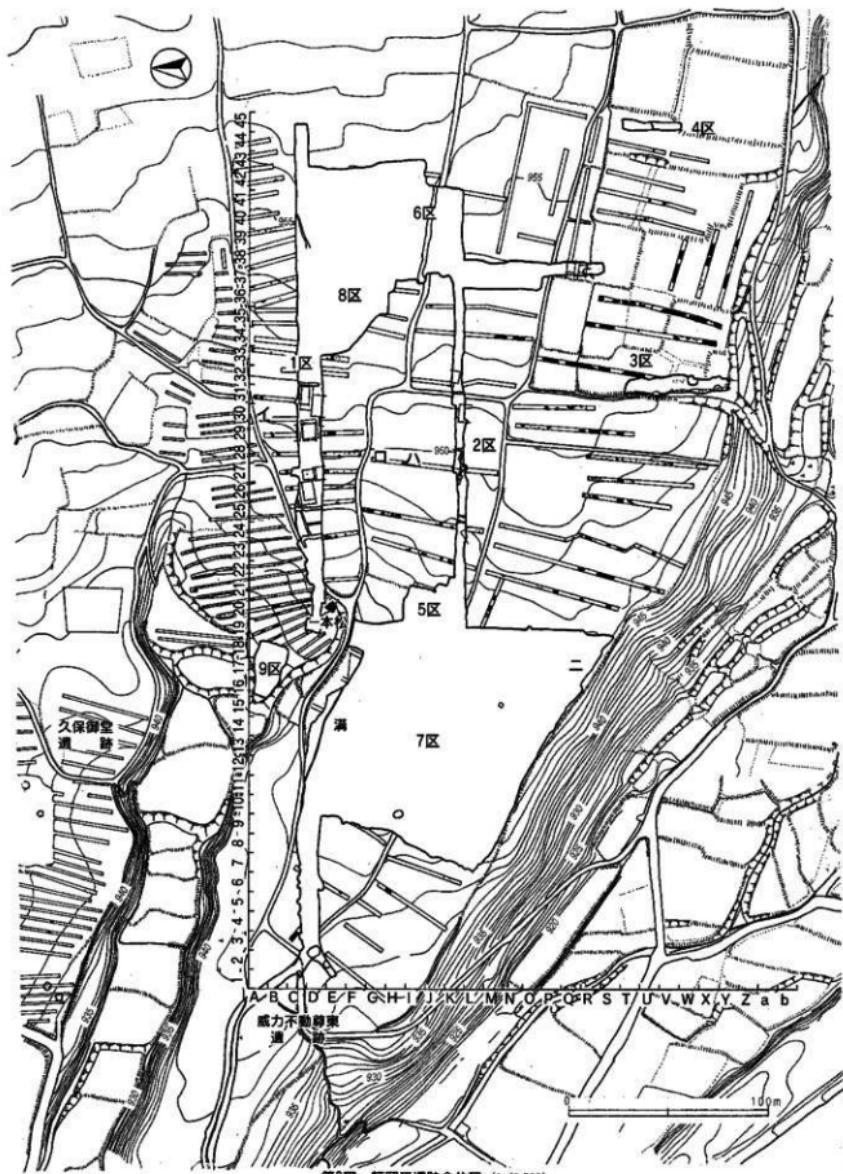
発掘調査前に行った表面採取によると中世の遺物がかなり拾え、中世の遺構の存在も予想された。中世の古文書に「村岡」の名が見られ、『茅野市字名地図』にも発掘調査区域が「村岡」という字名であるため、中世の「村岡」の集落であったのではないかと考えられる。本遺跡の名称は、『茅野市史 上巻』や平成3年作成の『茅野市遺跡台帳』では「師岡平」となっているが、古くからの字名をとるならば「村岡」の方が適当と考える。なぜ遺跡名が「師岡平」となったかは不明であるが、地元の人の中に「師岡平」の方が「村岡平」より古い地名であると言う人がいるので、地元にはそのような伝承があるのかも知れない。

師岡平遺跡周辺の遺跡 占田地区は圃場整備事業によって平成6年以来発掘が行われ、かなり多くの発見があった。この周辺の遺跡の状況について圃場整備事業以前の発掘から見ていただきたい。

上の平遺跡(166) 昭和22年に農道改修作業、昭和62年と平成元年には住宅建設、また平成6年には県営圃場整備事業によって発掘された。この遺跡は大泉山山麓の標高960mの所に位置する。これまでの調査では縄文中期末葉の住居址が7軒と落し穴1基、平安時代の住居址2軒が検出されている。平安時代の遺構からは石帶や炭化した木製檜といった注目すべき資料が出土している。

威力不動尊東遺跡(210) 平成9年に圃場整備事業によって発掘された。師岡平遺跡のすぐ西側に位置する遺跡で、師岡平遺跡と一体の落し穴と縄文時代前期末葉から中期初頭の遺跡である。縄文時代前期末葉の住居址1軒、中期初頭の住居址1軒、中期後半の住居址1軒、方形柱穴列2基、落し穴9基、土坑66基が検出されている。土坑より出土した遺物は前期末葉の物が多い。また、近代の溝も検出されており、これは師岡平遺跡の一本松から伸びている。

久保御堂遺跡(313) 平成7年に県営圃場整備事業によって発掘された。師岡平遺跡のすぐ北隣の遺跡である。縄文時代の落し穴17基・土坑14基、平安時代の住居址5軒が検出されている。落し穴は師岡平遺跡と共通する部分が多く、師岡平遺跡の落し穴とともに広い範囲で狩猟が行われていたことがわかる。伴う遺構は不明だが、表探資料として縄文時代早期の押型文土器と中期初頭の土器片が発見されている。押型文土器については師岡平遺跡3区でも確認されており、中期初頭については師岡平・威力不動尊東遺跡にも集落址がある。また、中世の遺物も若干表探された。久保御堂遺跡も威力不動尊東遺跡と同様に師岡平遺跡と一体か関係の深い遺跡と考えられる。



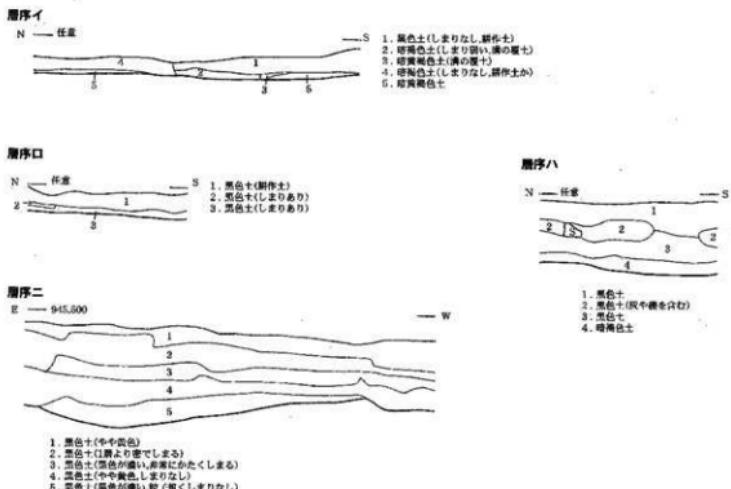
第3図 琵琶平遺跡全体図 (1/2,500)

# 第 III 章 発掘の立地と地理的環境

## 第1節 遺跡の層序

遺跡のある台地全体は、発掘前の状況を見ると、地面上は非常に平坦で段差が全くなかった。しかし、表土を剥いで見ると、現地表面とは異なる深い谷が入っていることがわかる。層序イと層序ロは尾根の頂部で、20cmほどでロームが露出する。しかし、層序ロの20m南側は黒色土が厚く1m以上の深さになる。この深い所は、地表面から30cmから40cmほどの所から中世と考えられる土坑や、火葬を行ったと思われる葬送施設があることが確認され、中世には現在と同じ地表面になっていたことが考えられる。以上のことから、平坦な現地表面の下に、隠れた谷が入っていることがわかる。この谷は一本松の南側まで続いている。一本松の南西側は尾根の一部が抉れていて、師岡平遺跡と久保御堂遺跡の間の谷になる。この谷を通って一本松付近で水が湧いていたと思われる。また、師岡平と久保御堂両遺跡の間の久保御堂寄りの所にもう1本深い谷があったことが試掘の結果確認されている。この谷の先端からはかなりの湧き水があり西側の谷の水田をすべてまかなくなっていた。

尾根の一部縁には、小さい谷が所々に入っている。層序ニでは、谷に黒色土が水平堆積していることがわかる。一度に埋まらずに、自然に堆積したようだ。層序ニの谷の縁から中にかけて、小さい落し穴が多く見られる。このような小さい谷を利用して、谷の下の方から獲物を追い込んだことが考えられる。黒土が深い場所は他に師岡平と威力不動尊東遺跡の間の南へ下りていく道沿いにある。このような深い黒土の所では遺跡が発見されていない。また、師岡平と威力不動尊東遺跡の境界も黒土がやや深めである。



第4図 遺跡の層序 (1/60)

## 第2節 1区の遺構

1区はC-D-19~45に位置し、道路造成のために調査することになった。南側の一部は6・8区と接している。遺構は中世の建物址が主体で、集落の一部が確認できた。他に縄文時代の落し穴と土坑を検出した。

### 1. 縄文時代の遺構

#### (1) 土坑・落し穴(第6図・図版5-5~8)

縄文時代の遺構は6基検出されている。土坑では1・2・3・288号土坑がある。1・2・288号土坑は後述する分類中では第Ⅰ群1類、3号土坑は第Ⅰ群2類に分類される。1・2・3号土坑からは遺物は発見されていない。288号土坑からは中期初頭の土器が出土している(図版5-6)。中世の土坑である287・769号土坑によって切られている。

土坑の他に、D-C-26より落し穴2基が検出されている。148・178号土坑とも、長楕円形の落し穴で、坑底ピットは148号土坑が2つ、178号土坑が3つである。両者とも後述する分類では第Ⅰ群1類A種に分類される。土層は両者とも三角堆土である。

### 2. 中世以降の遺構

#### (1) 挖立柱建物址・柱穴状の土坑

1区からは数多くの柱穴状の土坑が検出された。このような土坑をつなぐと方形に並ぶものがあり、建物址が10軒存在することが確認された。

##### 第1号建物址(第7図・図版3-4・4-1・2)

C-D-25・26から検出した建物址。建物址の北側は調査区外のため不明である。軸線方向はN-83°-Eを示す。1間の長さは約230cmで、おそらくこの建物の規模は東西方向5間、南北方向4間の長方形の建物と考えられる。北側は間数の合わない土坑が並ぶが、ここだけ建物の構造が異なっていることが考えられる。

##### 第2号建物址(第8図・図版3-4)

C-D-26から検出した建物址。軸線方向はN-7°-Wを示す。1号建物址のすぐ東側に位置し、軸線方向は1号に対しほば直角になる。1間の長さは約220cmであり、東西方向2間、南北方向4間の規模である。

##### 第3号建物址(第8図・図版3-4)

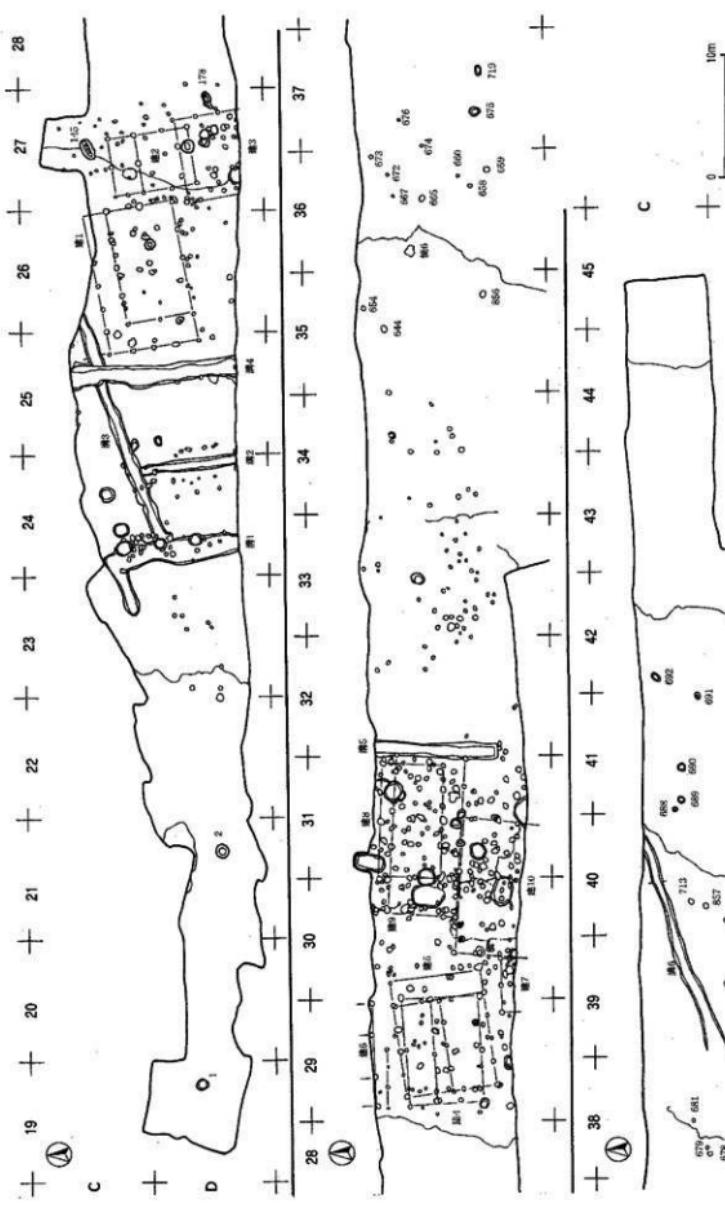
D-26から検出した建物址。南側は調査区外で不明である。2号建物址と重複しているが、切り合い関係が不明なので新旧関係はわからない。軸線方向はN-5°-Wで2号とほぼ同じで、1号に対して直角に配置する。1間の長さは約220cmであり、東西方向が3間であることだけはわかる。西側の柱穴についてはよくわかっていない。3号建物址の範囲内には多くの施土址が見られる。205号土坑はこれらの焼土址と一連のものではないかと考えられる。焼上址と建物址の関係についてはよくわかっていない。出土遺物はほとんどないが758号土坑からは黒寧元宝と永樂通宝が出土している。

##### 第4号建物址(第9図・図版3-5)

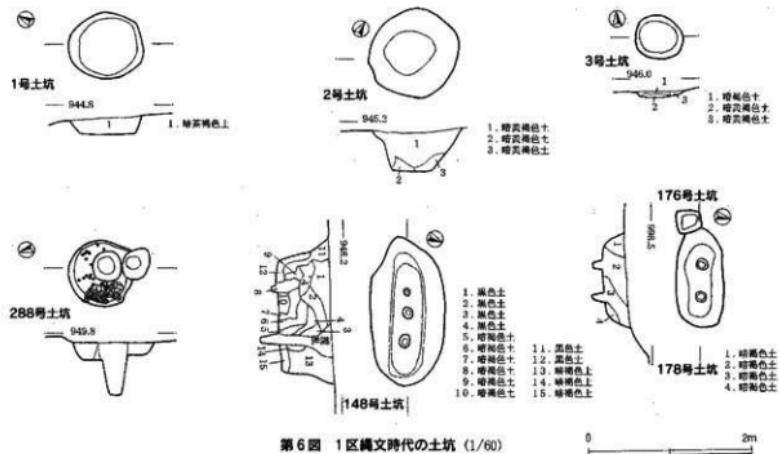
C-29・30から検出した建物址。5号建物址と重複している。軸線方向はN-88°-Eである。1間の長さは約220cmである。東西4間、南北3間の建物址と考えられるが、南北方向の柱穴で不明なものがある。

##### 第5号建物址(第9図・図版3-5)

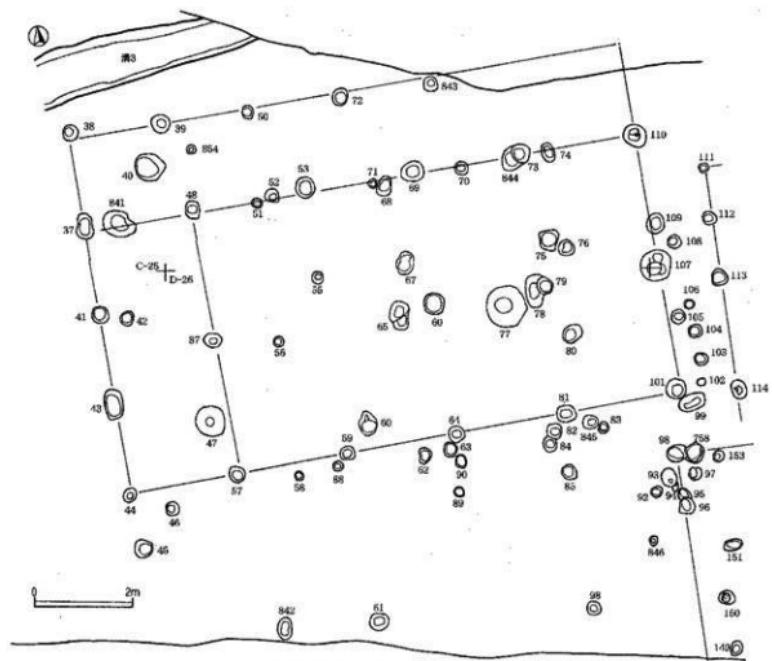
C-29・30から検出した建物址。4号建物址と重複している。軸線方向はN-83°-Eで4号と軸線が若干異なる。1間の長さは約200cm。規模は東西5間、南北4間で、東側は柱穴があまり見られないので構造が異なっているのではないかと考えられる。



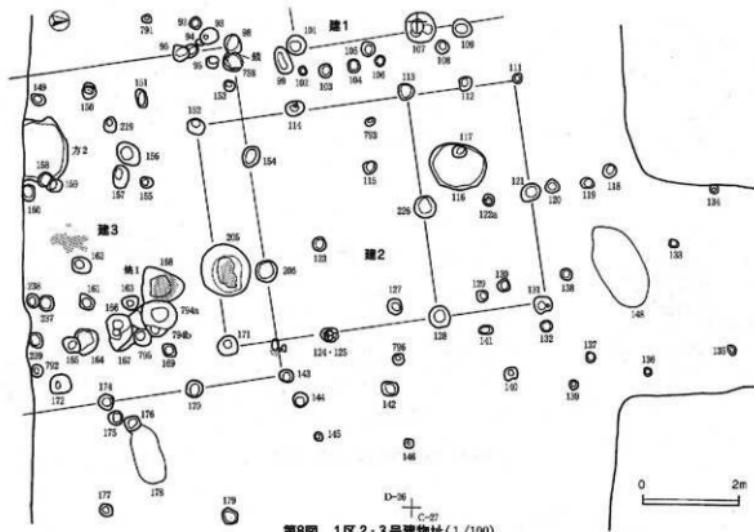
第5図 1区調査図(1/400)



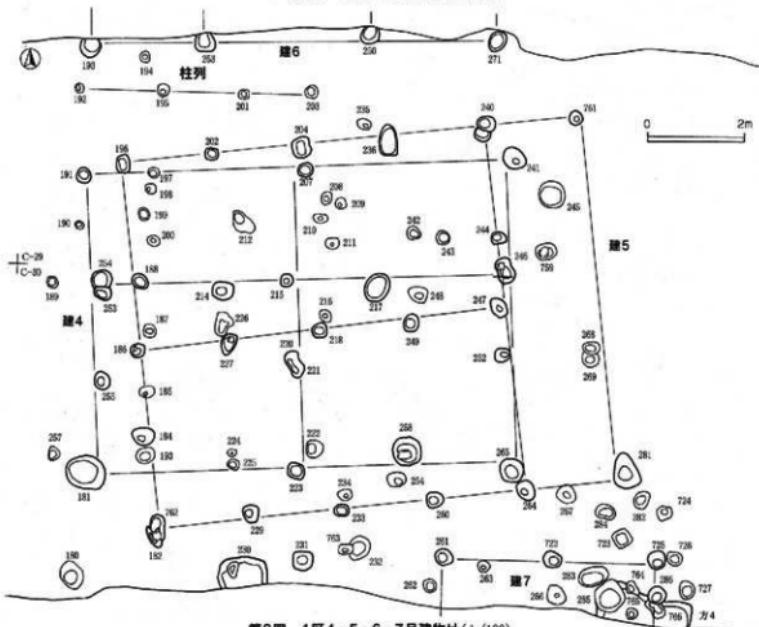
第6図 1区縄文時代の土坑 (1/60)



第7図 1区1号建物址 (1/100)

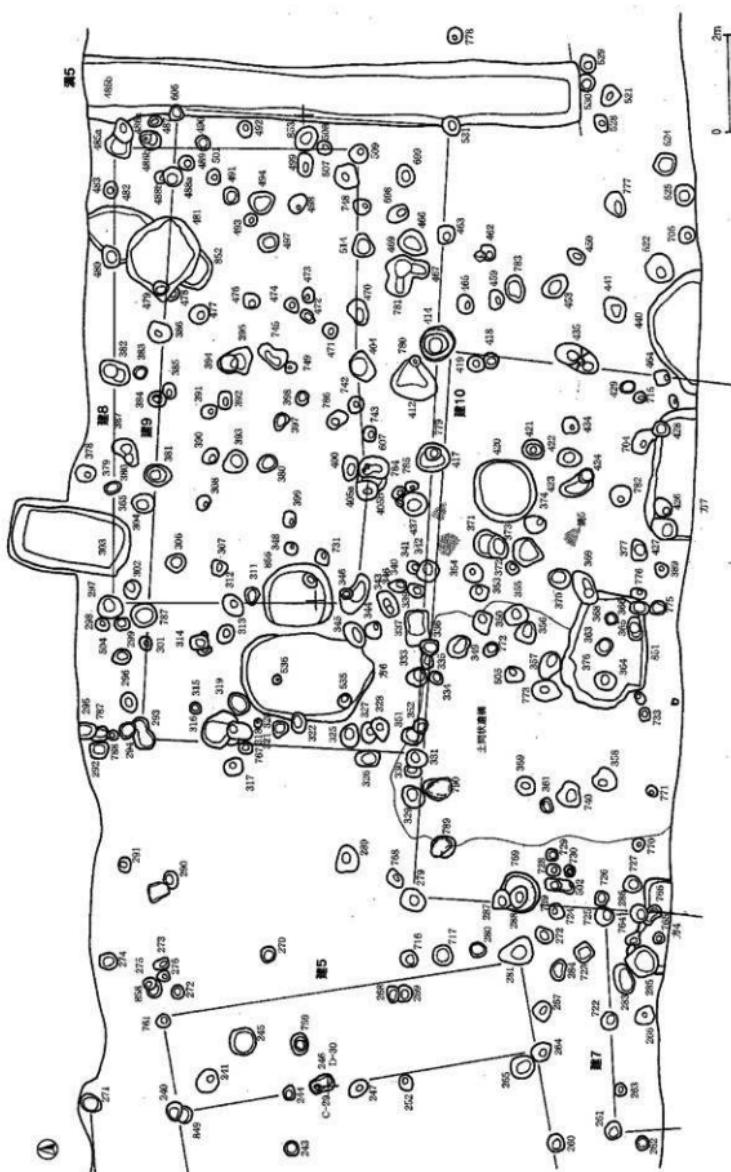


第8図 1区2・3号建物址(1/100)



第9図 1区4・5・6・7号建物址(1/100)

圖 10 圖 1 区 7·8·9·10 号地點 (1/100)



#### 第6号建物址(第9図・図版3-5)

C-29から検出した建物址で、4・5号建物址の北側に位置する。遺構の大半は北側の調査区外に出ているため詳細は不明である。軸線方向はN-89°-Wで4号建物址とほぼ同じである。1間の長さは約240cmで36号土坑と37号土坑の間は330cmほど離れている。規模は南北方向は調査区外のため不明だが、東西3間の建物である。

#### 第7号建物址(第9図・図版3-5)

D-30から検出した建物址で4・5号建物址の南側に位置する。これも遺構の大半が調査区外に出ているため詳細は不明である。軸線方向はN-89°-Eで4号建物址とほぼ同じである。1間の長さは約220cm、わかっているのは東西2間のみで他の建物址に較べるとかなり規模は小さい。

#### 第8号建物址(第10図・図版3-5)

C-D-31から検出した建物址で、9号建物址と重複している。調査区のかなり北側へ寄っているため、一部は調査区外に出ていると考えられる。軸線方向はN-89°-W。1間の長さは230cmで、規模は東西4間、南北2間である。

#### 第9号建物址(第10図・図版3-5)

C-D-30-31から検出した建物址で8号建物址と重複している。軸線方向はN-85°-Wで8号とほぼ同じ軸線である。1間の長さは約220cmで東西6間、南北3間の建物である。514号土坑付近から天聖元宝が出土している。

#### 第10号建物址(第10図・図版3-5)

D-30-31から検出した建物址で、8・9号建物址の南側に位置する。軸線方向はN-85°-Wで9号とほぼ同じである。1間の長さは約220cm。規模については遺構の南側が調査区外に出ているため不明であるが、東西方向は5間である。10号建物址に伴うかどうかはわからないが、中央よりやや西よりの所に土間状の堅緻な面が確認できた。また、所々に焼土址が散布している。420号土坑からは永樂通宝が、575-505号土坑付近からは治平元宝が出土している。

#### 柱列(第10図・図版3-5)

C-29から検出した。1間の長さが約160cmと狭いため、建物址の一部か他の構造物ではないかと考えられる。軸線方向がN-89°-Wと4・6号建物址とほぼ同じため、どちらかの建物址の一部の可能性もある。

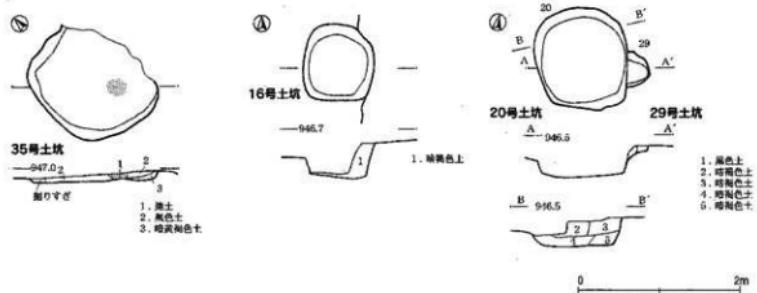
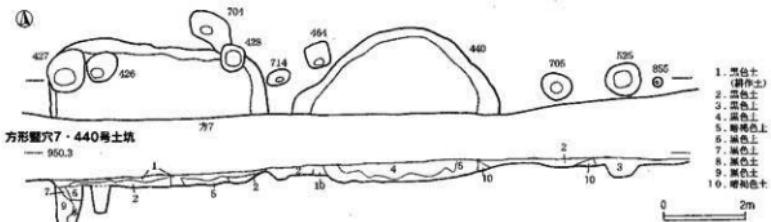
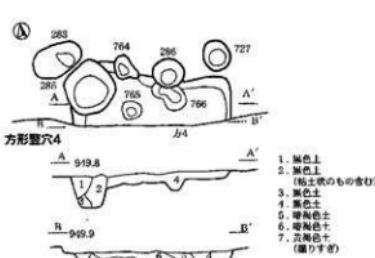
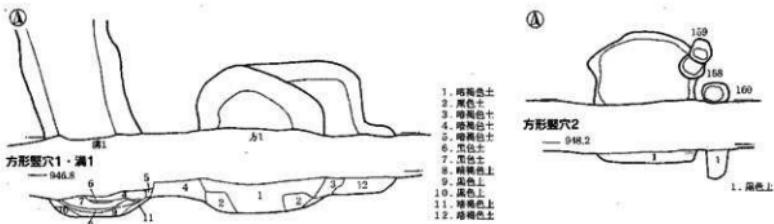
#### (2) 方形窓穴・土坑・焼土址

方形窓穴・土坑・焼土址は本来異なる形態の遺構であるが、後述するように今回調査したときの各遺構の定義が曖昧だったので、一括して述べることにした。また、焼土址については遺構内からのものも焼土址としているので、ここで述べたい。

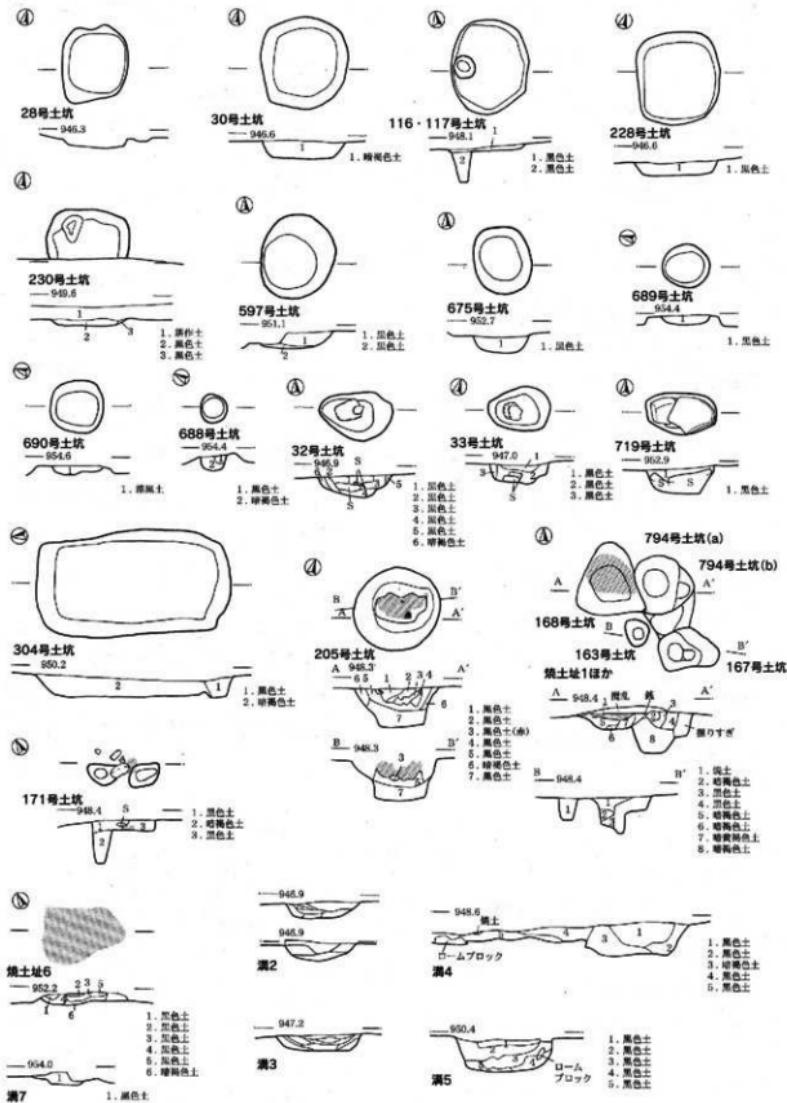
方形窓穴(第11図) 本来、方形窓穴というべき遺構は7区で出土している形態を指していると考えるが、平面形が特徴的であるので、特に土坑を分けて方形窓穴を設けた。方形窓穴は304号土坑を含めると6基検出されている。完全に検出されているものが少ないため規模や性格は不明であるが、形状が2区の方形窓穴と似ているため、同じ種類のものと考えられる。

土坑(第11-12図・図版4-5) 柱穴状の土坑の他に大きめの土坑も出土している。16-20-28-30-35-116-228-230号土坑は45~60cm程の大きさで、平面形は方形に近いので、方形窓穴の範疇に入ると思われる土坑群である。掘り方はしっかりとしている。中から遺物は全く出土していないが、35号土坑のように焼土を伴うものもある。この他に32-33-719号土坑のように平面形が不整形な長楕円形で中に平石を伴うものがある。

焼土址(第12図・図版4-4) 焼土址は第2・3・9・10号建物址付近で数ヶ所確認できた。3号建物址の所で述べ



第11図 1区方形窓穴・溝(1)・土坑(1) (1/60)



第12図 1区土坑(2)・焼土址・溝(2)(1/60)

たように建物址に伴うものかはよくわからない。中には20号土坑や1号焼土址のように土坑中にあるものもある。唯一独立した焼土址と思われるのは6号焼土址で、土坑を伴わない。出土遺物は1号焼土址から元豊通宝が出土している。

### (3) 溝址(第5・10・11図・図版4-6・7・5-1~4)

1区から溝は6本検出された。そのうち建物址とほぼ同じ軸線を持つのは1・2・4・5号溝址で、3号溝址を切っている。3号溝址は発掘直前まで使用していた道路と平行しており、試掘の成果と併せて考えると200m以上の長さの溝であると考えられる。溝6は他の溝に較べて掘り方がはっきりとせず、途中で消えてしまっている。

## 第3節 2区の遺構

2区はK-L-22~37に位置し、水路敷設のために発掘を行った。東は6区に、西は5区に接している。内容は1区同様建物址主体で、1区とともに中世の集落址の一部であると考えられる。

### 1. 繩文時代の遺構

#### (1) 土坑(第20図)

M-28-29から79号土坑が1基発見された。平面形は隅丸長方形。掘り方がしっかりとしており、断面形には中段がある。坑底ピットは検出されていない。後述する落し穴の分類では第1群1類A種に類似しているが、異なるタイプの落し穴と考えられる。

### 2. 中世以降の遺構

#### (1) 掘立柱建物址・柱穴状の穴・柱穴列

2区は1区同様、多くのピットが検出されており、中には直線や方形に並ぶものがある。調査区が狭いため直線に並ぶピットも建物址の柱穴と考えられるものもある。2区では5軒の建物址が確認できた。

#### 第1号建物址(第14図)

K-22で確認された。検出できたのは3本の柱穴のみで、北側は調査区外で西側は耕作により失われていた。1間の長さは約200cmである。軸線方向はN-76°-Wを示す。時期については遺物が伴わないので不明である。

#### 第2号建物址(第16図・図版6-5)

K-L-28から検出された。227号土坑が溝4に伴う疊で覆われていた所から、溝4より古い遺構であると考えられる。軸線方向はN-80°-Wを示す。1間の長さは約230cmである。付近の224号土坑からは骨粉が検出されている。また、227号土坑から多くの鉄滓が出土した。この土坑からは砂を検出している。

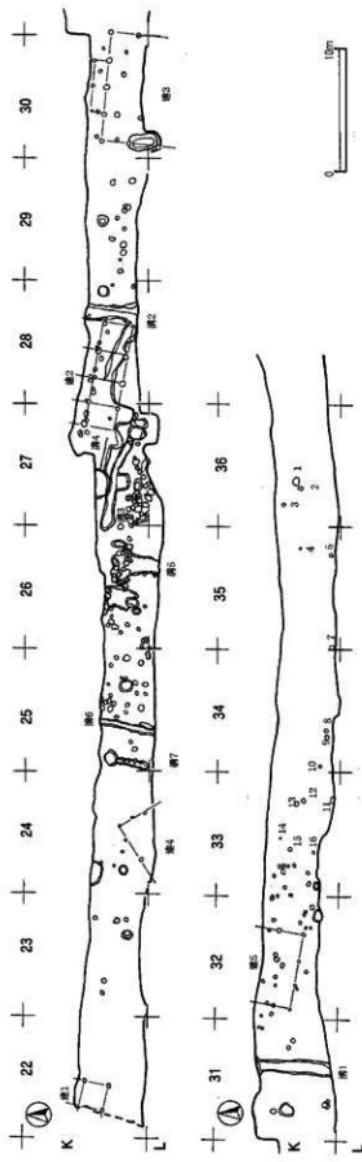
この建物の時期については、直接この遺構に伴う遺物がないので不明だが、古瀬戸の瓶子頭部破片が付近から出土していることから室町時代の建物址の可能性がある。

#### 第3号建物址(第17図・図版6-6)

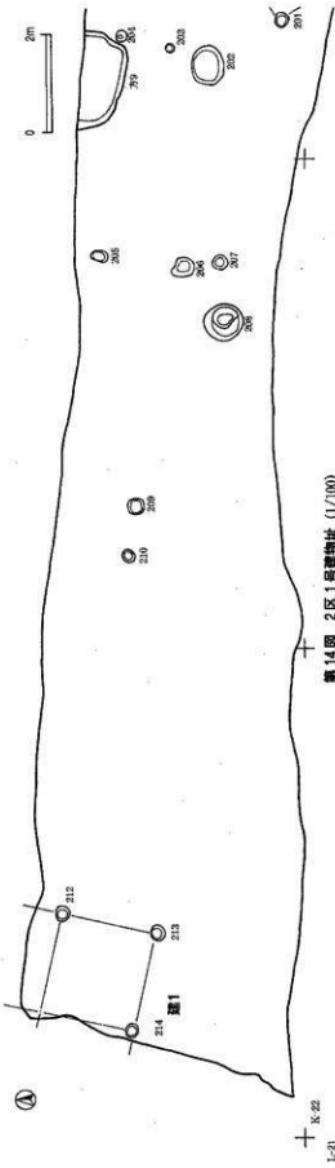
K-L-30より検出された。建物の南側は調査区外で不明である。1間の長さは約220cmで軸線方向はN-5°-Eである。70・253・254号土坑が張り出しているように見える。また68・69・72・73・77・75・81・83号土坑が方形に並ぶため、建物の一部の可能性があるが、3号建物址に伴うものなのか、別の建物なののかは不明である。

#### 第4号建物址(第15図)

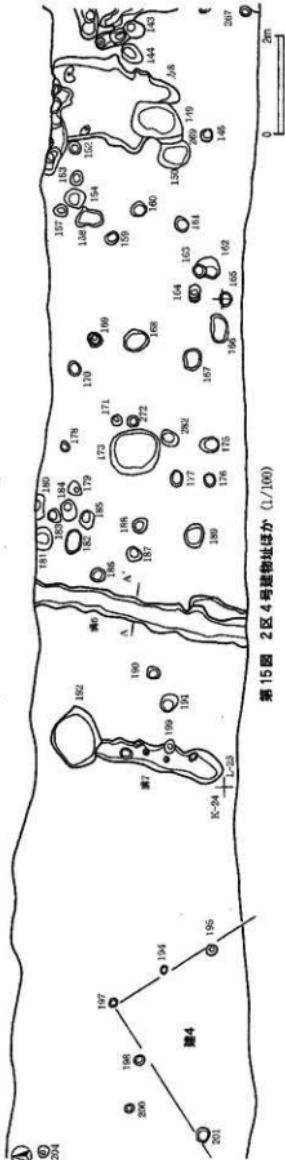
K-L-24より検出された。建物の南側は調査区外で不明である。1間の長さは約120cm、長軸はN-56°-Eで



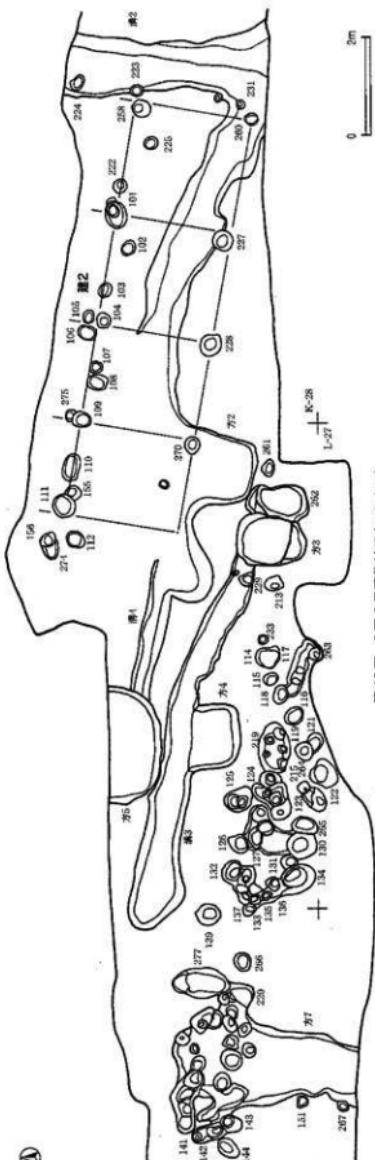
第13图 2区全剖面图 (1/400)



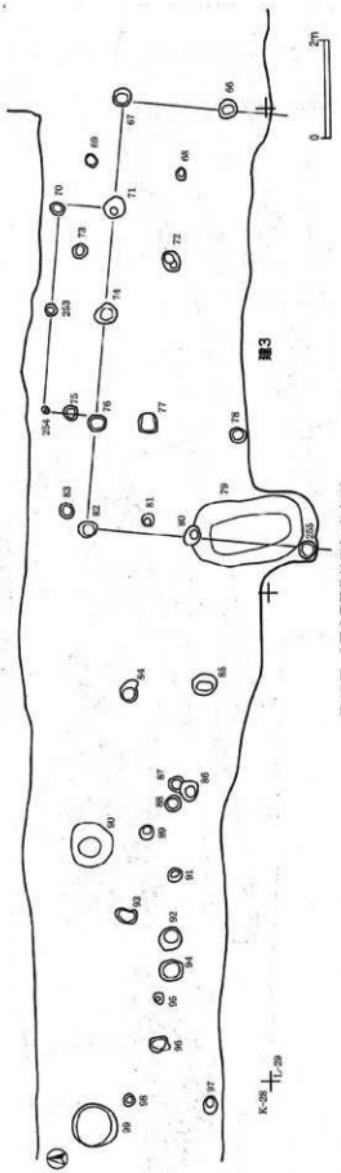
第14图 2区1号断面图 (1/100)



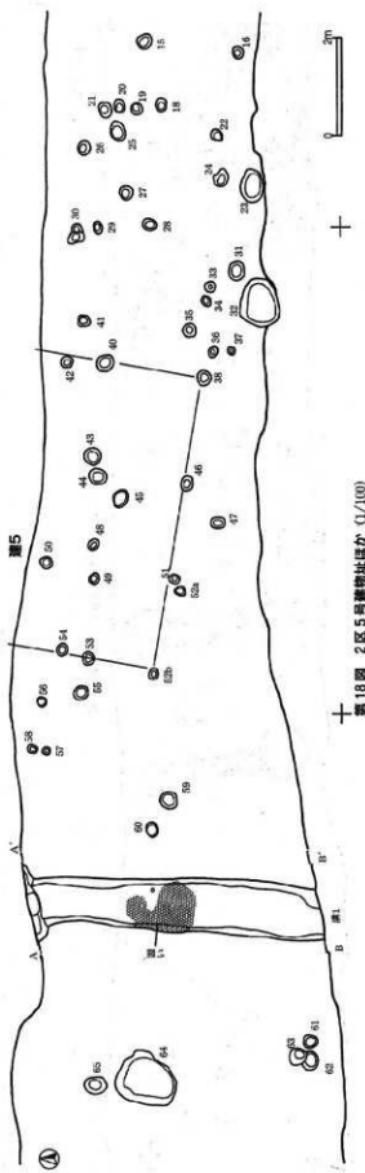
第15圖 2區4號建物址地圖 (1/100)



第16圖 2區2號建物址地圖 (1/100)



第17図 2区3号植物址地 (1/100)



第18図 2区5号植物址地 (1/100)

他の建物址と規模と軸線方向が異なる。

#### 第5号建物址(第18図・図版6-7)

K-32より検出された。建物の北側は調査区外で不明である。1間の長さは約200cmであり、軸線方向はN-10°-Eである。

#### (2) 方形堅穴・土坑(第19-20図)

方形堅穴 方形堅穴は7基検出されている。方形堅穴は形状から次の2群に分けることができる。

第Ⅰ群 形状が方形・長方形の方形堅穴。掘り方がしっかりしていて壁の立ち上がりがはっきりとわかり、底面は平らである。2・3・4号と5・9号方形堅穴はもしかしたら2つのタイプに分けることができるかもしれない。

2・4号方形堅穴はそれぞれ溝4と3に切られている。また、5号方形堅穴は溝4を切っている。2号方形堅穴は60cm大の礫を伴っている。4・5・9号方形堅穴は出土遺物が特がない。2号方形堅穴は2つの方形堅穴であり、東側が西側を切っている(第19図・図版7-5~8)。この方形堅穴は他のものとは異なり、銭が79枚出土している。出土上状態は土坑全体から出土しており、位置も高さもまちまちである。銭の内訳は元豊通宝10枚、6枚が治平元宝・元祐通宝、5枚が開元通宝・至道元宝・皇宋通宝、3枚が嘉祐元宝・熙寧元宝・政和通宝・2枚が天聖元宝・聖宋元宝、1枚が太平通宝・咸平元宝・絹符元宝・紹符通宝・天禧通宝・景祐通宝・紹聖元宝・淳熙元宝・洪武通宝・永樂通宝、一部または全文解読不明が18枚である。最も新しい永樂通宝が1408年初鋤なのでこの土坑は1408年以降に作られたと考えられる。

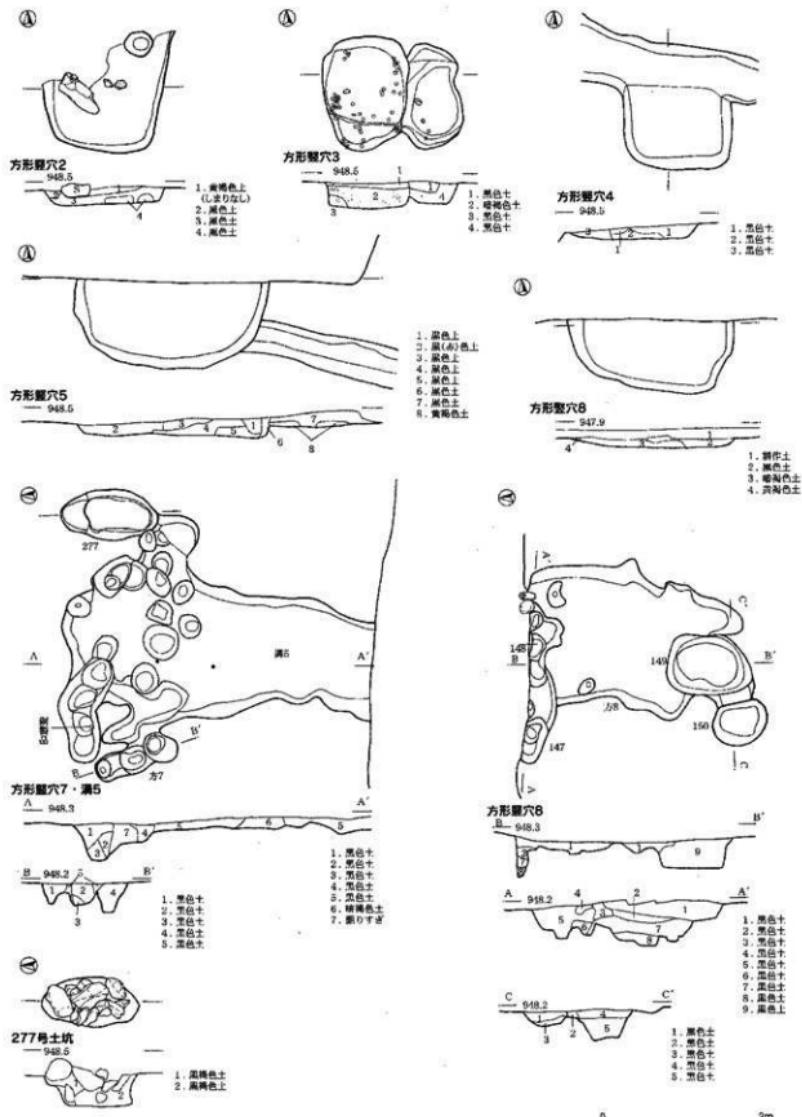
第Ⅱ群 形状があまりはっきりとせず、柱穴状の土坑を多く伴う方形堅穴。7号方形堅穴は溝5に伴う遺構ではないかとも考えられる。7号方形堅穴の柱穴状の土坑より直徑4.9cm大の鉢状銅製品が出土している。8号方形堅穴は北側が調査区外に出ているためによくわからないが、147-148号土坑とした所も別の方形堅穴の可能性がある。掘り方が浅く、ガラスなどが溝5から出土しているなど非常に擾乱を受けている。8号方形堅穴が切っている149号土坑から大窯期と考えられる天目茶碗が出土している。

第277号土坑(第19図・図版7-3-4) K-26より検出された。7号方形堅穴を切っていると考えられる。楕円形で掘り方がしっかりとし、ある程度の深さを持っている。45cm大の石が土坑全体に埋まっていた。石が大量に投げ込まれており、6区の第Ⅰ群2類と同種の土塙墓と考えられる。しかし人骨の出土は見られなかった。出土遺物は土坑中より中世常滑焼窯の破片と編み石がある。

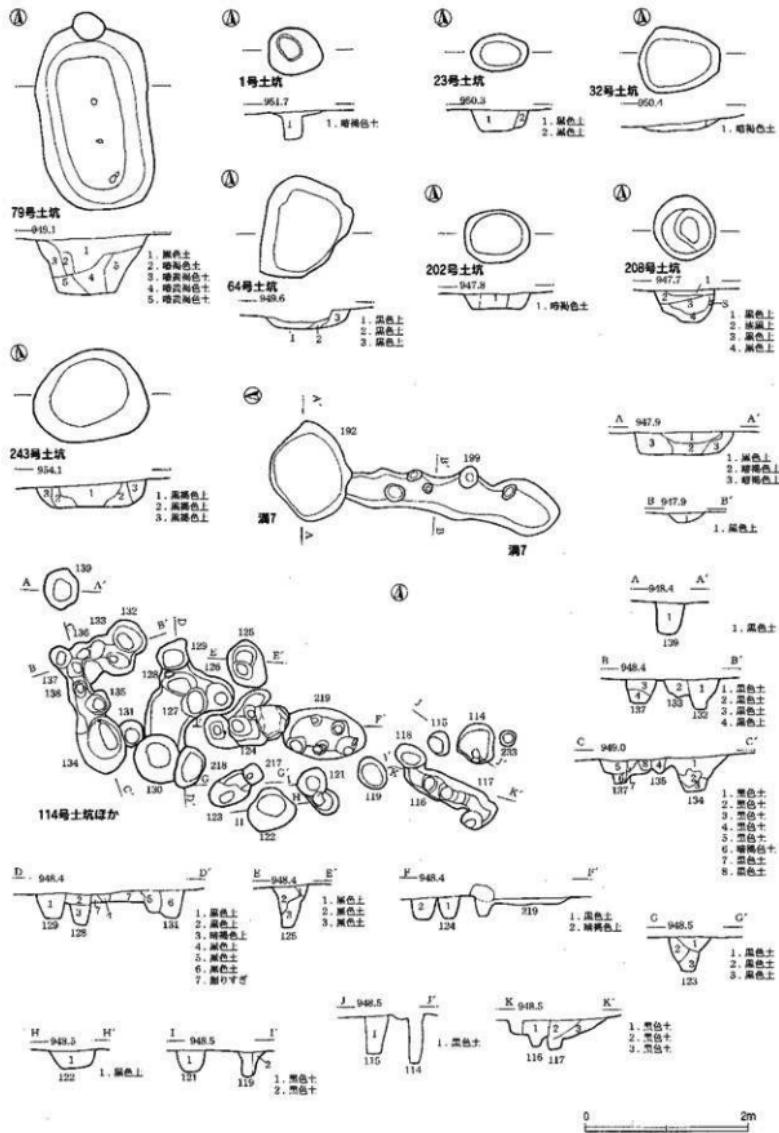
#### (3) 溝址(第15-16-18-21-22図・図版6-8・7-1-2)

2区では7本の溝址が確認されている。南北方向に走るのは1・2・6・7号溝址で、東西方向でやや斜めになっている溝が4・5号である。2号から4号が分岐しているように見える。1号は発掘直前まで使用していた道と平行し、1区5号溝とほぼ同じ位置にある。溝中に堅緻な面が見られた。2号溝は1号溝に平行している。溝中から3本の木杭が腐らずに出土している。

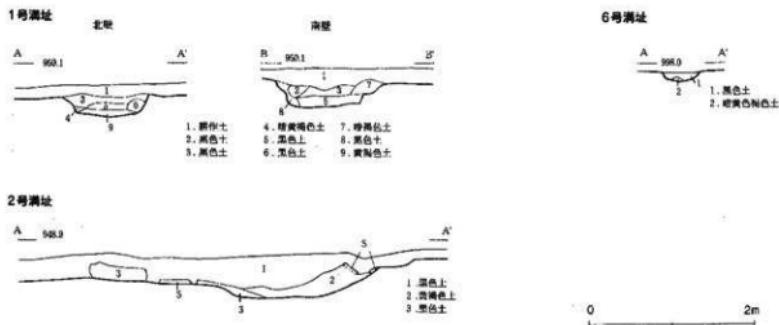
溝4は護岸をしたのだろうか大小さまざまな大量の礫を伴い、西側は5号方形堅穴に切られている。出土遺物が多く、近世の陶磁器が多く見られるが、中に大窯期の常滑焼窯の破片や小皿などが出土している。5・7号は当初溝ではなく擾乱と考えていたが、7号方形堅穴や192号土坑が遺構と思われたので、これらに関連する溝と考えた。



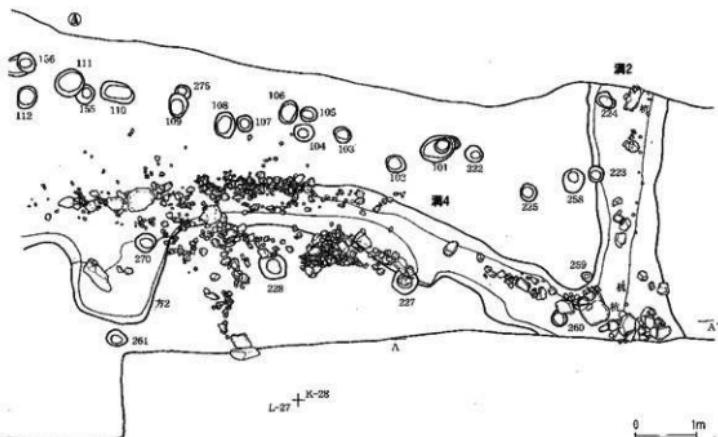
第19圖 2區方形窯穴(1) (1/60)



第20圖 2区方形竖穴(2)・土坑 (1/60)



第21図 2区溝址土層探査図(1/60)



第22図 2区2・4号溝址ほか(1/80)

#### 第4節 3区の遺構

発掘調査区として設定したのは尾根の肩に当り、水路工事により削られることになった旧水路東側の水田で、調査区の外周は北側を水路が通り、北西隅でL字に曲がり西側を流れ、南向きの急斜面を上古田集落の東側に流れ落ちており、東側は埋め土保存で発掘対象外となっている。長さ約50m、幅約5~7mである。水田の床土を剥ぐとなだらかな南向きの斜面で、調査区の中央付近に西側の水路に直行する新旧2本の水路が埋設しており、中から近現代の陶磁器に混じて角がローリングを受けて丸くなったり縄文土器、内耳土器の破片が出土した。

#### (1) 住居址

住居址としたものは5ヶ所あるがいずれも部分的な調査ではっきりしたプランは不明である。住居番号の設定は南側から付けている。

##### 第1号住居址（第23図2-1-2・図版8-3-4）

X-31を中心とするなだらかな南向き斜面に位置し、西側半分が水路により削られた住居址である。規模は長径376cm以上を測る。現存していた最大壁高は北側で6cmを測り、浅い周溝が残存している。床面は硬く締まった部分もあるが全体的にはやや軟弱である。主柱穴となるものは2本検出している。主柱穴は床面からの深さが約50cmと深く壁面も堅緻である。炉は底部の焼上だけを検出しており、西側半分は削られている。遺物は炉東側の床面上から凹石が出土しており、床直上からは縄文時代中期末の深鉢底部が出土していることから本址はこの時期に帰属すると考えられる。

##### 第2号住居址（第23図3・図版8-5-6）

第1号住居址の東側、X-32を中心として位置する住居址である。本址東側約半分は盛土で保存されるため調査区外になっている。遺構は床が耕作により削平されているため検出したのは340cm離れた2本の主柱穴と炉の焼土だけである。規模は周溝もないことから不明である。主柱穴は削平面から約30cmの深さを持っている。炉は底部の焼土径30cmを検出しただけである。遺物の出土はなかったが保存部分の耕作土内から縄文時代中期後半の土器片が表面採取されたことから同期の住居と思われる。

##### 第3号住居址（第24図1-1-2・図版9）

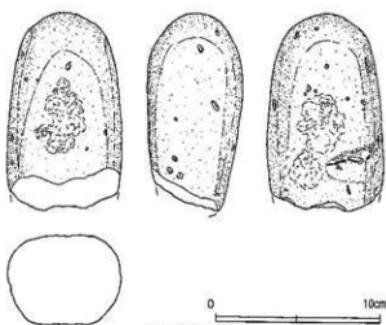
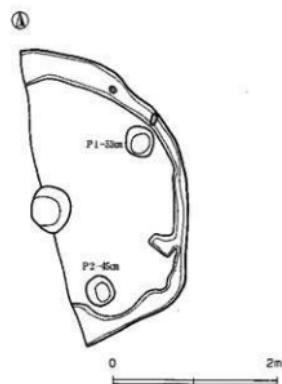
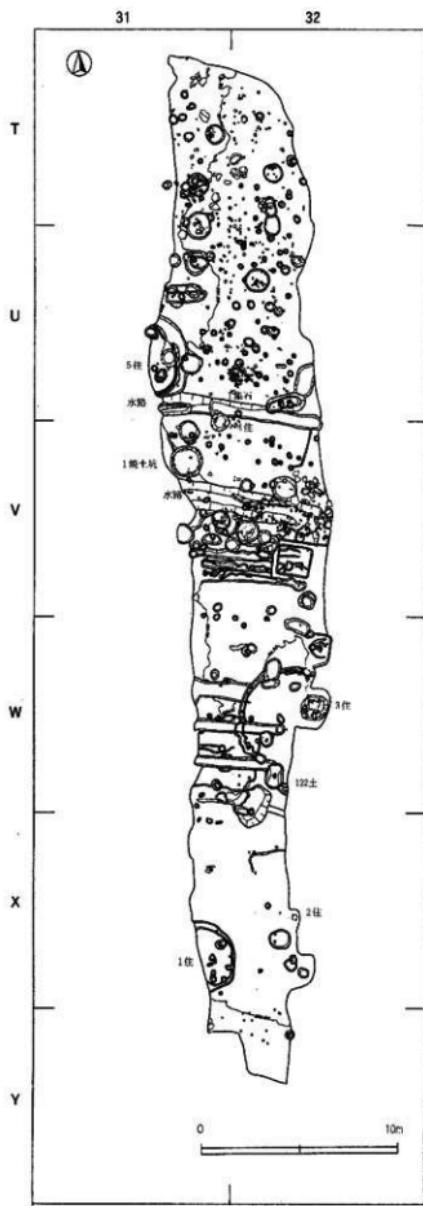
第2号住居址の北側、W-32を中心とする位置にある。本址も第2号住居址同様東側約半分は盛土で保存されるため調査区外になっている。また耕作による擾乱と本址以外の遺構の切り合いも多い。規模は長径376cm以上、現存している壁の最大高は北西側で17cmを測る。壁面は周溝が巡っているため締まりは良好で、切り合いにより残存していない所もあるが、ほぼ半月形に検出している。床面は凸凹が多いが、締まりは良好である。主柱穴はP1・P2・P3・P4の4本を検出しておりP1とP3、P2とP4が時間差を持って対になると思われる。床面からの平均の深さは74cmを測り、壁面底面とともに極めて堅緻に締まっている。炉は縦横ともに120cmを超える、方形を呈する石圓炉で東側の炉石は抜かれており、底面は厚さ6cmの燒土が形成されている。炉内からは曾利IV式期の土器が3個体以上出土していることから同期に帰属する住居である。本址北側で破砕された曾利IV式期の土器片が集中して出土しているが、3号住居址内から出土している土器との接合関係はない。遺物は縄文時代中期後半の土器のほかに打製石斧、黒耀石片などが出土している。

##### 第4号住居址（第24図2）

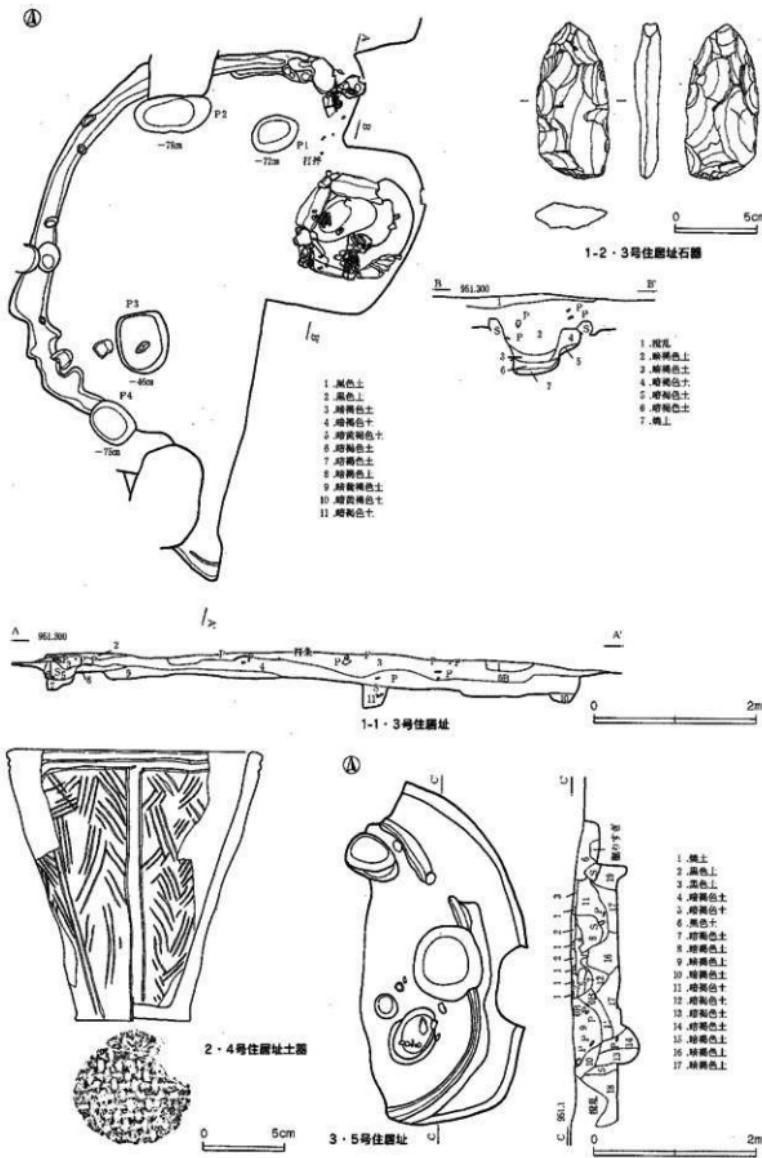
第1号住居址の北側、V-31に焼土址を検出している。焼土の北側は堰によって削り取られ、南側は土坑と切り合いさらに耕作により削られ床も判明しないため柱穴の特定ができずプラン、規模も不明である。遺物は焼土の南側170cmから曾利V式期の深鉢が出土している。

##### 第5号住居址（第24図3・図版10-1）

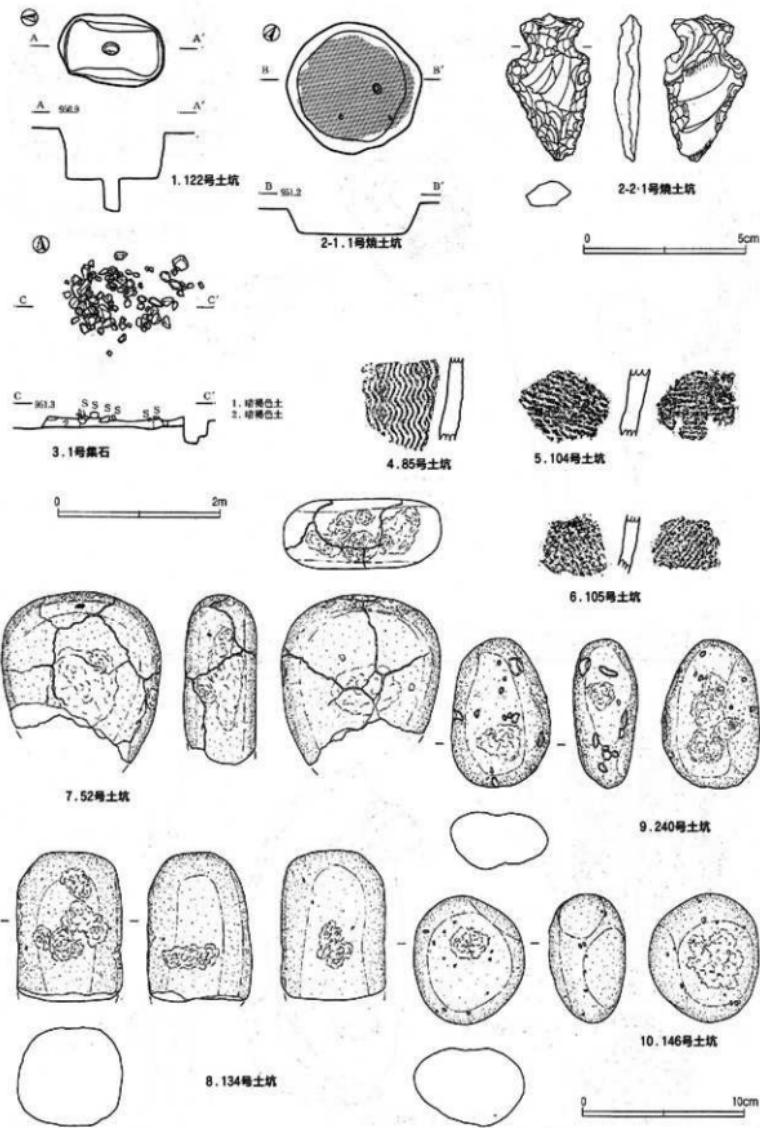
第4号住居址の北東側、U-31を中心に位置している住居址である。堰により西側の半分以上が削られて失われている関係から規模は径427cm以上となること以外は不明である。現存していた最大壁高は東側で56cmを測り、深さが10cm以上の周溝が残存している。床面は硬く締まり、主柱穴となるものは2本を検出している。主柱穴は床面からの深さが約80cmと深く、底面・壁面とも堅緻である。炉は西側の削られている所にあったと思われるが痕跡も確認できなかった。遺物は縄文時代中期後半の土器片が多いが床直上から曾利I式期の深鉢の把手が出土していることから同期の住居としたい。また凹石が柱穴内から出土している。



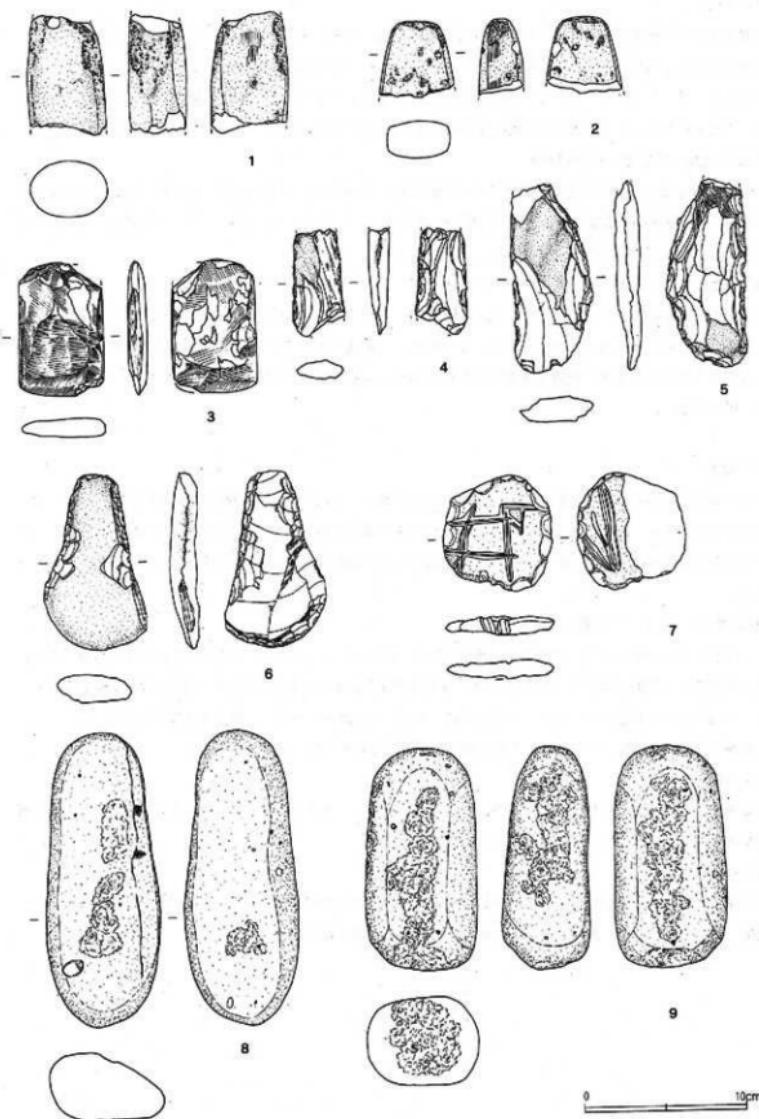
第23図 3区遺構配置図(1/250), 1号住居址(1/60)・同石器(1/3), 2号住居址(1/60)



第24図 3区3号住居址(1/60)・同石器(1/3)、4号住居址土器(1/3)、5号住居址(1/60)



第25圖 3區 122號土坑(1/60)、1號燒土坑(1/60)・同石器(2/3)、遺構內遺物(1/3)



第26図 3区遺構外出土遺物(1/3)

## (2) 土坑

調査区が水田の跡であるため土坑として取り上げたものは明らかに耕作跡とわかる溝跡を除き、人為的に土中へ穿たれている穴のすべてを便宜的に土坑としている。土坑番号は検出順に122番まで付けてあるが住居の柱穴の一部にも土坑としての番号が付いているものがある。柱穴以外の土坑で調査区内において規則性をもって並ぶものではなく土坑個々の詳細は後日稿を改めるが特色ある土坑を2基だけ記しておく。

### 第122号土坑（第25図3・図版10-3）

W-32を中心として3号住居址内に切り合ひ位置する。上面は平んだ隅丸長方形で長径113cm、短径87cm、深さ67cm、坑底は四隅が広がる分鋼形を呈し中央に長径21cm、短径15cm、深さ26cmのピットがある。形状から落し穴と思われる。遺物の出土はなかった。

### 第1号焼土坑（第25図2-1・2・図版10-3）

4号住居址の南西側、V-31に位置する。長径164cm、短径160cm、深さ54cm、平面形は円形で断面は桶形を呈する。底面、壁面とも硬く締まっており、土坑底面から壁面にかけて強い加熱による赤変が観られるが、覆土内からの焼土と炭化物は極微量を認めただけである。遺物は黒耀石の石匙が出土しているが加熱による発泡は観られない。

## (3) 集石

3区で検出した石材は師岡平遺跡全体からみてもかなり多い。これらの多くは水路の近くから見つかっており、水田造成時に集められたと考えられる。遺物の中に縄文時代後期の土器があることから石材の中に敷石住居に用いた可能性が高いものもあるが、住居址と確認できる遺構の検出には至らなかった。集石としたのは1基である。

### 第1号集石（第25図3・図版10-5）

3号住居址の北側、U-31に位置する。長径165cm、短径120cm、平面は疎らな所もあるが梢円形を呈する。掘り方は見られず礫の堆積は一層だけである。主構成は安山岩系の河床礫で97点から成り、拳大のものが多く、中には加熱により赤色に変化したり、ひび割れが入ったりしたものもあり、軽石も2点含まれている。

遺物は黒耀石の石匙が出土しているが加熱による発泡は観られない。

## 縄文時代前期以前

遺構に関係する遺物は縄文時代中期以降のものがほとんどであるが2片の表裏縄文土器（第25図5.6）と押型文土器（第25図4）1点が出土しているので図示しておく。

## 縄文時代後期以降

住居に伴う遺物は前述のとおりだが遺構外を含め他に縄文時代後期の土器片や、平安時代の灰釉陶器の破片、鐵鎌、中世の内耳土器、カワラケ、天目茶碗、大窯期の陶器の破片等も出土している。

## 第5節 6区の遺構

6区はD～R-37～43に位置し、圃場の工事によって削平される部分と道路造成のための部分の調査を行った。北は1区に、西は2区に接している。南側からは縄文時代中期後半の集落の一部が検出された。また、ここからは中世の建物址も確認されている。溝の北側には中世の墓域が展開している。

### 1. 縄文時代の遺構

#### (1) 住居址

##### 第1号住居址(第31図・図版12-1・2)

縄文時代の住居址はR-37-38より1軒検出された。壁の立ち上がりは明確ではなく、周溝なども発見することができなかった。やや残存していると思われる掘り方から考えると、平面形は方形に近い形であると思われる。柱穴は付近の中世の建物址と重複していて明確にはわからなかった。炉はおそらく住居址の中央部よりやや北側へ寄った場所にあり、四角く最大40cm大の石で囲まれている。炉の南側より埋甕が出土している。この埋甕の西北側から堅緻な面が確認された。埋甕の北側には40cm大の円碟や角碟が出土している。この住居址の時期は埋甕から曾利Ⅴ式期と考えられる。

#### (2) 土坑・落し穴・焼土址

土坑(第29-30図・図版12-3～13-4) 縄文時代の土坑は中期後半のものが10基検出されている。97号土坑をのぞいてN・O・P-37-38を中心的に検出されている。土坑上部長軸が123cm～216cm、底部長軸が77cm～137cmと大きい土坑で、深さも56cm～136cmと深く掘り方もしっかりしている。土層は三角堆土である。断面形は土坑の途中で中段がつき、中段より上部はラッパ状に広がり下部は袋状になっている。遺物の出土位置はいずれも土坑の中央部で、土坑底面よりかなり高い位置で出土している。例外は25号土坑で、土坑上面は土坑を再び掘り返して、わざわざ黒耀石のチップを投げ込んでいた。土坑の中程からは上器片が多く出土し、底部直上からは曾利Ⅲ式期の土器の大破片が検出されている。各土坑の時期は、遺物から27-39号土坑が曾利Ⅱ式期、24-25・26-48・194-196-202号土坑が曾利Ⅲ式期となっており、曾利Ⅱ式期からⅢ式期にかけて作られた土坑と考えられる。落し穴(第30図・図版13-5・6) 落し穴は28号土坑がK-37、86号土坑がF-39で出土している。37号土坑は6区で述べる分類によると第Ⅱ群1類となる。86号土坑は第Ⅰ群1類となる。両者とも単独で出土しており、他の落し穴との関係は不明である。

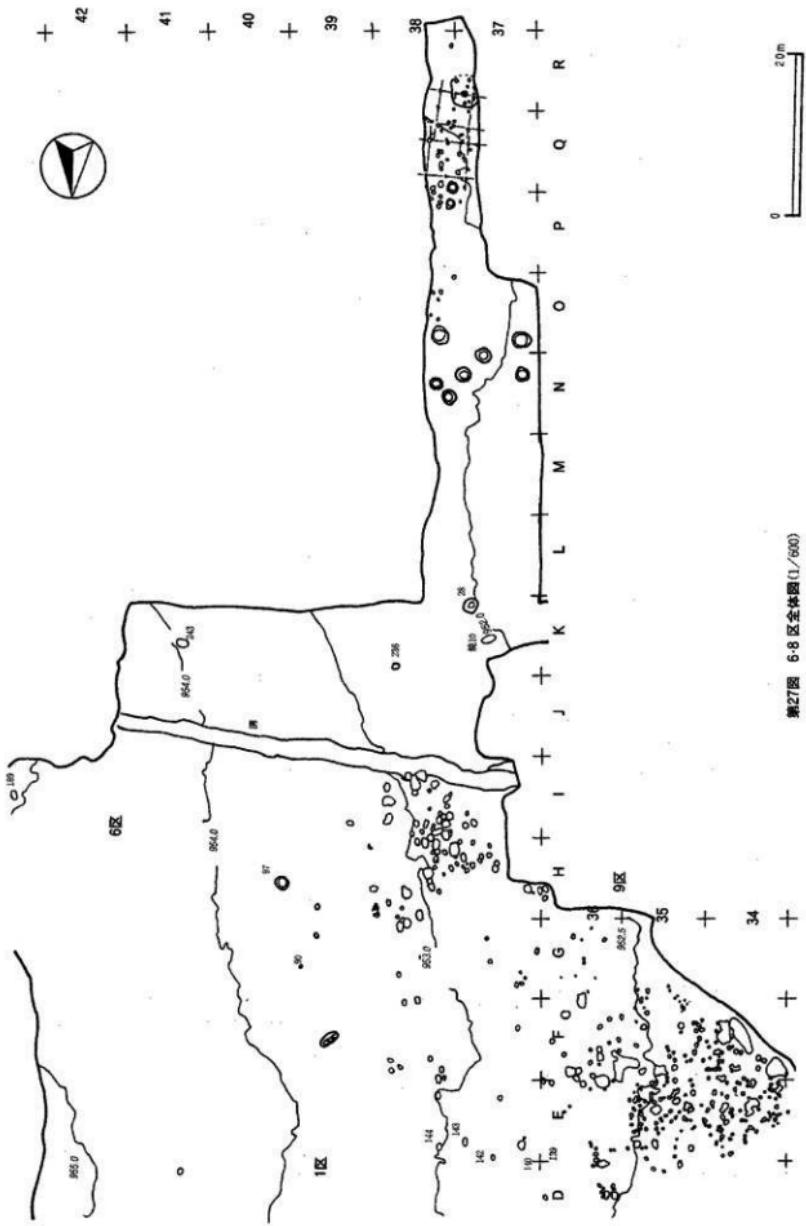
焼土址(第30図) 縄文時代の焼土址はR-37で検出された8号焼土址だけである。この焼土址付近から凹石が出士しているが、土器の出土がないので時期は不明である。

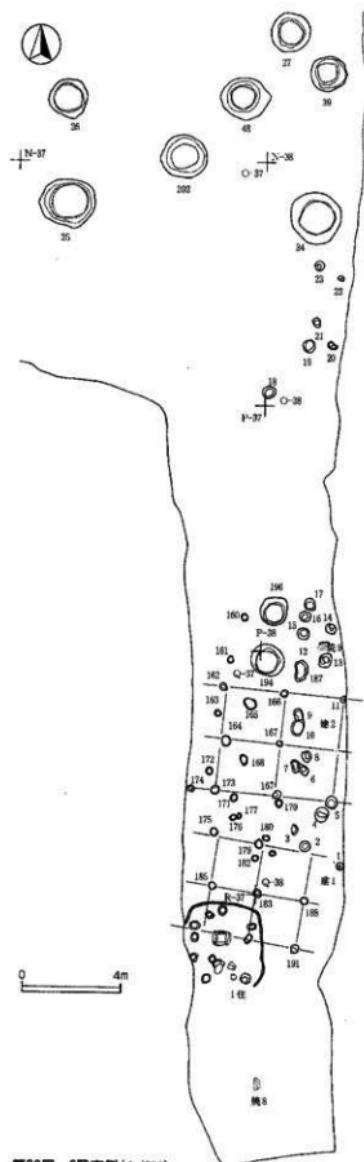
### 2. 中世以降の遺構

#### (1) 捩立柱建物址 (第33図・図版13-7)

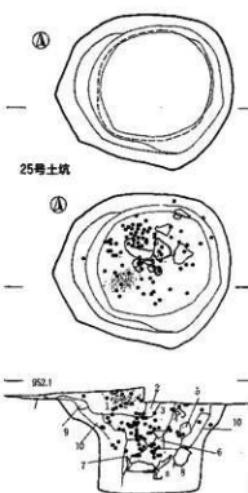
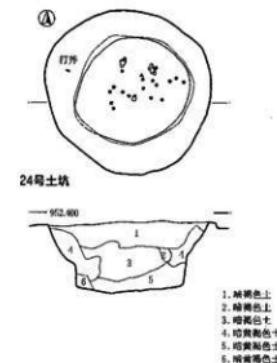
P・Q・R-37-38には、多くのピット状の土坑が検出されている。そのうち同規模の土坑を探すと、最低2軒の建物址があったのではないかと思われる。南北とも狭い範囲の発掘調査であったため、最終的な規模は不明である。わかったことのみを述べると、1号建物址は1間の長さが190cm～200cmで、柱穴の配置は総柱である。軸線方向はN-82°-W。2号建物址は1間の長さが220cm～250cmと1号建物址に較べると長くなっている。西側の柱穴が1本不明であるが、調査区外へ伸びている可能性もある。軸線方向はN-85°-W。1号建物址とはほとんど同じである。これらの建物址は3区付近のピット群と一緒にをなすものと考えられる。

第27图 6-8区全地图(1/500)

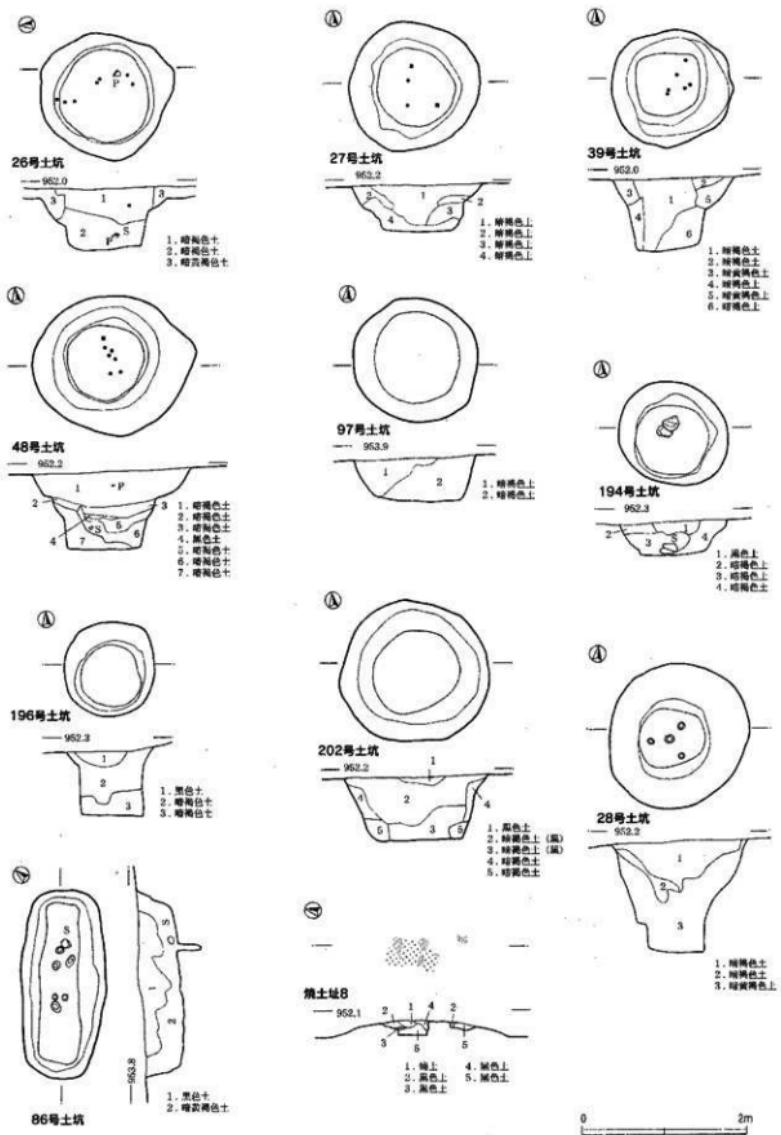




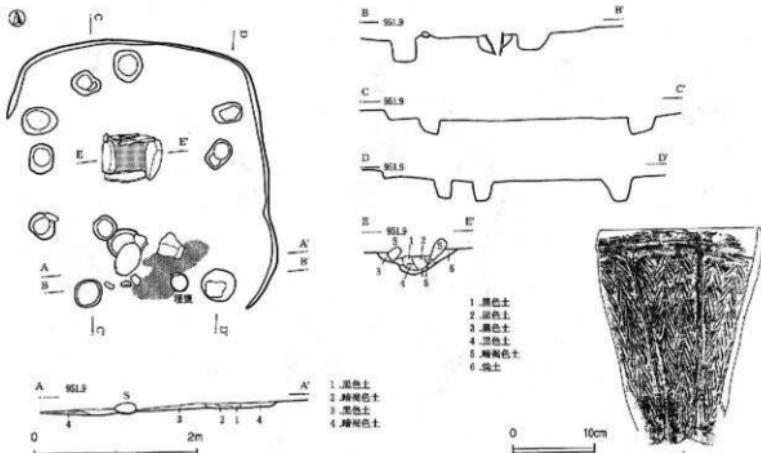
第28図 6区南側(1/200)



第29図 6区 繩文時代の土坑 (1) (1/60)



第30図 6区縄文時代の土坑(2)・焼土址(1/60)



第31図 6区1号住居址(1/60)

(2) 莢送構 (第33~38図・図版13-8~17-6)

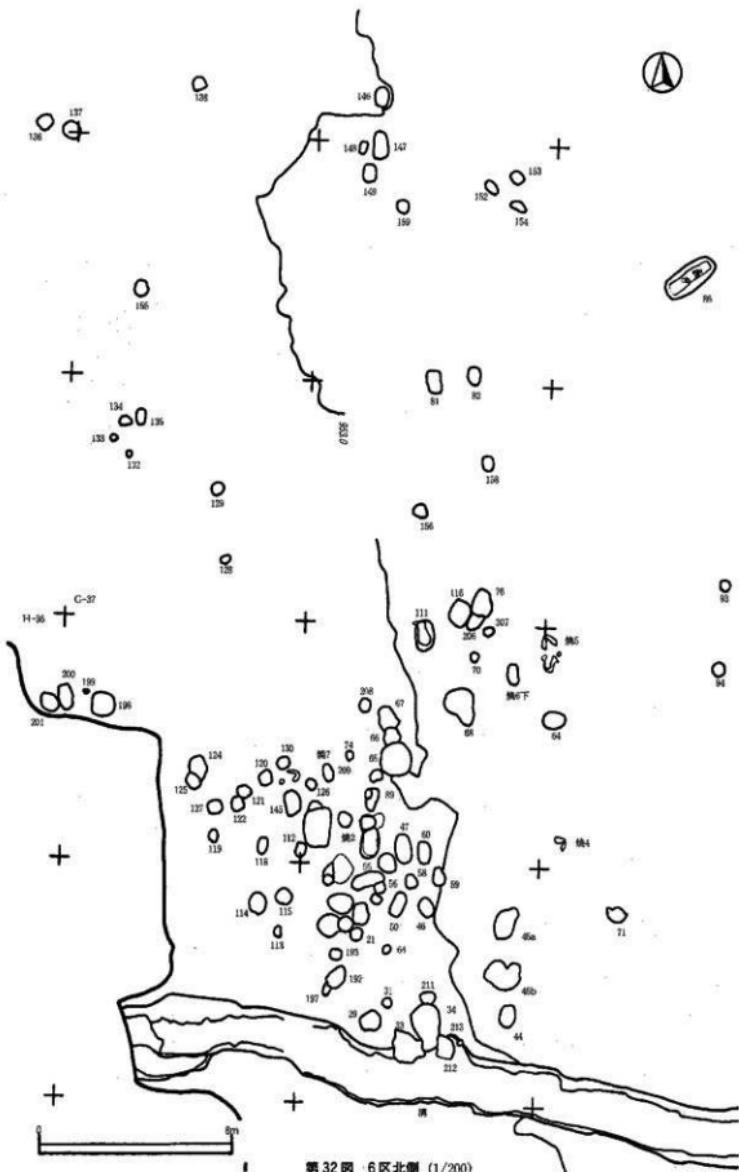
D~I-37-38からは多くの人骨などが発見され、この地が墓域であることが確認された。この墓域は8区の方まで伸びていてかなり範囲が広かったことがわかる。内容は大きく分けて土坑墓と火葬を行ったと思われる焼土址の二つの群に分けられる。

第Ⅰ群 土を掘り込み、人または骨のみを選び出して埋めたと思われる土壙墓。土壙墓には、石を作うものと伴わないものがある。土壙墓の平面形から次の4類に分けられる。

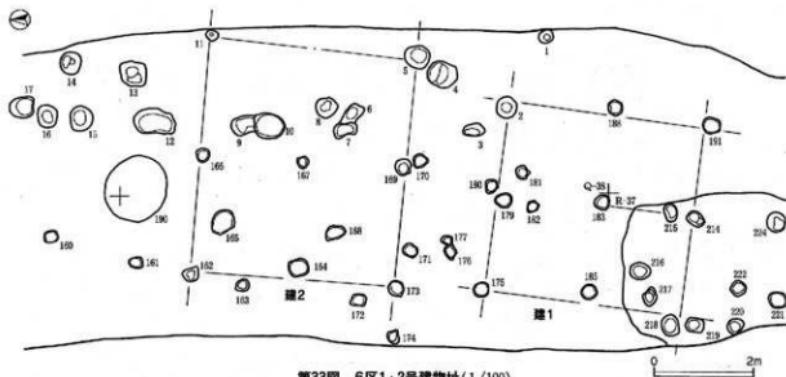
1類 平面形が円形の土壙墓。規模は50cm~80cmのものが主に検出された。深さは6cm~50cmと様々ではあるあまり深くない。198号土坑からは石臼が出土している。

2類 平面形が長楕円形や方形の土壙墓。規模は様々で上面長軸52cm~158cm、短軸28cm~110cmがある。深さは両者とも深いものから非常に浅いものとがある。この土壙墓は出土遺物が多く、歯・骨片・錢貨などが出土している。最も遺体の遺存状況が良かったのは47号土坑である。この土坑は90cmの深さを持ち、底部は平面で掘り方がしっかりとしている。平面形は方形ではなく長楕円形である。遺体は頭を北側に向か、尺骨と大脛骨らしき骨が同じ場所から出土しているため、届葬されていたのではないかと考えられる。140号土坑からは錢や骨粉の他に棺の底板と思われる板片が出土している。201号土坑は石臼と人骨・刀装具が出土した。刀装具の形状は長径5.12cm、短径2.82cmの長い菱形で、中央に細長く穴が開いている。銅製で毛彫りが施されて、その上から鍍金がなされている(図版16-3・4)。この墓壙と同じ形のものの数が最も多いことから、基本的な形はこの墓壙であったと思われる。

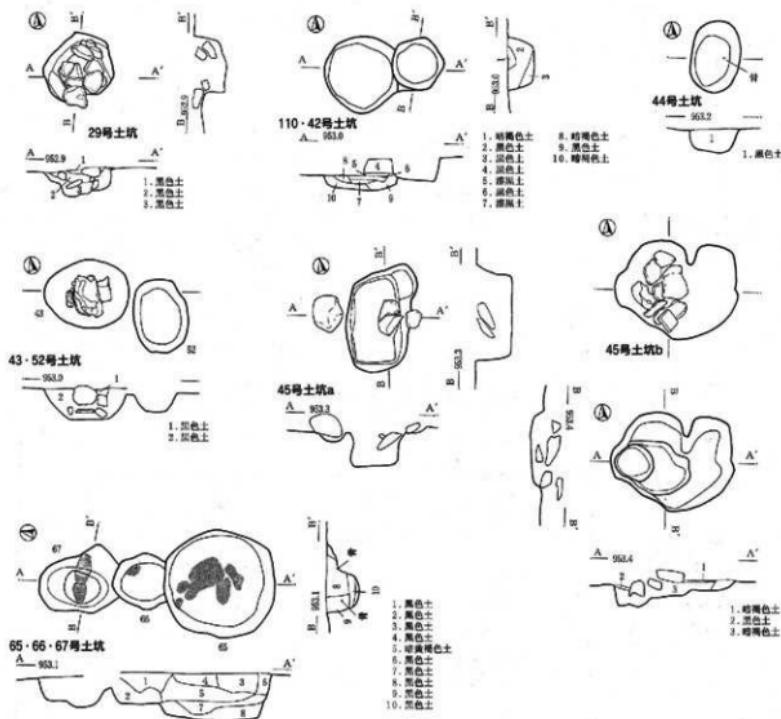
3類 平面形が不整形の土壙墓。大体深さは浅いが錢や骨片などを多く見ることができる。197号土坑は非常に小さい墓壙であるが、祥符通宝・天祐通宝・紹聖元宝・景德元宝の4枚の錢が出土している。



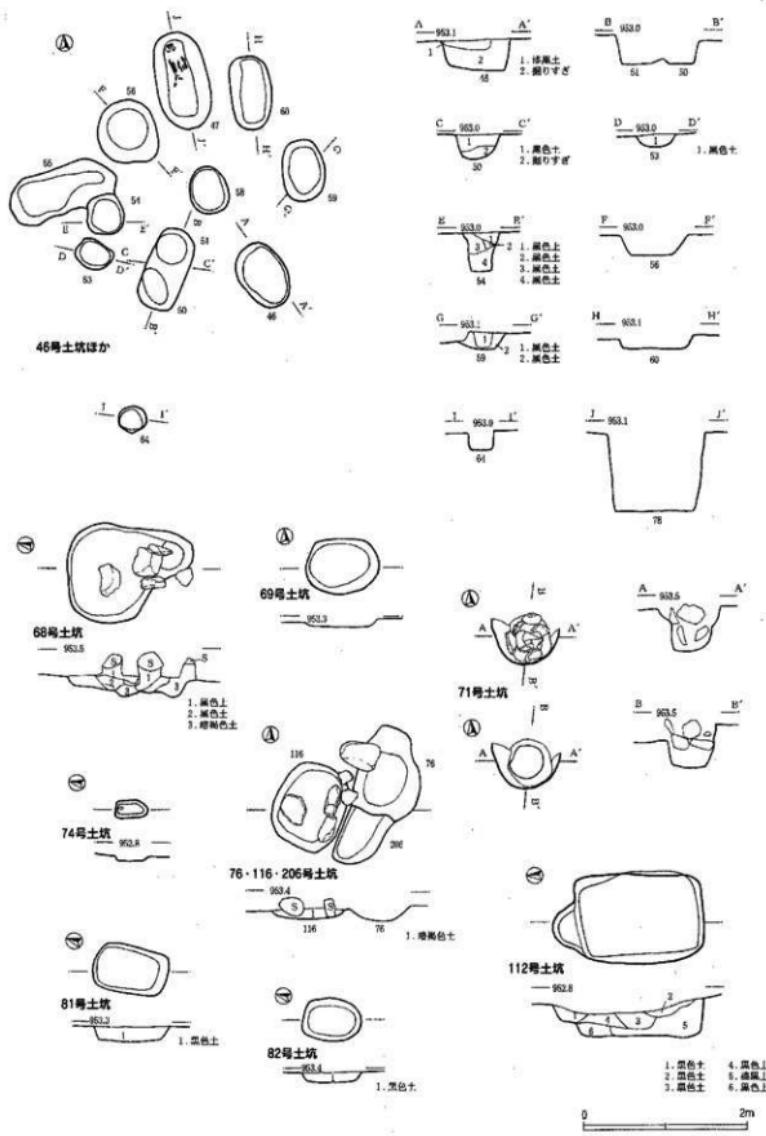
第32図・6区北側 (1/200)



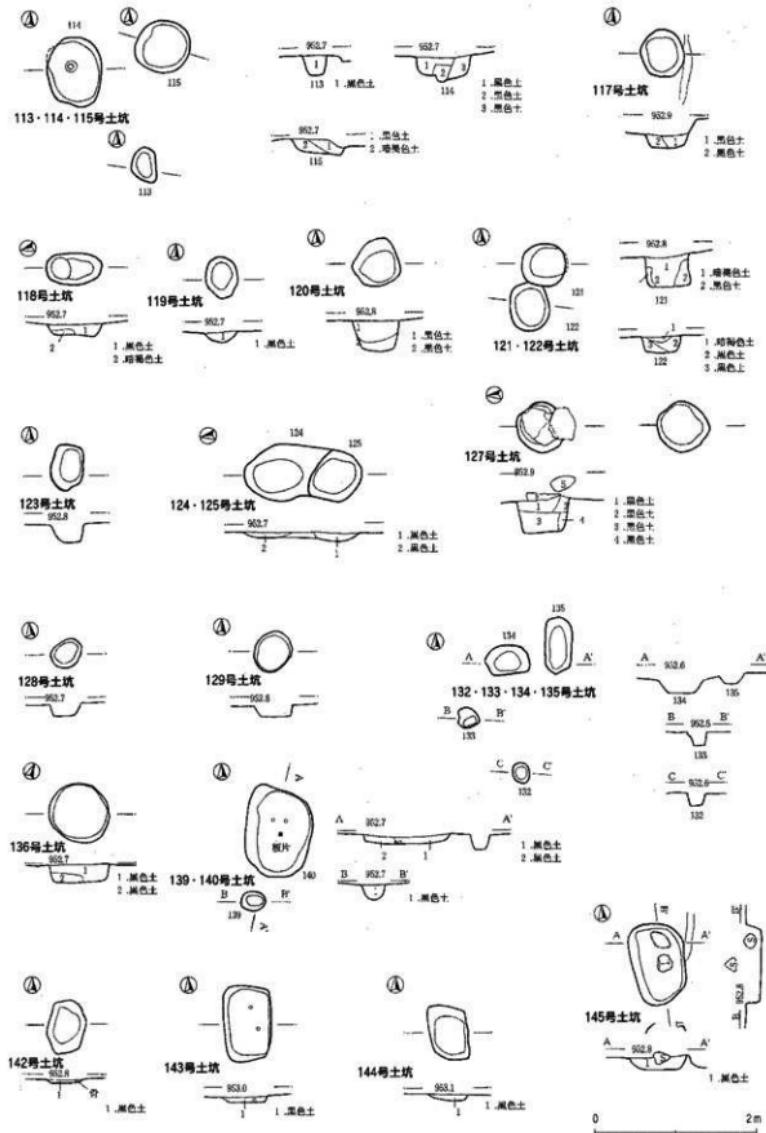
第33図 6区1・2号墳遺跡(1/100)



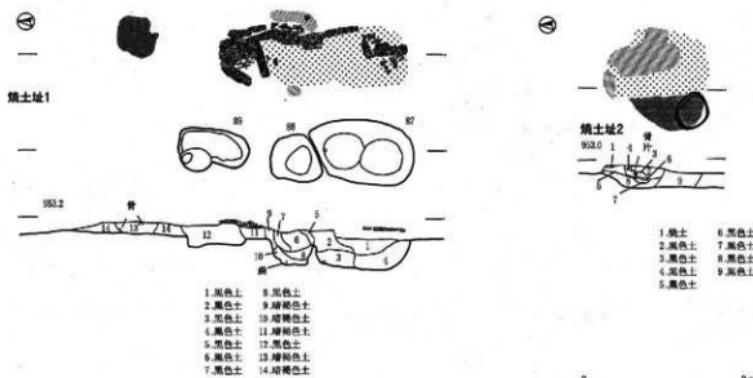
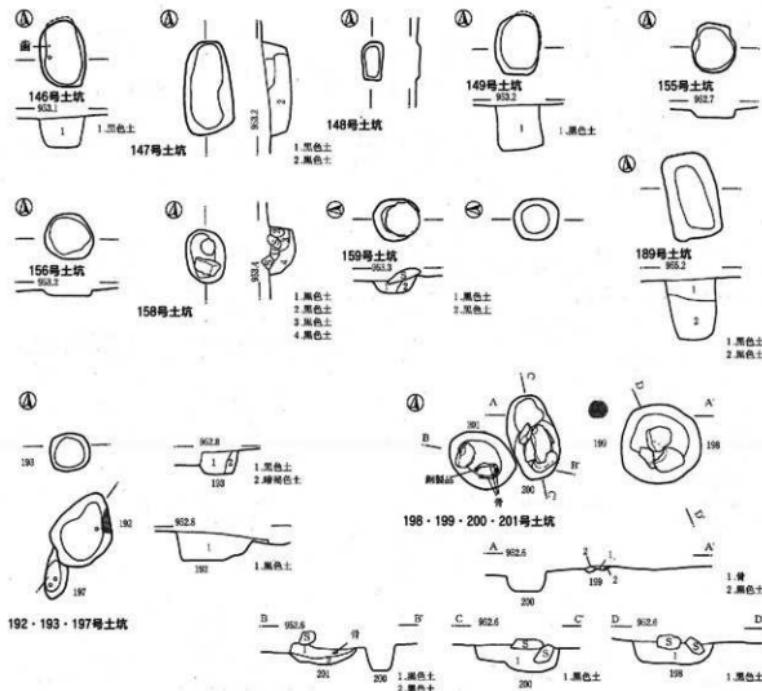
第34図 6区葬送遺構(1)(1/60)



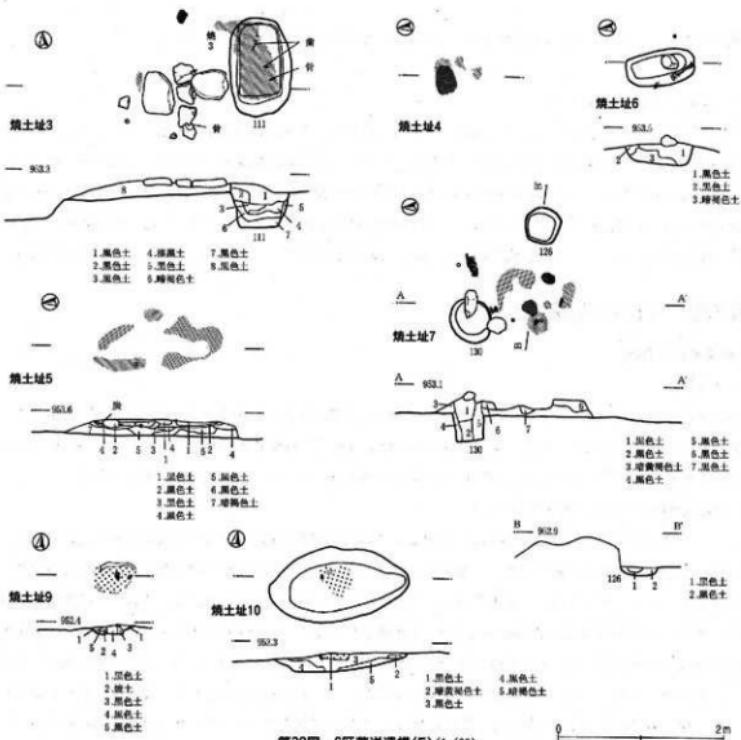
第35図 6区葬送遺構(2)(1/60)



第36図 6区葬送遺構(3)(1/60)



第37图 6区葬送遗物(4)(1/60)



第38図 6区葬送遺構(5)(1/60)

4類 ピット状の土壙墓。直徑24cm~92cmまで様々である。土壙墓の形態として、89号や199号土坑のように骨がぎっしり詰められているものと、29号土坑のように礫がぎっしりと詰められているものがある。前者は火葬した後、骨を集めて改めて土壙に埋葬したものではないかと思われる。後者は人骨などの出土が乏しいが、墓域の一角に位置しているため何らかの葬送行為が行われた遺構と考えられる。

第II群 おそらく火葬を行ったと思われる焼土址。焼土址直下から土坑が検出できるかどうかで次の2類に分類することができる。

1類 土坑を直下に持たない焼土址。炭化木などは特別発見できなかったが、骨粉がかなり出土している。5・7・9号焼土址のように付近から骨を検出しているものもある。5号からは熙寧元宝・淳化元宝・至道元宝・政和通宝・永楽通宝の5枚、7号からは景德通宝・元豐通宝・天聖元宝・嘉祐通宝・至道元宝の5枚、9号からは淳化元宝の1枚が出土している。

2類 焚土址直下に土坑を持つ焼土址。焼土址は焼土址周辺より多量の炭化材が発見されており、火葬施設ではないかと思われる。3号焼土址は付近に50cm大の礫がまとまって検出されている。4号焼土址は40cmの狭い範囲に骨片が固まっている所から第I群4類の土壙墓に切られていたのではないかと考えられる。焼土自体は土坑のかなり上面にあるため、古い土壙上で火葬が行われていたことが考えられる。この類の焼土址から

も銭が出土している。3号からは熙寧元宝・元豈通宝・皇宋通宝の3枚が出土している。

### (3) 溝(第27-32図・図版17-7)

I-J-37~42から溝が検出された。溝が検出されたすぐ脇には、発掘開始以前まで使用していた道があり、かつてはこの道に沿って溝が作られていたことが考えられる。溝の両側が調査区外に出ているので、かなり長い溝であると想定される。溝の幅は約240cm、深さは23cmで断面形は台形状である。土層は水平堆積で所々で砂層が見られ、水が流れていったことがわかる。最西部では若干南側へ流路を変えている。出土遺物は灰釉陶器片や開元通宝が出土しているが、底部直上から近世の陶器片が出土していることから近世のものと考えられる。

## 第6節 7区の遺構

### 1.縄文時代の遺構

#### (1) 住居址

住居址は中期初頭2軒、中期後半1軒検出されているが、縄文集落の主体部が調査区外になっているため、実際はさらに増えると考えられる。また、威力不動尊東遺跡でも前期末葉1軒・中期初頭1軒・中期後半1軒と3軒の住居址が確認されているので、これらをあわせて数時期にわたる一つの集落址と考えられる。

##### 第1号住居址(第42・43図・図版19-1・2)

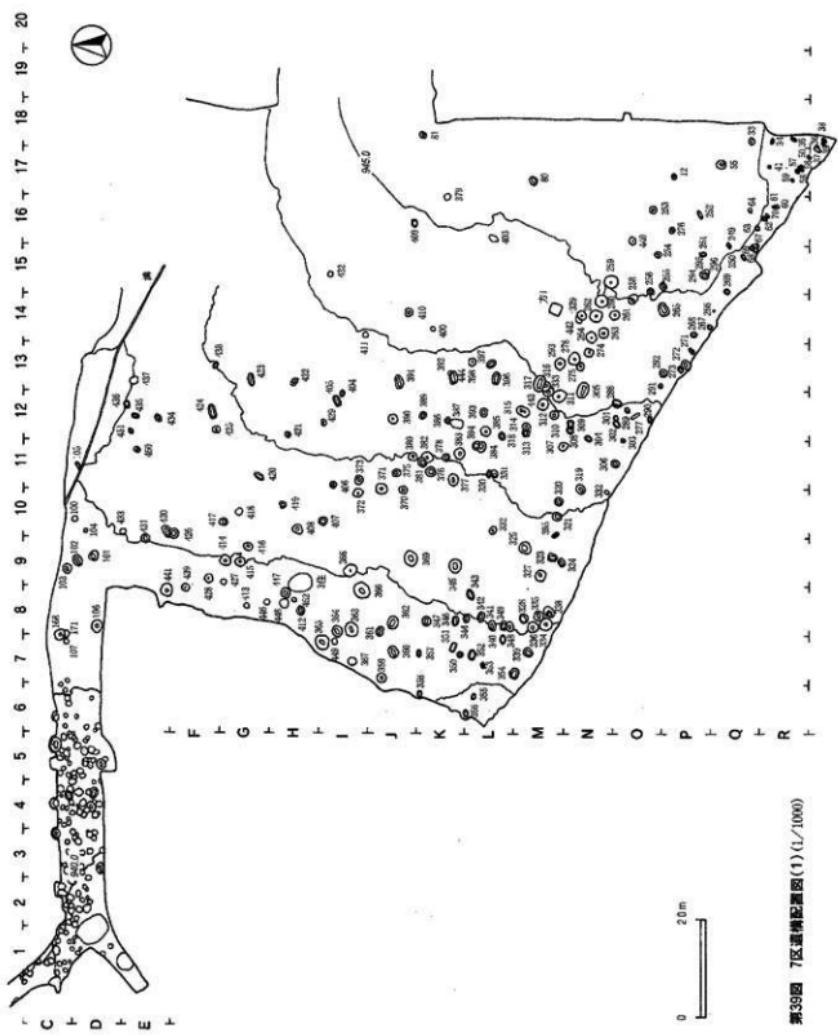
D-2・3で検出された住居址で、付近に2号住居址と威力不動尊東遺跡1・3号住居址が検出されている。住居址のプランはあまり明確ではなく、壁の立ち上がりがわかったのは東側だけである。平面形は梢円形になるとを考えられる。覆土は浅く、中央部がレンズ状に堆積している。柱穴と考えられるピットは明確ではないが、P1・P10・P7・P12の深さが50cmから70cmと比較的深いので、これが主柱穴と考えられる。住居址の中央付近に地焼炉が検出された。炉の周辺は200cmの範囲にわたって堅緻な面が見られる。この堅緻な面の下部からピットが検出されている。出土遺物は、堅緻な面付近から内部に朱が塗彩されている小型土器が発見されている。他に少量の土器片と打製石斧、黒曜石製石器・剥片などが出土している。出土遺物から中期初頭の住居址と考えられる。

##### 第2号住居址(第43・46図・図版19-3・4・5)

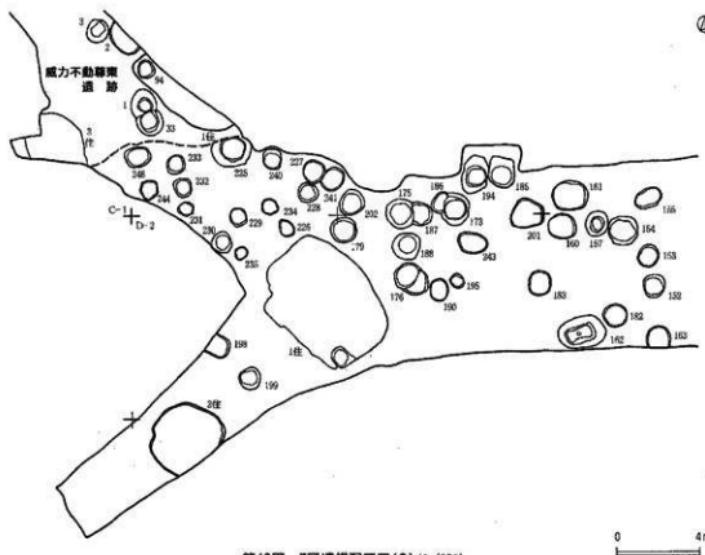
B-C-1・2で検出された住居址で、付近から1号住居址と威力不動尊東遺跡1・3号住居址が検出されている。壁の立ち上がりがあまり明瞭ではなく、規模は不明である。主柱穴もはっきりとしていない。住居址の中央よりかなり南へ寄った所に埋甕炉が検出されている。出土遺物は土器片や打製石斧、黒曜石製石器・剥片などが出土している。時期は、出土遺物から中期初頭の住居址と考えられる。

##### 第3号住居址(第44図・図版19-6)

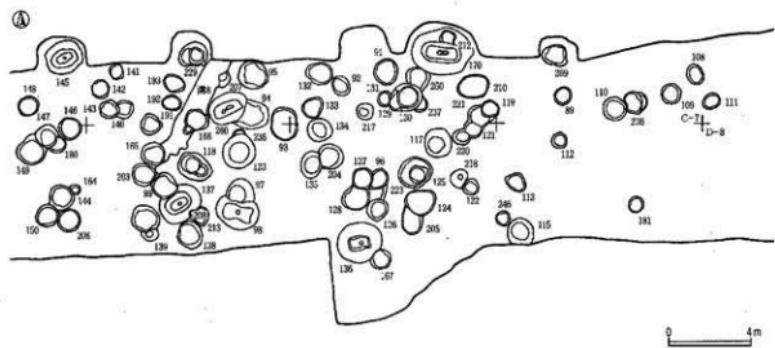
H-9・10で検出された住居址で、焼土の出土により判明した住居址である。遺構のプランは削平されており、規模については全く不明である。柱穴は深さがだいたい40cm前後のP1・P3・P5・P6であると考えられる。時期については出土遺物がほとんどなく図示できる物がないが、中期後半と考えられる。



第35图 7区地物配图(1)(1/1000)



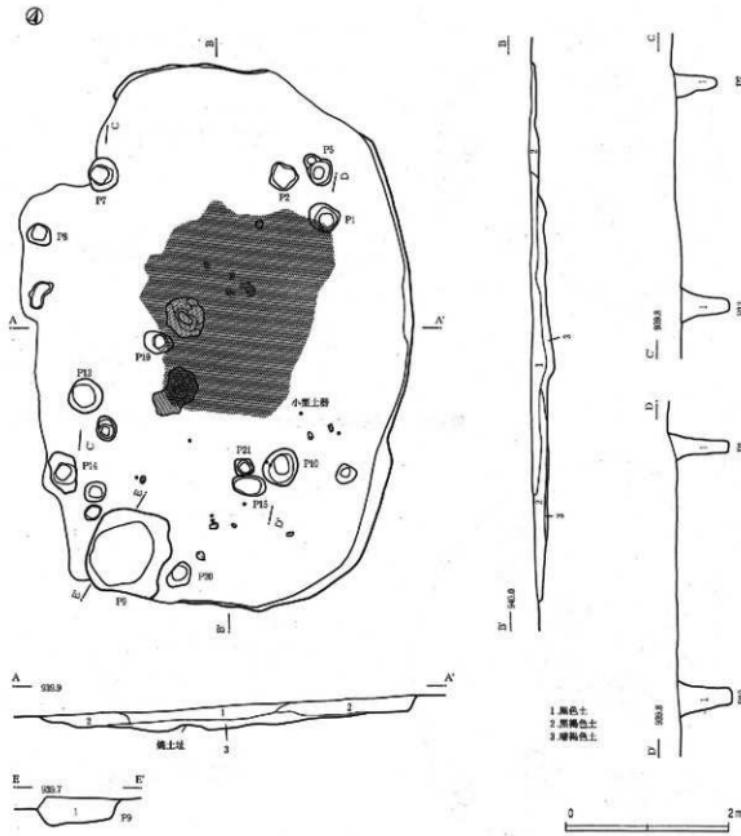
第40図 7区遺構配置図(2)(1/250)



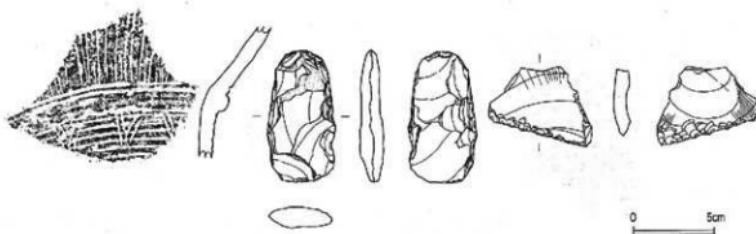
第41図 7区遺構配置図(3)(1/250)

## (2) 土坑

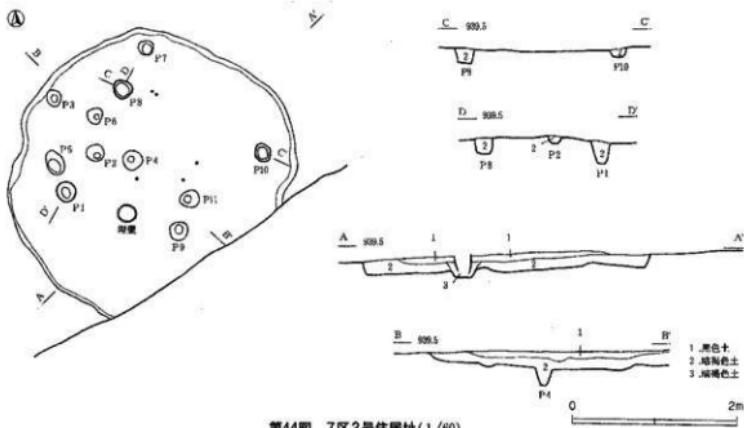
縄文時代の土坑は大きく分けると円形のものと、落し穴とに分けられる。落し穴については数種類に分類でき、その他の土坑と煩雑になってしまふため、別に分類を行つた。ここで取り上げる土坑はいずれも縄文時代前期末葉から中期初頭にかけて作られたと考えられるものである。これらの土坑は発掘区の西側に固まって検出され、その続きは威力不動尊東遺跡まで続く。これらの土坑は師岡平遺跡では122基検出された。7区以外でも1区288号土坑のように同時期の一括土器を伴う土坑が検出されている。



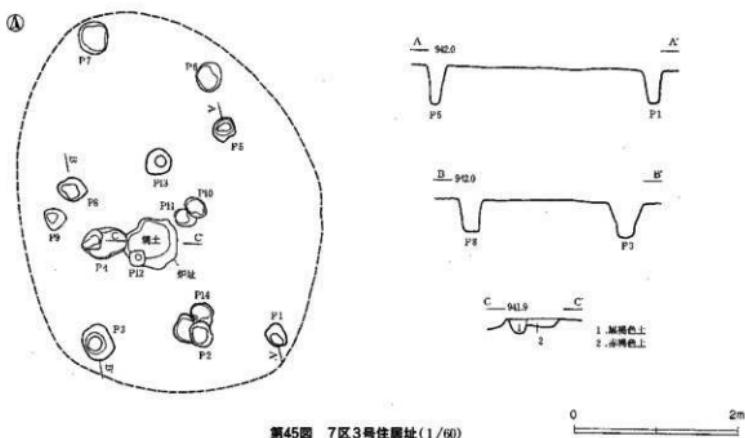
第42圖 7區1號住處址(1/60)



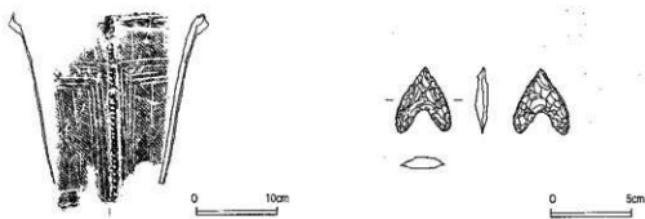
第43圖 7區1號住處址出土遺物(1/60)



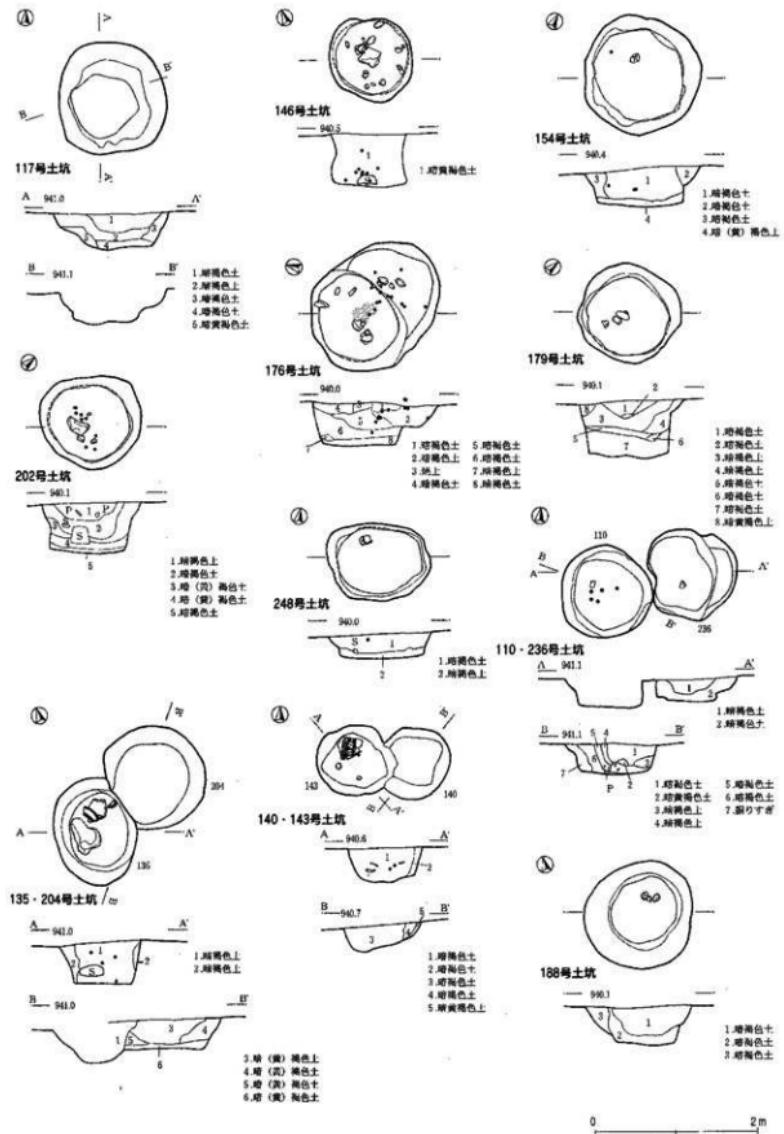
第44图 7区2号住居址(1/60)



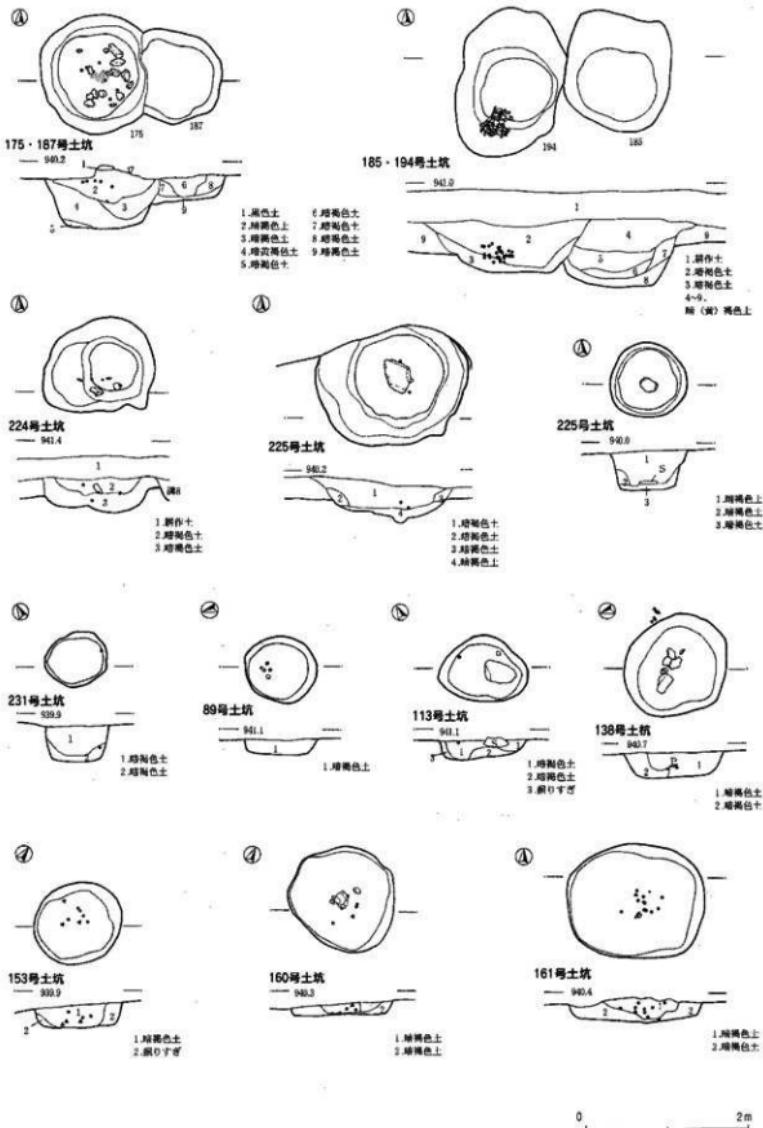
第45图 7区3号住居址(1/60)



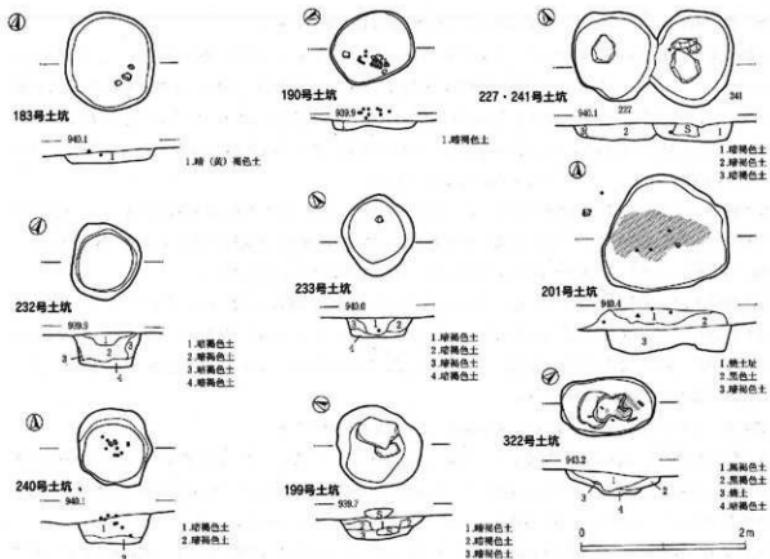
第46图 7区2号住居址出土遗物(1/60)



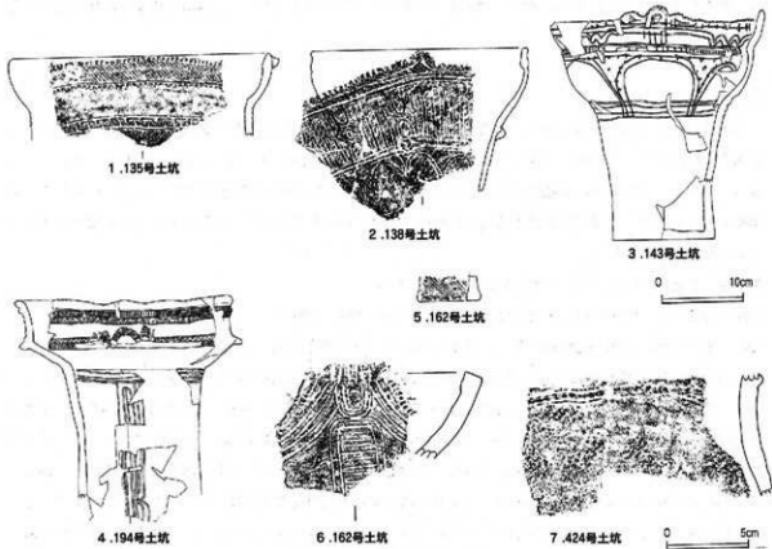
第47図 7区編時代の土坑(1)(1/60)



第48図 7区縄文時代の土坑(2)(1/60)



第49図 7区縄文時代の土坑(3)(1/60)



第50図 7区土坑出土土器(1/60)

第Ⅰ群 平面形が円形なもの。断面形で次の3類に分類することができる。

1類(第45図) 断面形が巾着・フラスコ状の土坑。掘り方はしっかりしていて深さもある程度ある。土層は色々な種類があり、146号土坑のように単一層のものも見られるが、基本的には中央部レンズ状もしくは水平堆積である。146・154・174・176・202・248号土坑のように土器や石器・礫が混入するケースが多い。そのほとんどは床面から浮いた状況で検出されることが多い。中には176号土坑のように焼上を伴うものがある。土器はいずれも破片の状態で出土しており、完形個体になるものはない。

第2類(第45-46図) 断面形が樽形の土坑。しっかりとした掘り方で、深さもある程度残存している。土層は中央部レンズ状堆積が主で、中には三角堆土のものも見られる。遺物の出土状況は第Ⅰ群1類と同じである。1類とやや異なるのは143号土坑や175号土坑のように一括土器が出土することである。

第3類(第46図) 断面形が壺状か不整形の土坑。上面形がやや開き気味になる。壁がグラグラと立ち上がり、中には立ち上がりが明確でないものもある。土層は三角堆土、もしくは中央部がレンズ状堆積になっているものが主体である。底面が平面ではなくでこぼこしているものが多い。出土遺物は土器や石器・礫が出土しているが、破片の状態で少量出土する。

第Ⅱ群 平面形が横円形か不整形で、断面形から次の2類に分類できる。

第1類(第48-49図) 断面形が壺状の土坑。壁面はしっかりとしているが、浅い土坑が多い。土層は単一層か中央部がレンズ状に堆積しているものがほとんどである。遺物の出土状況は、やや底面から浮いた状態で土器・石器が出土する。113-227-241号土坑のように40cm大の礫が出土することが多い。

第2類(第49図) 断面形が皿状の土坑。壁面がグラグラし、立ち上がりが明確ではない。底面がでこぼこしているものが多い。土層は単一層か中央部がレンズ状に堆積するものが主体である。201号土坑や322号土坑のように焼上を伴うケースもある。199号土坑のように40cm大の礫が出土したり、土器などの遺物が検出されるものもある。

### (3) 落し穴

本遺跡からは全部で205基の落し穴が確認されている。7区だけでも落し穴は199基あり、埋土保存により発掘調査を行わなかった部分にも落し穴の存在が考えられるため、かなりの数になると思われる。落し穴群は威力不動尊東・久保御堂の両遺跡にかけて並んでいるものもある。久保御堂遺跡では(守矢 1997)落し穴の分類を試みているが、久保御堂遺跡では見られないタイプのものもあるので、それらの落し穴を加えながら以下とのおり分類を試みた。

第Ⅰ群 上面形が長楕円もしくは隅丸長方形になるもの。

1類 坑底のビットが2つある落し穴群。規模により次の2種に分類することができる。

A種 (第51-52図) 規模が比較的大きく、長軸が176cm~314cm、短軸が76cm~215cm、深さが44cm~72cmで、中段・坑底の平面プランは隅丸長方形で、真ん中がくぼむ糸巻型である。坑底の小穴は掘り方がしっかりしており、深く、基本的には2穴のものが多いが、中にはより小さなビットを伴うものや、3穴あるものもある。土層の堆積は基本的には三角堆土のものが多い。断面形は袋状のものが多く見られる。424号土坑からは十三菩提式期(第50図7)の土器が覆土から出土している。この落し穴群は列状になり南北方向に台地を横切っている。特に7区では305-316-396-444-391-405-423-424-420-430-102号土坑が途中で分岐しているが列状になっている。これらの落し穴よりかなり規模が大きい362-363-364号土坑も本類に組み込んでいる。分布は7区の西側に偏っている。このタイプは1区でも列状になり、久保御堂遺跡でも列状で検出されている。また威力不動尊東遺跡

でも発見されている。

B種（第52図）A種より規模が小さく、長軸が180cm～212cm、短軸が120cm～152cm、深さが56cm～76cmで、坑底の幅がやや広いもの。土層の堆積状況は中央部レンズ状堆積のものが多い。このタイプは数が少なく、288・328・340・343号土坑の4基しか確認されていない。分布は7区の南側に散在している。

2類 坑底ピットが1つの落し穴群。規模により3種に分類できる。

A種（第52・53図）規模が比較的大きく、長軸が124cm～306cm、短軸が68cm～280cm、深さが35cm～108cmで、坑底の形状が糸巻型になるもの。坑底ピットは基本的に1つであるが、中には複数の小さな穴を伴うこともある。土層の堆積状況は中央部レンズ状堆積が主体である。80号土坑のように断面形が袋状になるものもある。

162号土坑からは前期末業と中期初頭の上器が出土している（第50図4・6）。このタイプの落し穴は7区全体に分布している。このうちから2本の落し穴列を確認できた。1本は309・314・389・404・434号土坑で、もう1本は354・352・351・360・347・349号土坑の列である。7区南側の小さな谷の周辺からは、列にはならないものある程度密集して落し穴が検出される。威力不動尊東遺跡でもこのタイプの落し穴が確認されている。

B種（第53図）上面プランが比較的円形に近く、長軸が160cm～274cm、短軸が110cm～216cmとA種よりやや小型になるが、深さが66cm～115cmと深い落し穴群。底面形はA種がやや角の張る糸巻型であったのに対し隅丸長方形である。土層の堆積状況は水平堆積が主である。137号土坑のように使用した落し穴を半分埋め、再び使用したと思われる落し穴もある。落し穴の分布は極端に南側に偏っており、2類△種同様台地の一部が抉れた小さな谷の縁辺に密集している。ある程度列になっていると思われるのは306・319・321・325号土坑の一帯と341・342・344・346・361号土坑の一帯である。

3類 小型の落し穴群。これは長軸の長さで2つに分類することができる。

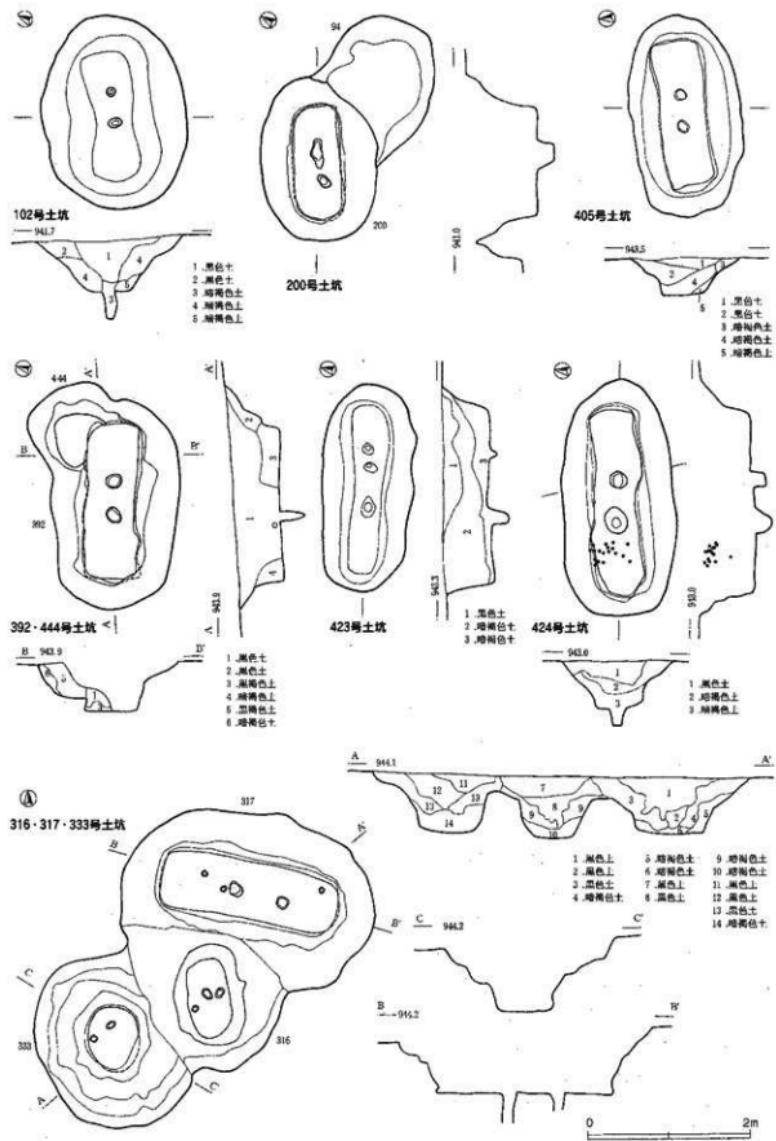
△種 長軸が80cm～170cmと長い落し穴群。坑底の形状が糸巻型のものが多い。坑底ピットは二穴のものと一穴のものがある。土層状況は単一層が主である（第53図）。分布は2類と同じで台地南側の小さな谷の縁辺である。また、北側の同様の地形の所からも検出されている。

B種 長軸が86cm～126cmと短く、正方形に近い形状の落し穴群。坑底の形状も正方形に近い。坑底ピットは基本的に1つであるが、小さいピットを伴うこともある。堆積状況は単一層か中央部レンズ状堆積を示す（第53・54図）。分布は3類△種と全く同じである。

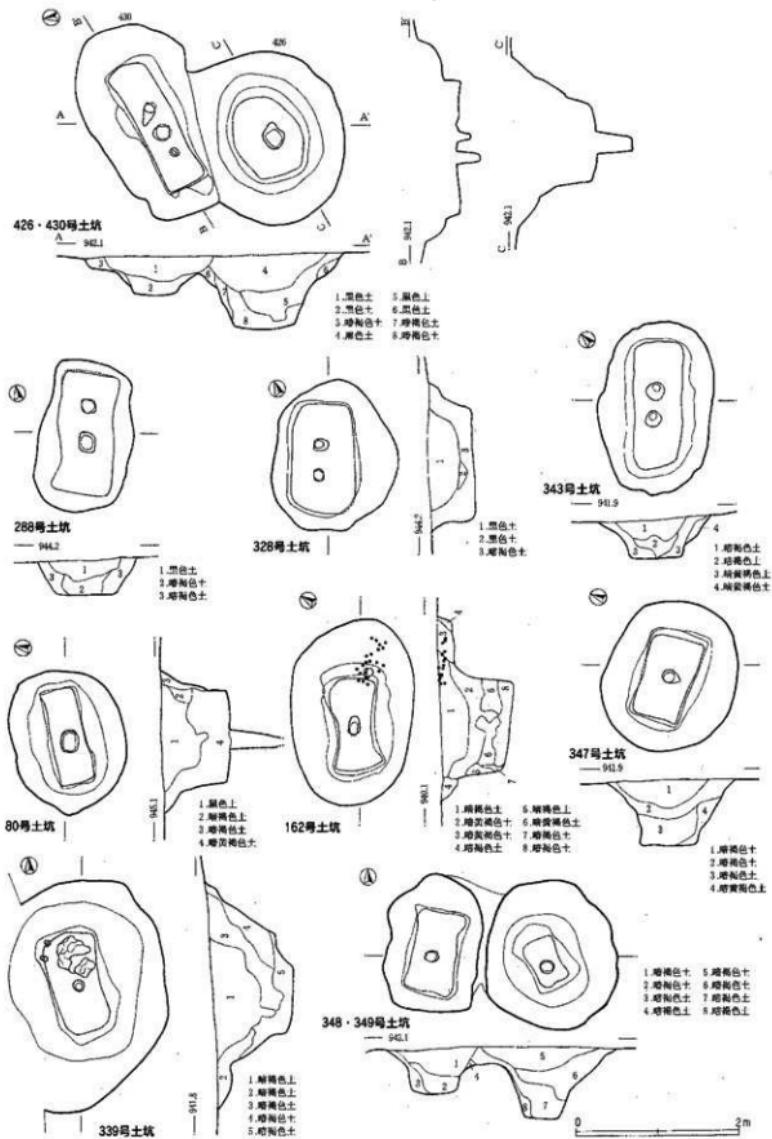
第II群 上面形が円形か、不整形の比較的円形に近いもの。坑底の形状と規模から次の5種類に分類することができる。

1類（第51・54・55図）上面形が円形で、長軸が125cm～306cm、短軸が109cm～276cm、深さ58cm～162cmのとても規模が大きい落し穴群。坑底の形状はいずれも平らな面を持たない不整形で、坑底ピットはない。あまり明瞭ではないが、やや坑底プランが方形になるものもある。土層の堆積状況は中央部レンズ状堆積である。断面形は33・307号土坑のように袋状になるものもあるが、ほとんどはラッパ状に広がる。落し穴の分布は7区全体に見られるが、特に密集しているのが台地の最も高くなっている場所である。帶状に南東から北西へ台地を横断している。久保御堂遺跡でも全く同じ方向で台地を横断しており、また威力不動尊東遺跡でも同じタイプの土坑が見つかっている。本遺跡でも6区から1基だけ発見されており、かなり広い範囲でこのタイプの落し穴が作られたと思われる。

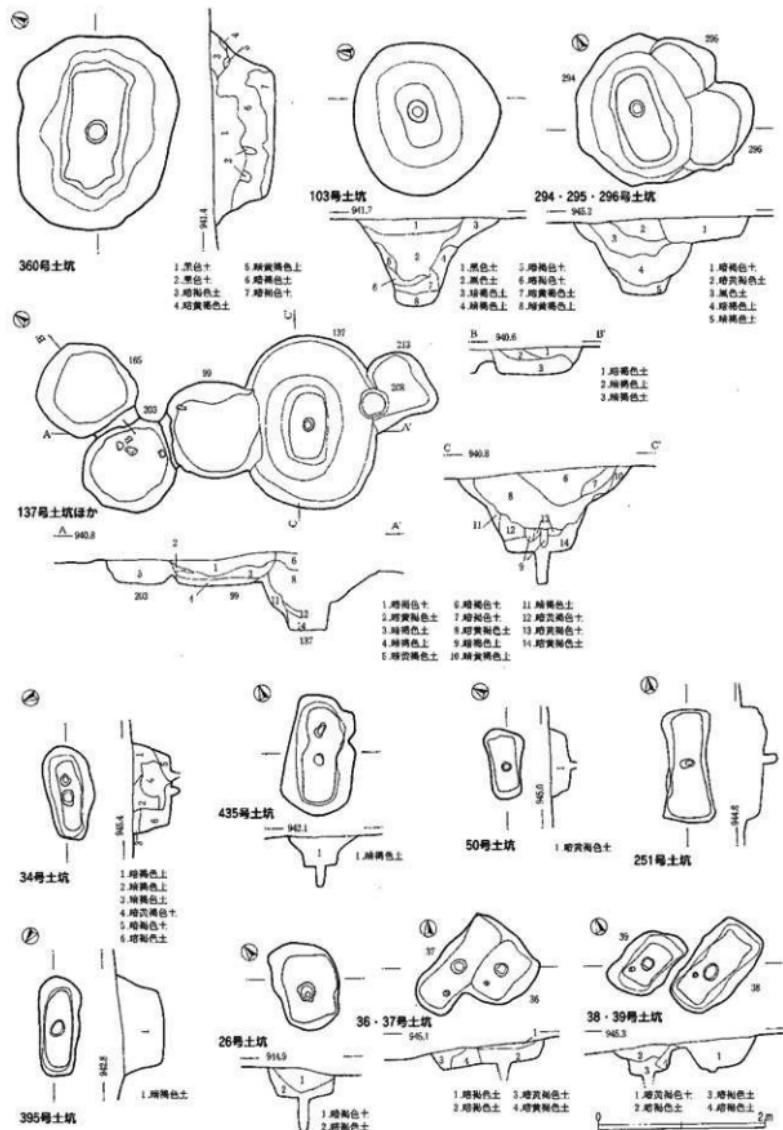
2類（第55図）上面形が不整形で、長軸が93cm～190cm、短軸が64cm～178cm、深さ20cm～93cmで比較的規模の大きい落し穴群。1類と異なる所は、坑底が平らで方形プランを持つ所である。断面形はラッパ状に広がっている。土層状況は中央部レンズ状堆積と単一層のものとが見られる。この落し穴は310・386・390・429・421・425



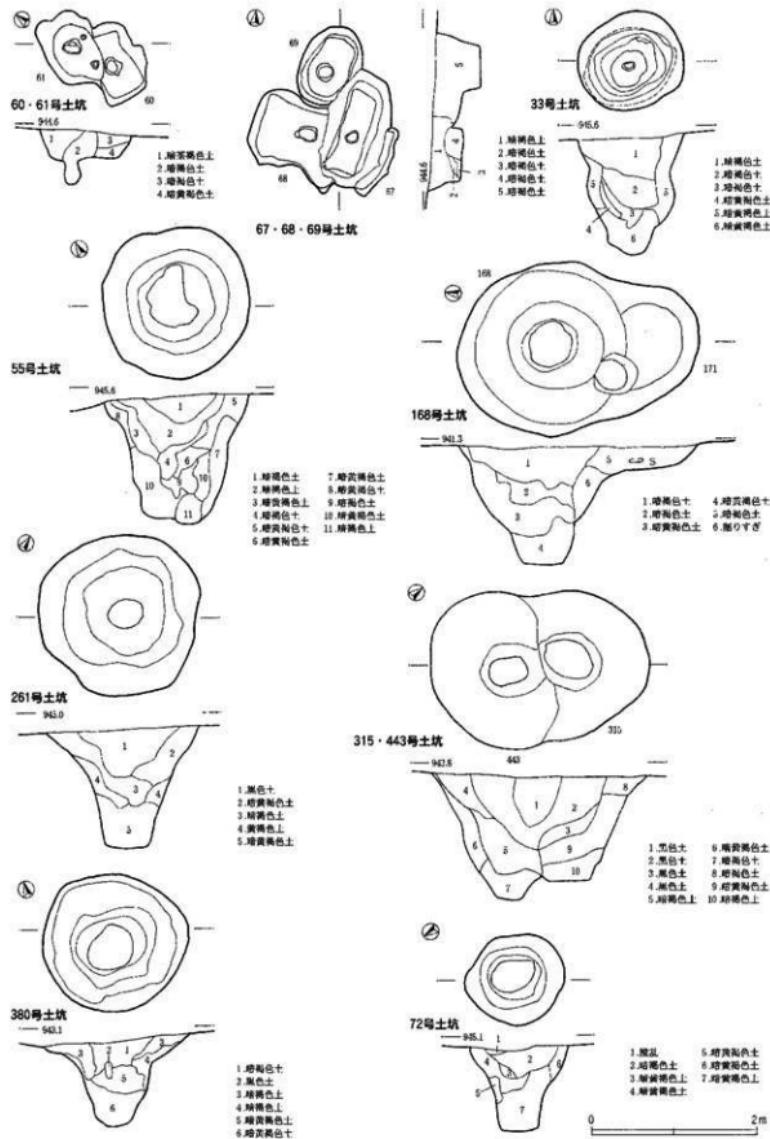
第51図 7区落し穴(1)(1/60)



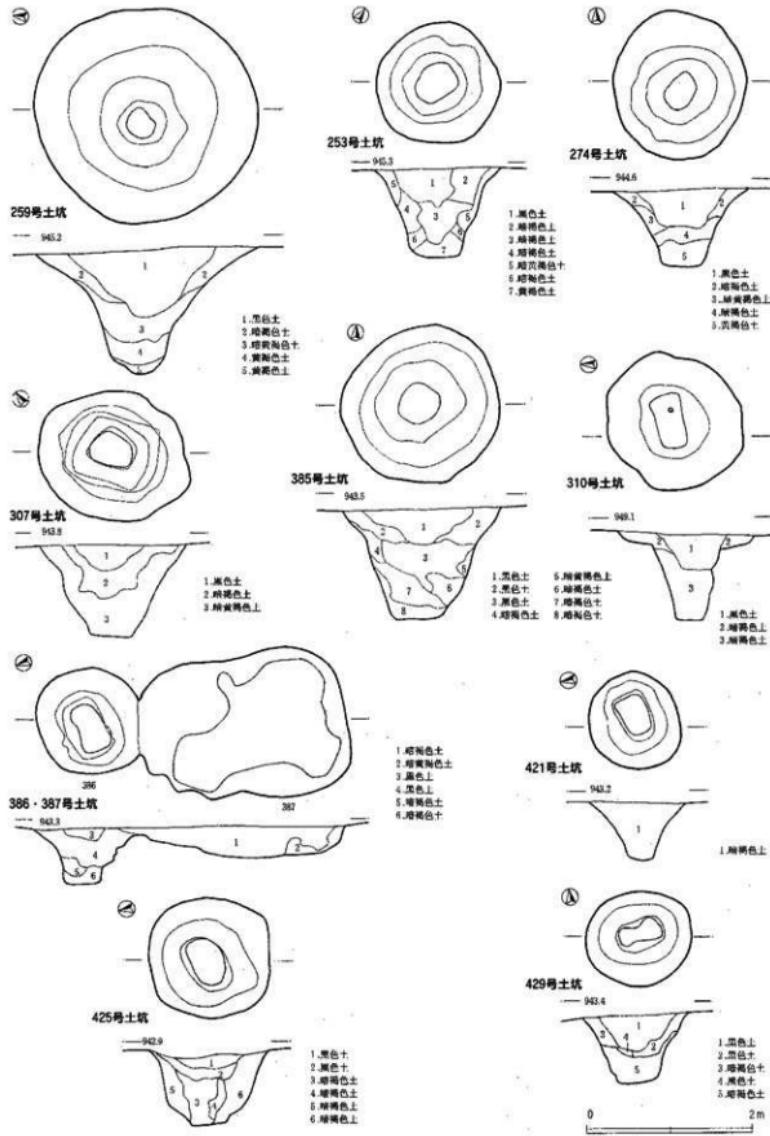
第52圖 7区落し穴(2) (1/60)



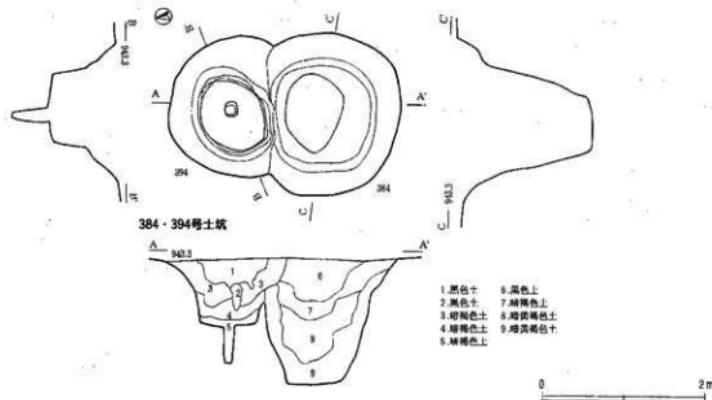
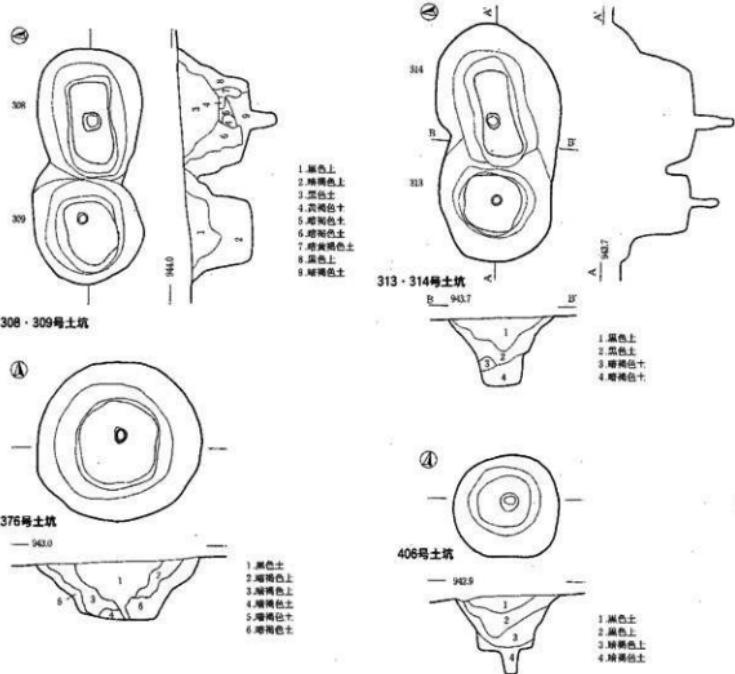
第53図 7区落し穴(3)(1/60)



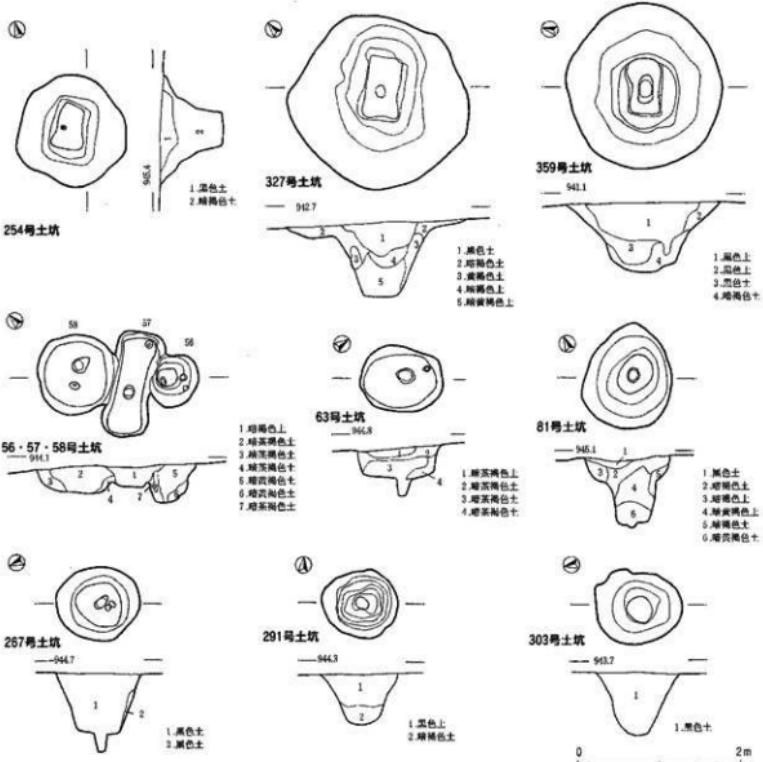
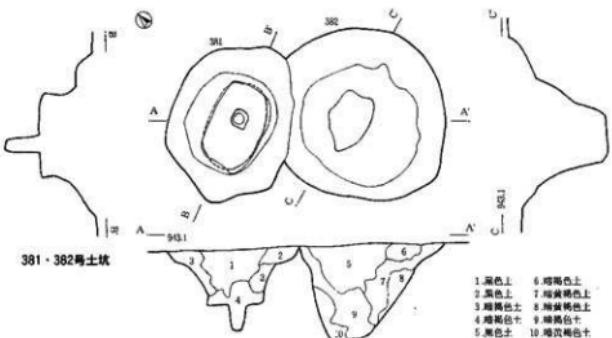
第54図 7区落し穴(4)(1/60)



第55图 7区落し穴(5) (1/60)



第56図 7区落し穴(6) (1/60)



第57図 7区落し穴(?) (1/60)

号土坑が台地を北から南へ横断している。

3類（第56-57図）上面プランと坑底プランが円形のもので、上面長軸106cm～216cm、短軸92cm～198cm、深さは46cm～96cmで、ほぼ中央に坑底ピットを持つ落し穴群。あまり明瞭ではないが、坑底プランが円に近い309-313-376-406号土坑と、やや長めの394-381号土坑との2種類がある。土層状況は中央部レンズ状堆積であり、394号土坑のように使用した落し穴を埋めて再使用していると考えられる土層もある。断面はいずれも中段からラッパ状に広がるものばかりだが、394号土坑のように中段より下が袋状になるものもある。この落し穴群も列状になる。この列は301-309-313-318-394-378-376-381-375-406-419-417-426-431-101号土坑で構成されている。配列は台地の南東から北西に向かってほぼ一直線になる。

4類 上面プランが円形ではあるが、坑底プランが方形の落し穴群。坑底ピットの数で、次の2種類に分けることができる。

A種（第57図）坑底ピットのない落し穴群。長軸136cm～208cm、短軸130cm～190cm、深さ23cm～96cmのものである。土層状況は中央部レンズ状堆積であり分層はできない。この落し穴群の分布は特徴的で、7区の南北両に偏っている。336-345-369-366-365号土坑が半円形に配列する。

B種（第57図）坑底ピットが1つの中落し穴群。長軸190cm～248cm、短軸166cm～246cm、深さ84cm～113cmの均一の大きさである。土層状況は中央部レンズ状堆積である。分布は7区の西側に偏って検出するが、列にはならず散在している。

5類 1類から4類に較べてかなり規模の小さい落し穴群。長軸64cm～128cm、短軸60cm～107cm、深さ30cm～90cmのものである。坑底の形状から次の2種類に分類することができる。

A種（第57図）坑底が平らな落し穴群。坑底ピットを1つないし2つ持つ。土層状況は中央部レンズ状堆積と单一層のものが見られる。第Ⅰ群3類と同じで7区南側、または北側の小さな谷から検出される。

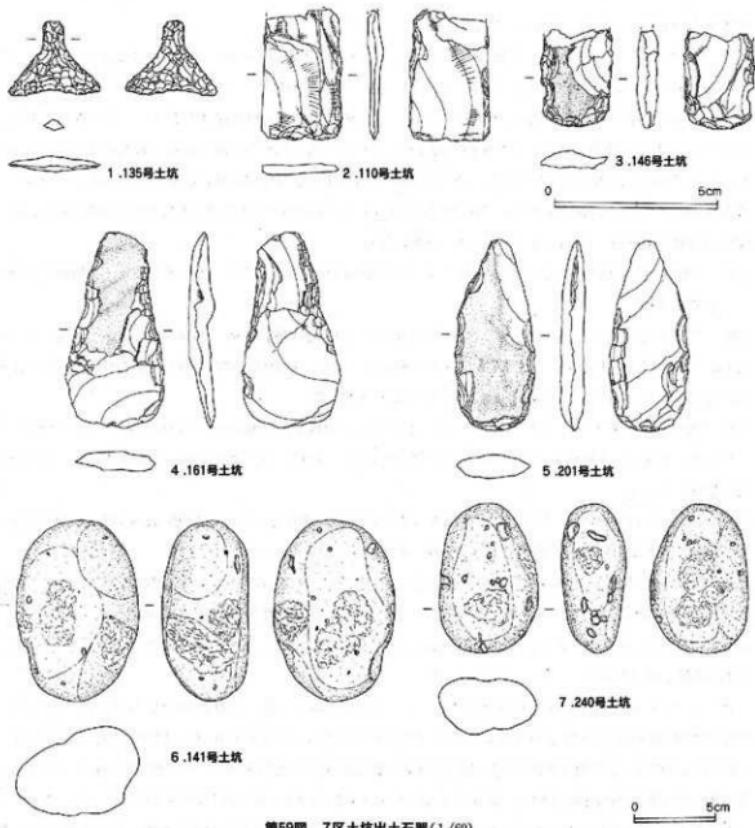
B種（第57図）坑底が不整形な落し穴群。坑底ピットがわからないものが多い。土層状況は單一層である。分布はA種と同じである。

落し穴の中にはタイプの違うもので切り合っているものがあり、落し穴の新旧関係がわかるものがある。第Ⅰ群1類A種の317号土坑は第Ⅱ群1類の316-333号土坑を切る。第Ⅰ群1類A種の430号土坑は第Ⅱ群3類の426号土坑を切る。第Ⅱ群3類の309号土坑は第Ⅰ群2類A種の308号土坑を切る。第Ⅰ群2類A種の349号土坑は第Ⅱ群4類B種の348号土坑を切る。第Ⅱ群3類の394号土坑は第Ⅱ群1類の384号土坑を切っている。以上のことから新しく作られた落し穴から古い方へ並べていくと、第Ⅰ群1類A種—第Ⅱ群3類—第Ⅰ群2類A種—第Ⅱ群4類B種となり、第Ⅱ群3類と第Ⅱ群1類の関係は第Ⅱ群3類—第Ⅱ群1類となる。意外に土坑の切り合いが少ないので以上述べたものの他は新旧関係がよくつかめない。時期は第Ⅰ群1類A種の424号土坑と第Ⅰ群2類A種の162号土坑の覆土から繩文時代前期末葉から中期初頭の上器片が出土していることから、前期末葉以前に作られた落し穴と考えられる。

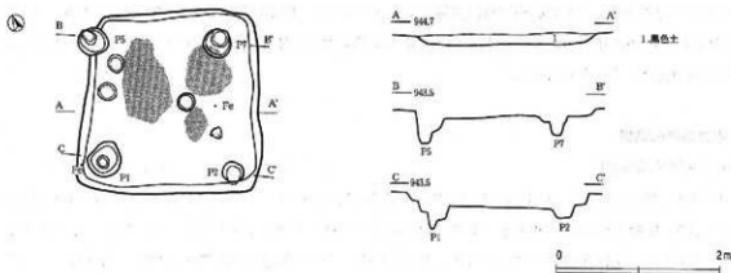
## 2. 中世以降の遺構

### (1) 方形窓穴(第59図)

M-10より検出された。7区では中世の遺構はこの方形窓穴のみで、1・2区とはかなり離れた場所で発見された。長軸・短軸とも222cmの正方形である。覆土は浅いが掘り方はしっかりしている。柱穴と思われるピットは7基あるが、主柱穴はP1-P2-P5-P7と考えられる。このうちP5は方形窓穴の壁面と切り合っている。中央部付近には堅緻な面があることが認められた。出土遺物は少なく、鉄製品と天日茶碗の底部が出土して



第59图 7区土坑出土石器(1/60)



第58图 7区方形竖穴(1/60)

いる。この遺構の時期については出土遺物が少量のため確定的ではないが、中世の集落址に関係する遺構と考えられる。

### 3. 近代の遺構(第39図)

近代の遺構は溝が検出されている。C～F-10～15に位置している。東側は一本松付近から伸びており、西側は現道の下へ入っている。この溝の続きは威力不動尊東遺跡のD-15の現道の下から出て、威力不動尊へ伸びている。威力不動尊東遺跡の報告書(河西ほか 1998)でもこの遺構について述べているが、構造は上端幅35cm～40cm、下端幅29cm～33cmで、溝の底部に扁平な礫を敷き詰めている。石の下には9cm～14cmの幅の細い溝が作られている。威力不動尊東遺跡分の溝中から「明治九年」銘の一錢銅貨が出土している。

## 第7節 4・5・8・9区の概要

前記の調査区の他に、調査を行ったが遺構を検出できなかったり、埋土保存になり発掘を行わなかつたりした調査区がある。これらの調査区である4・5・8・9区について述べる。

### 1. 4区の概要(第60図)

4区は師岡平遺跡の北東隅のT・U・V-45に位置する。遺構などは近年の田の造成に伴う溝が検出されているのみである。また、遺物も全くないことから、4区が師岡平遺跡の南東側の限界ではないかと考えられる。

### 2. 5区の概要(第60図)

5区はI・J・K-19・20・21に位置し、東を2区、西を7区と接している。5区は耕作による擾乱、いわゆる天地返しが行われ、深く振り返されていて遺構は全く残っていないかった。遺物は少量出土し、銭が3枚出土している。そのうち1枚は判読不能であったが、他の2つは元豐通宝と皇宋通宝であった。5区は1区と2区間にあるため、1区・2区の屋敷地の続きがあったのではないかと考えられる。

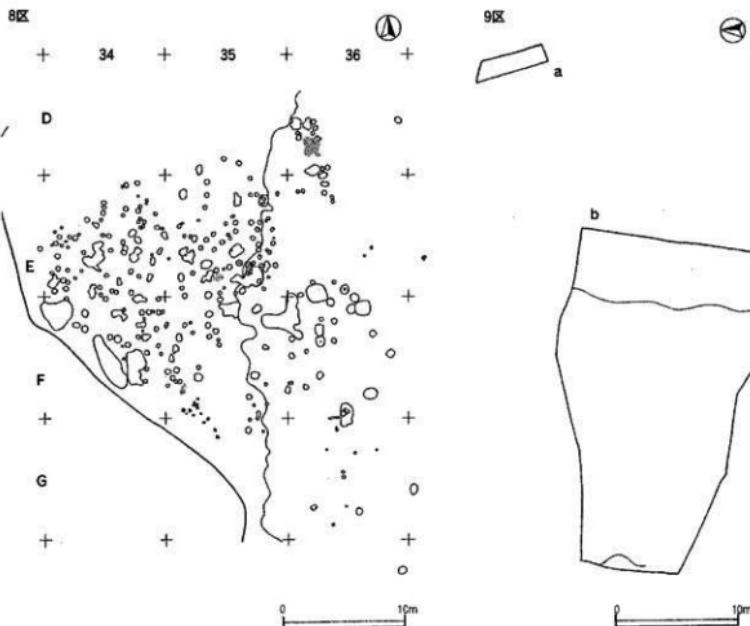
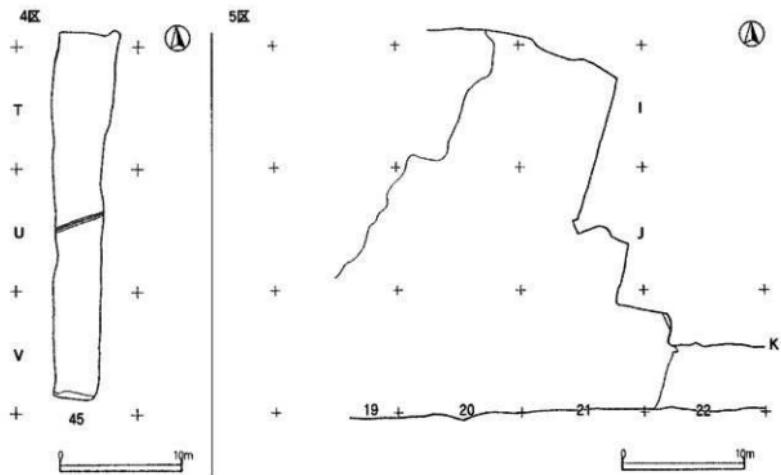
### 3. 8区の概要(第60図)

8区はD・E・F・G-34・35・36に位置し、北側を1区に、東側を6区と接している。この調査区は当初削平を行う予定であったが、設計変更によって保存されることになったため、遺構のプランを記録するにとどめた。遺構は焼土址や柱穴状の土坑が見られ、墓壙と建物址が切り合って存在していたことが考えられる。8区の墓壙は6区の溝付近の墓域とは異なった一群を形成している。

出土遺物は、銭の出土が多く見られる。出土銭は3枚が皇宋通宝、2枚が紹聖元宝・元祐通宝、1枚が開元通宝・大觀通宝・天聖元宝・至和通宝・政和通宝・至道元宝・天禧通宝・熙寧元宝・祥符元宝の16枚である。

### 4. 9区の概要(第60図)

9区はA・B-15・16・17・18に位置し、南側に一本松がある。遺構は発見されず、aから石臼が1点発見されただけである。この調査区は谷の頂部に当たり、9区の東側は一段高くなっていて、中世の集落址の一部が試掘の結果判明している。



第60図 4・5・8・9区全体図 (1/400)

## 第 IV 章 結語

平成8年度と9年度の二度にわたる調査により師岡平遺跡の一端を知ることができた。遺跡の範囲は広大な尾根状台地全域に広がり、内容は複雑である。

縄文時代は大きく分けて落し穴と前期末葉から中期初頭の集落、中期後半の集落がある。落し穴の出土状況から師岡平遺跡全城と久保御堂・威力不動尊東遺跡とを含めた広大な範囲を狩り場としていたことがわかった。前期末葉から中期初頭の集落は威力不動尊東遺跡と一体の集落址と思われる。中期後半の集落は、試掘の成果と併せて考えるとM-29から南東側約20,000m<sup>2</sup>の範囲が遺跡であることがわかっている。7区や威力不動尊東遺跡の住居址は分村的な集落になるだろうか。

本遺跡で最も古い時期の遺物は縄文時代早期の押型文土器と表裏縄文土器である。この土器は3区から検出している。久保御堂遺跡でも早期押型文土器が出土しており、何らかの関連性があるのではないかと考えられる。守矢は久保御堂遺跡の中で、落し穴の時期について早期と中期初頭の2時期を考えており(守矢 1997)、本遺跡も落し穴に関係しているのかもしれない。

表面採取や遺構の発掘を通して、遺跡全体から出土する資料に灰釉陶器がある。時期は10世紀後半から11世紀初頭にかけてのものであるが、遺構らしきものは今回の調査では発見することができなかった。わずかに3区で鐵鋤や焼土塗が発見されたのみである。本遺跡のかなり東側に1枚だけ圃場整備事業を行っていない畑があるが、表面採取のときにその畑の付近からも灰釉陶器が拾われている。この時期の遺物は少量ではあるが久保御堂遺跡でも出土しているが、遺構が全く発見されていない。

本遺跡の特徴の1つとして中世の集落址であることを挙げることができる。中世の集落址は7区以東に限られている。居住域は1区の北側の道を挟んだ場所からも試掘の結果建物址が発見されており、さらに広がりを見せている。南側は3区の西側、7区の東側で建物址を確認している。1区から建物址の配列を見ると、1号建物址に直交するように2・3号建物址が配置されている。1号建物址と2・3号建物址は重複しないため同時に存在していたことが考えられる。この3軒の建物址は1つの屋敷地と考えられる(A屋敷地)。A屋敷地の東側は全く遺構が確認できず、約10mおいて4~10号建物址で構成されるB屋敷地が形成されている。B屋敷地は重複のある7軒の建物址で構成している。柱穴状の上坑の多さと重複から数回建て直しを行っていると思われる。建物の配置は4号・6号・7号・8号がほぼ同じ軸線で同時に存在する可能性がある。9号・10号の建物址は軸線が同じだが、切り合いがあるので時期差があることが考えられる。5号は1号と同じ軸線のため、A屋敷地と同時に作られた建物址と考えられる。9号建物址の東側に溝5があり、この溝によって屋敷地が区画されていると考えられる。△屋敷地と5号建物址の軸線と溝3の方向が似ており、両屋敷地とも溝3でも区画されていた可能性がある。

2区は建物址の全体を確認できたものはないが、溝による区画から4つの屋敷地があったことが想定できる。1つは溝6西の1号建物址を中心とするC屋敷地、その東側の溝6と溝2に開まれたD屋敷地、さらに東側の溝2と溝1に開まれたE屋敷地、もう1つは溝1の東側、5号建物址を中心とするF屋敷地である。建物址の軸線方向については1・2・5号が近く、3号がやや異なり、4号が全く異なる。溝2・3と2号建物址は切り合いがあり、同時に存在していたとは考えられない。しかし、溝3の軸線方向が2号建物址と似ているため、何らかの関係があるのではないかと思われる。F屋敷地は他とは異なり、方形窓穴などの特殊な遺構が多く見られるので、特殊な領域であったのではないだろうか。

1区と2区の居住域の東限はK-36付近であるが、K-34からかなり遺構が少なくなる。1・2区は共通する要素が多いため、8区とともに1つグループになると考えられる。建物址は他に6区南側で確認されており、3区でも柱穴状の土坑が多く見られるため、また違ったグループになると思われる。

1・2区の居住域は34グリッドで大体消滅するが、これより東側には墓域が形成されている。試掘時にJ-27付近から火葬の跡などを発見していることから、墓域はさらに広い範囲に存在するのではないかと考えられる。墓域は6区112号土坑を中心とした一群のようにグループを形成した場所が、所々に存在している可能性がある。8区はそうした別グループの1つである。8区のように建物址の柱穴と墓域が重複している所を見ると、集落内で土地利用の仕方が何とか変わったことを意味している。墓壙の中には189号土坑のようにグループから外れて検出されるものがある。この墓壙の付近から他の墓壙や、建物址が発見されておらず全く離れてしまっている。この墓壙と墓壙群との関係は全くわかっていない。

また、全く離れた場所から方形窓穴が検出されている。7区の中世遺構は方形窓穴のみで、周囲には関連する遺構は見られない。しかし、天日茶碗や鉄製品などが出土しているため、全く孤立していたという可能性は低いと考える。

溝は前述のとおり屋敷地の区画を目的として作られたことが考えられるが、1区溝3や2区溝2のように現道に沿っているものがある。溝が中世のものであるとすると、現道はかなり古くから位置が変わらずに機能していたことが考えられる。

出土遺物については宋代の青磁碗の小片がD-22付近とS-23付近から、1区から明の青磁が出土している。また、全城にわたって常滑焼の窯の破片や大窯期の瀬戸・美濃系丸皿・長石軸の丸皿の破片などの陶器類、かわらけや内耳鍋の土器の破片が出土している。鐵の出土も多く見られる。遺構から出土したものと、遺構外から出土したものの銭種を見ると、最も多かったのは元豐通宝の18枚で、以下、16枚の皇宋通宝、11枚の熙寧元宝、9枚の天聖元宝・治平元宝・元祐通宝、8枚の開元通宝・嘉祐元宝、7枚の永樂通宝、6枚の至道元宝、5枚の天禧通宝・紹聖元宝・政和通宝4枚の淳化元宝・景德元宝・嘉祐通宝・聖宋元宝、3枚の祥符元宝、2枚の太平通宝・祥符通宝・景祐元宝・洪武通宝、1枚の咸平元宝・治平通宝・大觀通宝・淳熙元宝・皇宋元宝・景定元宝、不明または一部判読不明は22点である。この中で初鑄年の最も新しいものは永樂通宝の1408年である。

遺跡の時期は、宋代の青磁が出土しているので鎌倉時代には集落が存在していた可能性があるが、遺物の大部分が大窯期と考えられるため、最盛期は室町時代後半から戦国時代が主体になるだろう。

篠岡平遺跡はその存在が古文書により古くから知られていた。篠岡平遺跡は「村岡」が本来の地名で、古文書には「村岡」で記載されている。「村岡」の記述のある古文書のすべては守矢文書である。

戦国時代以前には「村岡」の地名は見えないが、「古田」での記述はよく見られる。「古田」の初見史料は『人祝職位事書』の建武2年(1335)の条で、諫方頼継が大祝に就任したときに「古田神主 白米三升三ヶ村百文古田 百文南大塙 福沢三十二文 中村布代六十五文」と儀式の費用を負担している。大祝就任時の負担については、諫方有縁が就任した応永4年(1397)10月17日、諫方頼長が就任した文安5年(1448)3月13日に記述がある。文明3年(1470)2月13日の『守矢満実書留』には「古田山越料足三百」、室町後期に成立したと考えられる『年内神事次第旧記』では「古田神主ふつちやうそんまうなし」、また「神くわの事」という祭礼では「古田二勺」を、12月28日の「村代神主のみむろへまいらするせちれうの事」には「古田神主 白米一斗 すかたゝみ三條」を負担している。

『大祝職位事書』に見られる古田は、南大塙・福沢・中村と共に「三ヶ村」とか「古田三ヶ村」として祭礼費用などを負担し、これを執行していたのが「古田神主」であった。村岡はこの当時古田から独立した村

ではなく、おそらく「古田」の一部として祭礼費用を負担していたのではないかと考えられる。

「村岡」の記述が見られるのは永禄9年(1566)の『諏訪上下社祭祀再興次第』(通称「信玄十一軸」)で、この中では「諏訪郡山浦之古田・長田・村岡」とある。古田が3つに分かれたのはいつの頃かはわからないが、戦国時代になってからは確実に独立した村落になったと思われる。天正6年(1578)の『上諏訪造宮帳』には「村岡之石見・古田之筑後・長田之豊右衛門尉」とあり、古田三ヶ村の有力者であると思われる人物の名前を見ることができる。

『茅野市史 中巻』によると、天正18年(1590)に伊奈熊藏(忠次)による検地が行われ、これによると村岡・長田は見られなくなり「古田村」だけになる。これは慶長18年(1613)の『信州諏訪郡高辻帳』も同様である。出土遺物もこの時期に減少するため、「村岡」が消滅したのは天正6年から天正18年までのわずか12年の間であると考えられる。

以上のように師岡平遺跡は長期間にわたって営まれてきた遺跡であることがわかった。また廃村になりながら古文書にその名が見え、発掘調査によって実際にその存在が確認できた非常に稀有な例といえよう。

今回の調査は、中世の集落について工事によって破壊される場所のみの発掘であったため線的な調査となり全貌をつかむことは非常に難しく、ほんの一端がわかったにすぎない。また、新たに分析を加え再考する必要があると思われる。

#### （参考文献）

- 信濃史料刊行会 1972 『新編信濃史料叢書』第7巻  
両角昭二・北沢和男 1986 「第1編 地質」『茅野市史 別巻 自然』 茅野市  
細田賛助 1987 「第四編第二章第一節 古村」『茅野市史 中巻』 茅野市  
永井久美男 1994 「中世の出土銭 一山土銭の調査と分類一」 兵庫埋蔵銭調査会  
守矢昌文・柳川英司 1994 「稗田頭C遺跡」 茅野市教育委員会  
守矢昌文 1997 『久保御堂遺跡』 茅野市教育委員会  
河西克造・柳川英司 1998 「威力不動尊東遺跡」 茅野市教育委員会



遺跡遠景(西より)



図1 遺跡遠景(平成8年度・南より)



図2 遺跡遠景(平成9年度・西より)



図1 1区遠景(東より)



図2 1区(南西より)



図3 1区遠景(南より)



図4 1区建物址1他(上空より)

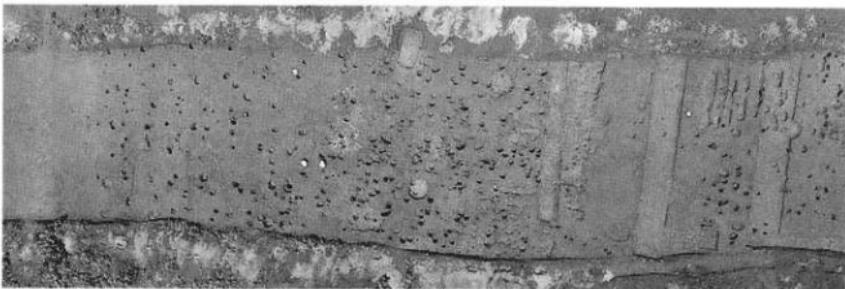


図5 1区建物址7・8・9他(上空より)



図1 1区建物址1(東より)



図2 1区建物址1(東より)



図3 1区126土

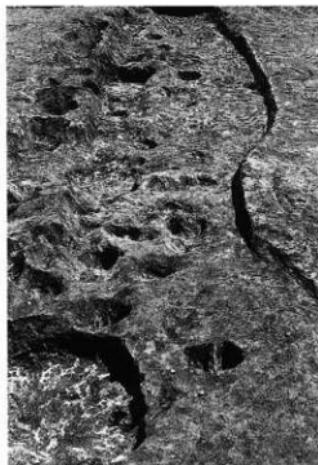


図6 1区溝1(北より)

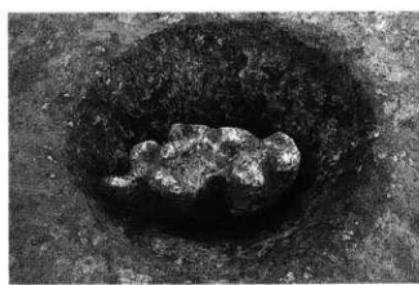


図4 1区205土(北より)

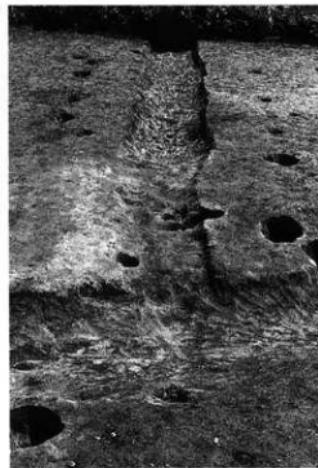


図7 1区溝2(北より)

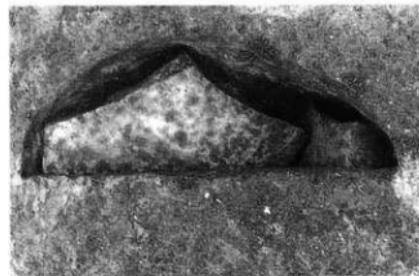


図5 1区719土(北より)



図1 1区溝3(東より)



図2 1区溝5(北より)

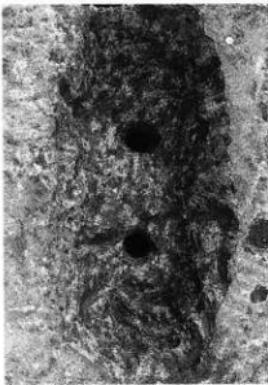


図3 1区178号土坑(東より)



図4 1区溝3他(東より)



図5 1区148号土坑(南より)

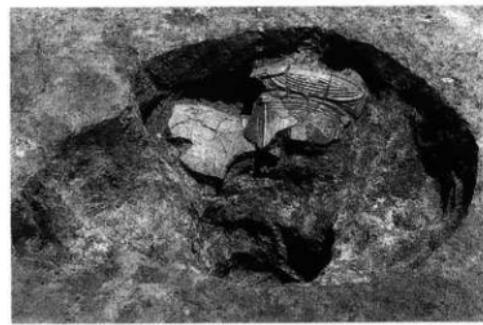


図6 1区288号土坑(東より)



図7 1区288号土坑(東より)

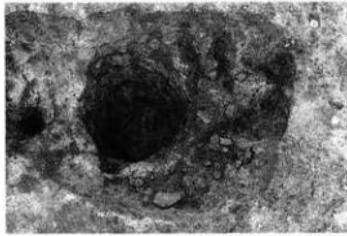


図8 1区288号土坑(西より)



図1 2区遠景(東より)



図2 2区(上空より)

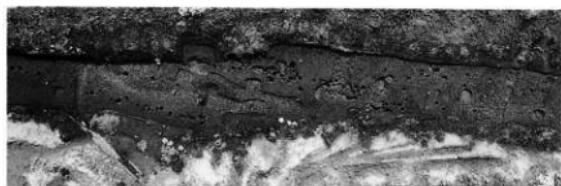


図3 2区(上空より)



図5 2区建物址2(奥)他(東より)



図4 2区・5区(上空より)



図6 2区建物址3(東より)



図7 2区建物址5(奥・東より)



図8 2区溝2(手前)・3(東より)



図1 2区溝2(南より)



図2 2区溝2(手前)・溝3(東より)



図3 2区219土(上部・西より)



図4 2区219土(下部・西より)

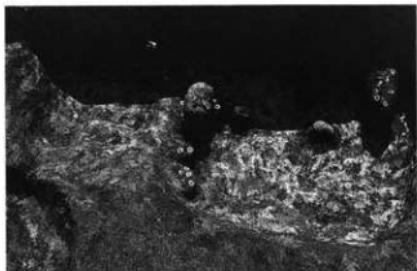


図5 2区方形堅穴2(北より)

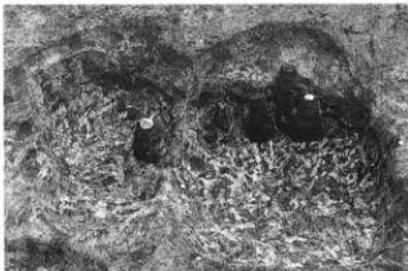


図6 2区方形堅穴2(北より)

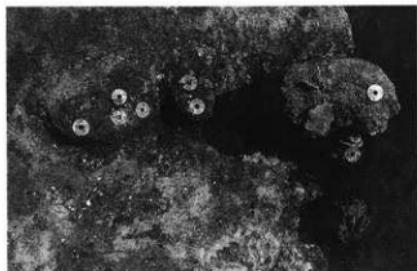


図7 2区方形堅穴2・錢出土状況(西より)

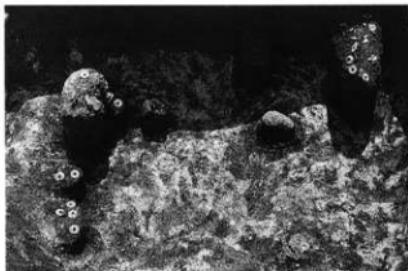


図8 2区方形堅穴2・錢出土状況(北より)

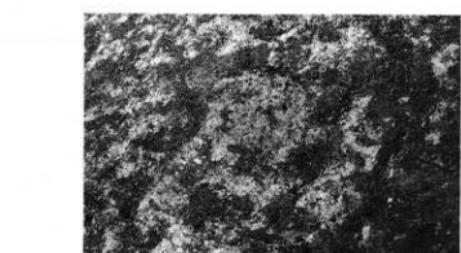
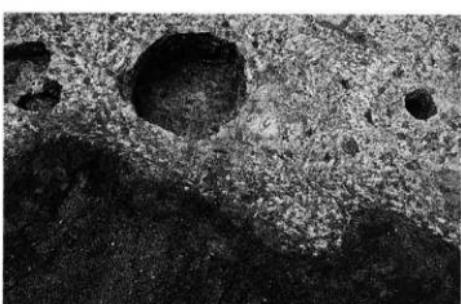
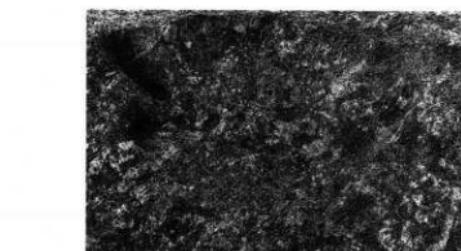
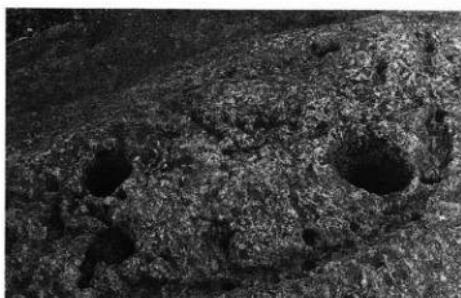




図1 3区3号住居址(東より)



図2 3区3号住居址炉内土器(西より)



図3 3区3号住居址炉内土器(北より)



図4 3区3号住居址炉(西より)

図5 3区3号住居址  
第1土器集中部  
(西より)



図6 3区3号住居址第2土器集中部(西より)



図7 3区3号住居址床面直上土器(東より)

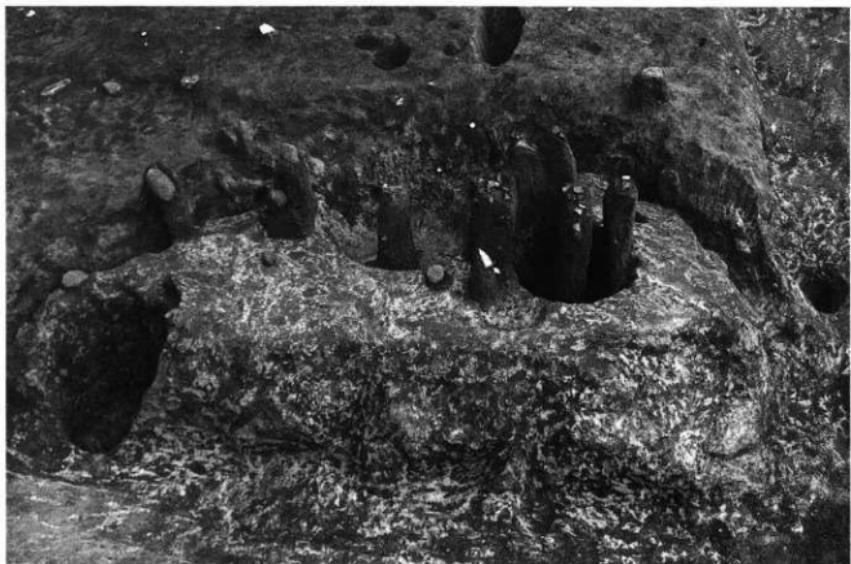


図1 3区5号住居址遺物出土状況(西より)



図2 3区72号上坑遺物出土状況(北より)



図3 3区122号土(東より)

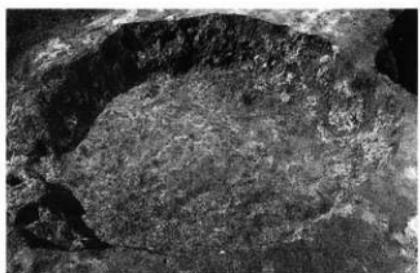


図4 3区焼土坑1(東より)

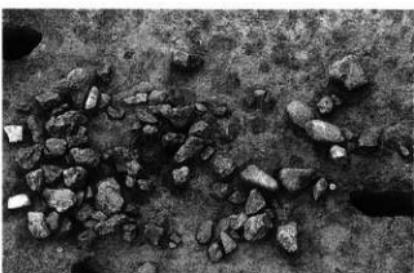


図5 3区集石1(南より)



図1 6・8区全景(北より)

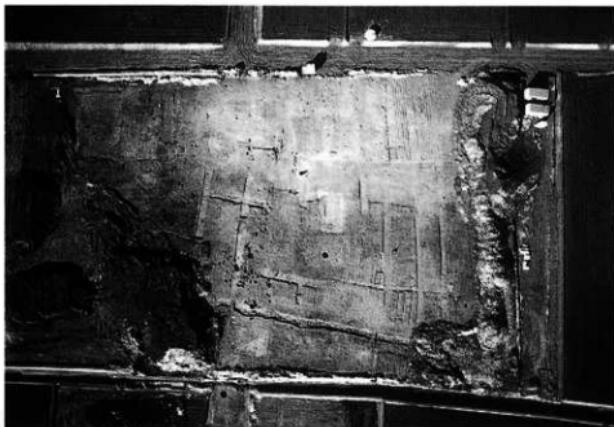


図2 6区北側・8区(南より)

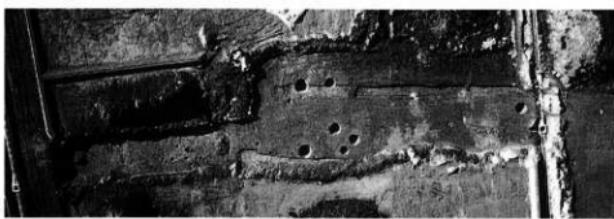


図3 6区南側(東より)



図1 6区1号住居址(南より)



図2 6区1号住居址(北より)



図3 6区27号土坑(手前)他(北より)



図4 6区25号土坑(北より)



図5 6区25号土坑黒耀石出土状況(北より)



図6 6区25号土坑(北より)

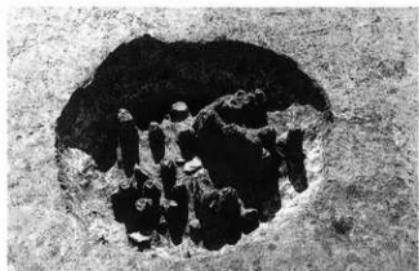


図7 6区26号土坑(北より)

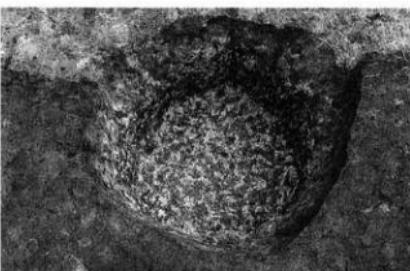


図8 6区26号土坑(西より)



図1 6区24号土坑(北より)

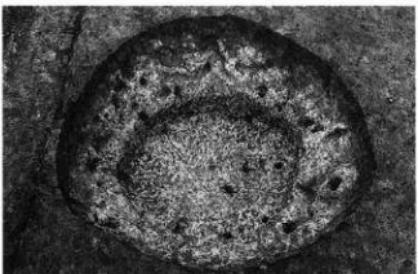


図2 6区24号土坑(北より)

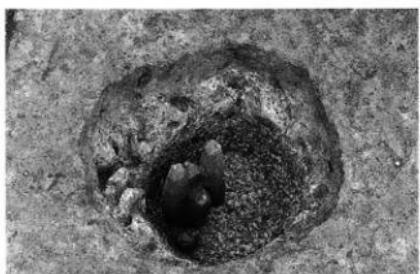


図3 6区39号土坑(西より)

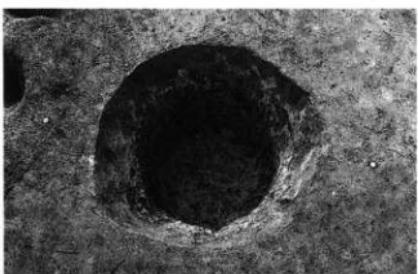


図4 6区196号土坑(北より)



図5 6区28号土坑(北より)

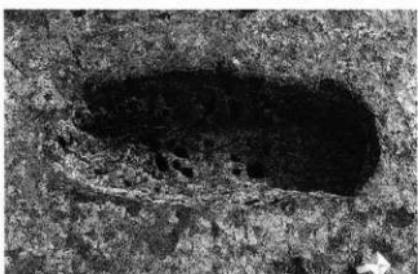


図6 6区86号土坑(北より)



図7 6区櫛立柱建物址(南より)



図8 6区墓域群(東より)



図1 6区墓塚群(北より)



図2 6区墓塚群(北より)



図3 6区焼土址1(東より)



図4 6区焼土址1(西より)



図5 6区焼土址2(東より)



図6 6区焼土址3(東より)

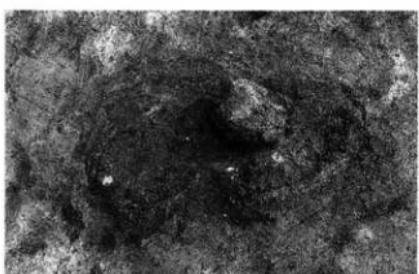


図7 6区焼土址6(西 より)



図8 6区焼土址7(東より)

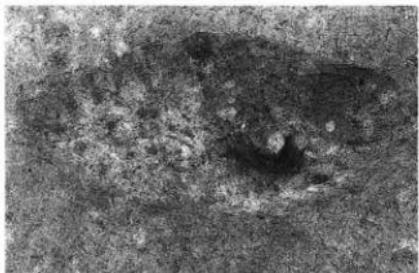


図1 6区71号土坑(北より)



図2 6区29号土坑(北より)



図3 6区45号土坑(北より)



図4 6区45号土坑(北より)



図5 6区71号土坑(北より)



図6 6区43号土坑(北より)



図7 6区45号土坑(東より)



図8 6区68号土坑(東より)



図1 6区127号土坑



図2 6区200号土坑(西より)



図3 6区201号土坑(北より)



図4 6区201号土坑(南より)

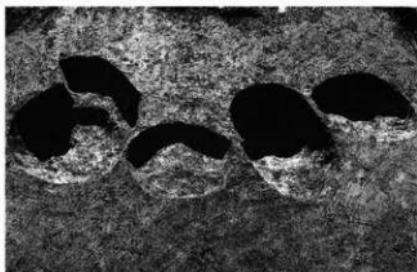


図5 6区198・199・200・201号土坑(左から・北より)



図6 6区89号土坑(西より)

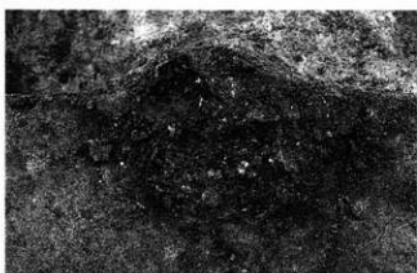


図7 6区199号土坑(北より)



図8 6区65・66・67号土坑(左から)

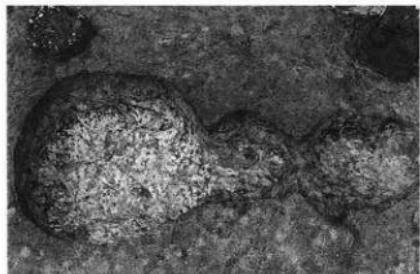


図1 6区65・66・67号土坑(左から・東より)

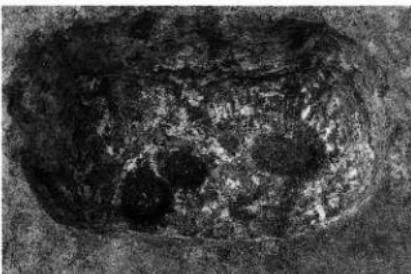


図2 6区111号土坑(東より)

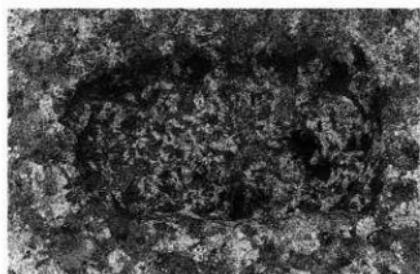


図3 6区143号土坑(東より)

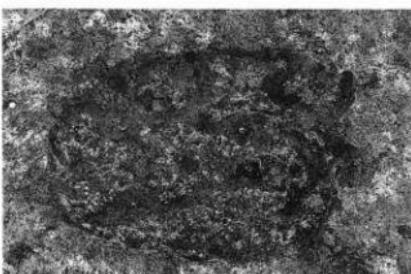


図4 6区140号土坑(東より)



図5 6区47号土坑(東より)

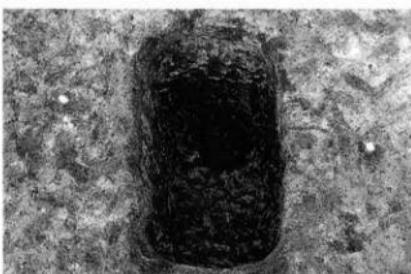


図6 6区189号土坑(南より)



図7 6区溝1(東より)



図8 6区北側(北より)



図1 7区(上空より)



図2 7区北側(西より)



図3 7区南側(上空より)

図1

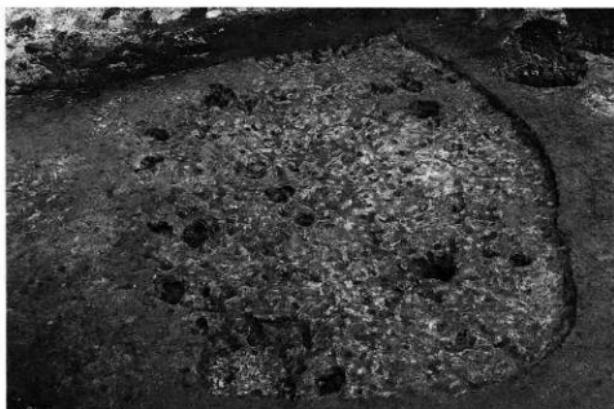


図1・2 7区1号住居址(東より)

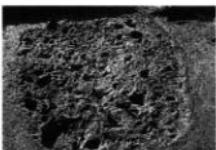


図2

図3

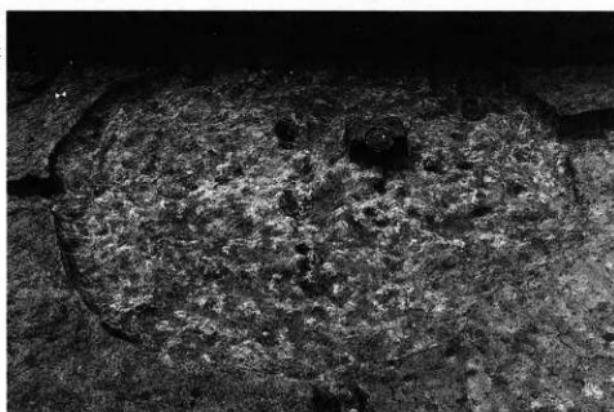


図3・4・5 7区2号住居址  
(西より)

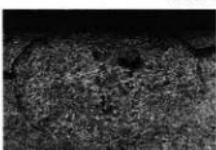


図4



図5 埋甃(西より)



図6 7区3号住居址(東より)

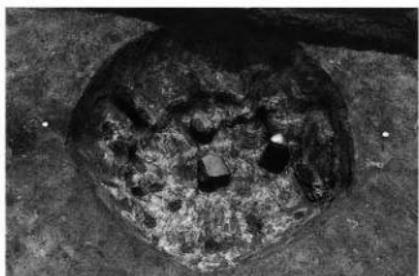


図1 7区115号土坑(北より)

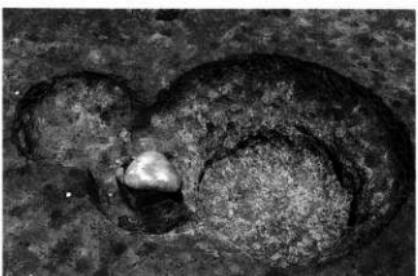


図2 7区131・129・130号土坑(左から・南より)



図3 7区135号土坑(南東より)

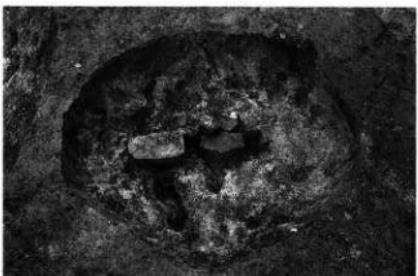


図4 7区138号土坑(南西より)



図5 7区141号土坑(南より)

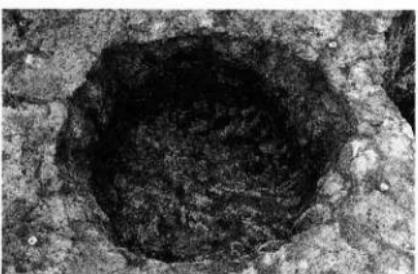


図6 7区142号土坑(西より)



図7 7区143号土坑(南より)



図8 7区175号土坑(北より)

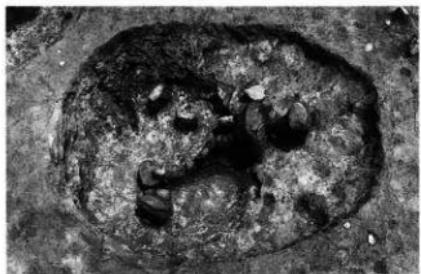


図1 7区176号土坑(南西より)



図2 7区179号土坑(北より)



図3 7区194号土坑(西より)



図4 7区199号土坑(南より)



図5 7区202号土坑(北より)

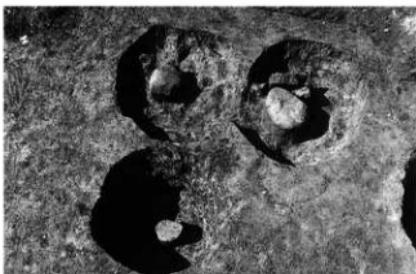


図6 7区228(左下)・227(左上)・241(右上)号土坑(南より)

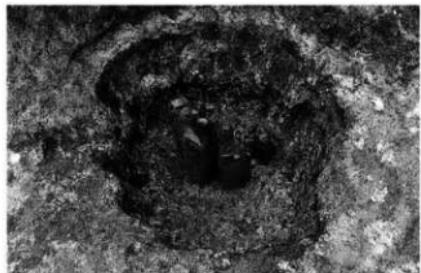


図7 7区240号土坑(南より)

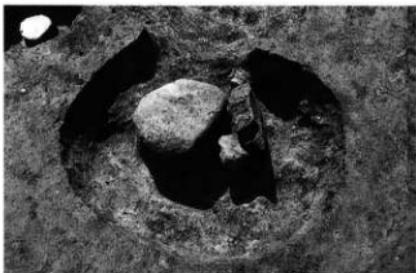


図8 7区241号土坑(東より)



図1 7区162号土坑(西より)



図2 7区354号土坑(西より)

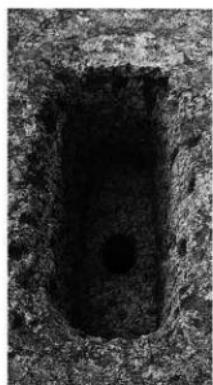


図3 7区438号土坑(東より)

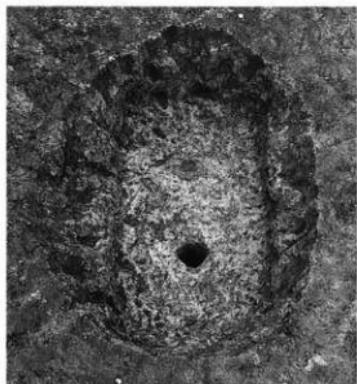


図4 7区340号土坑(北東より)

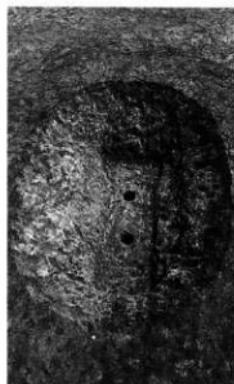


図5 7区305号土坑(西より)



図6 7区396号土坑(東より)



図7 7区424号土坑(北東より)

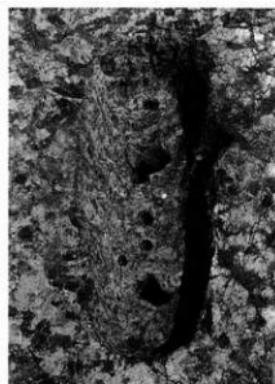


図8 7区420号土坑(南西より)



図9 7区252号土坑(南西より)

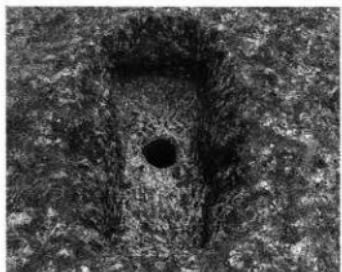


図1 7区351号土坑(西より)

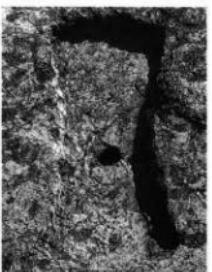


図2 7区251号土坑(北より)

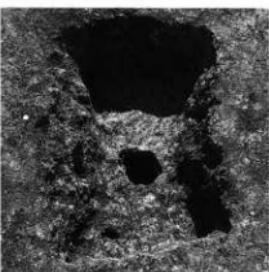


図3 7区273号土坑(北西より)

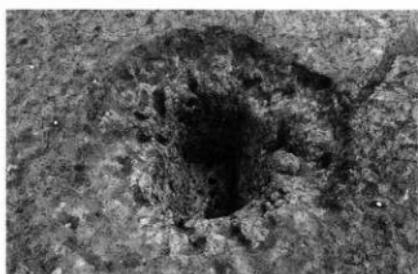


図4 7区256・257号土坑(左から・北より)

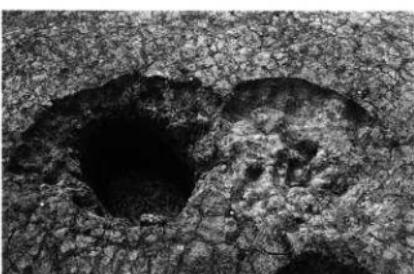


図5 7区310号土坑(南西より)

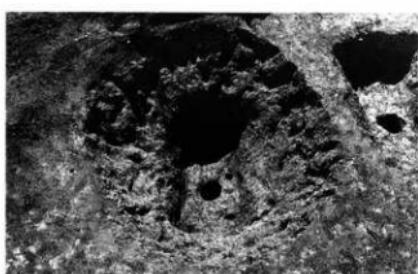


図6 7区272号土坑(北より)

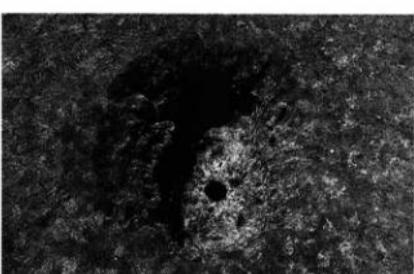


図7 7区320号土坑(北より)

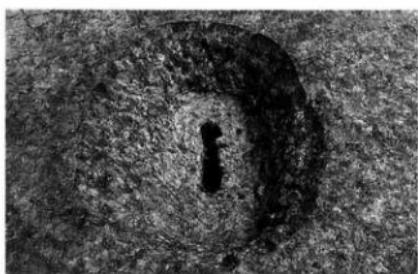


図8 7区265号土坑(南西より)

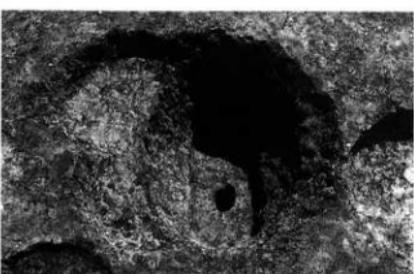


図9 7区295(左下)・296(左上)・294(右)号土坑(北より)



図1 7区363号土坑(南西より)

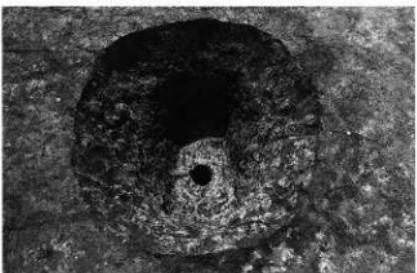


図2 7区321号土坑(北東より)

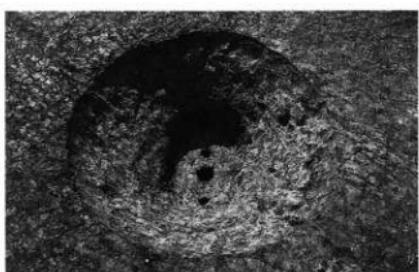


図3 7区345号土坑(北東より)

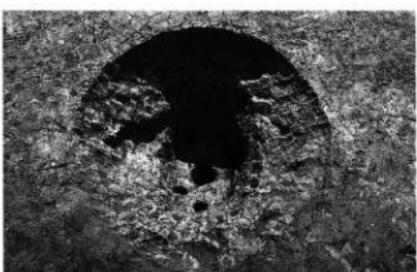


図4 7区319号土坑(北東より)

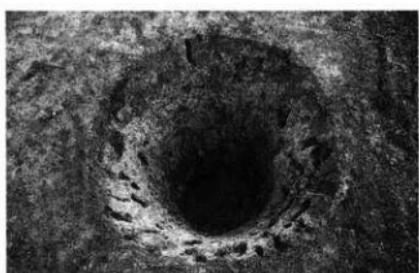


図5 7区55号土坑(北より)



図6 7区55号土坑(北より)

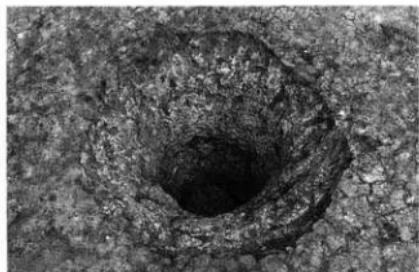


図7 7区261号土坑(南より)

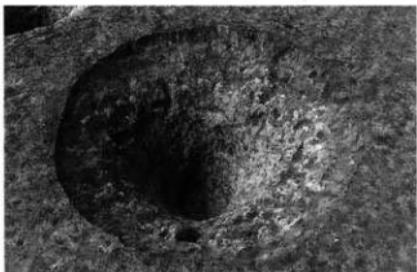


図8 7区260号土坑(南より)

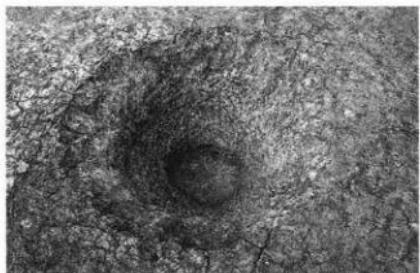


図1 7区371号土坑(北東より)

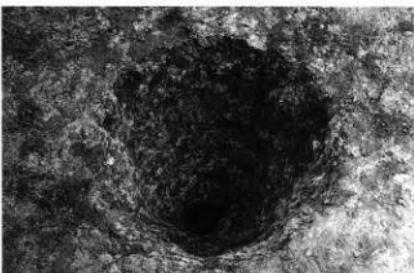


図2 7区261号土坑(南より)

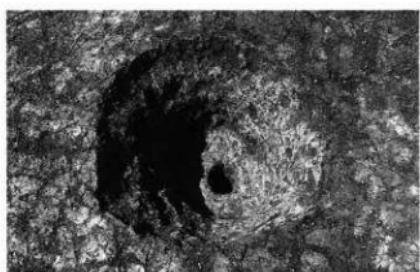


図3 7区406号土坑(北東より)

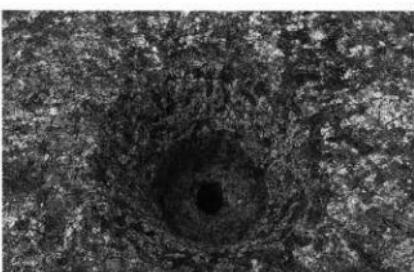


図4 7区419号土坑(東より)

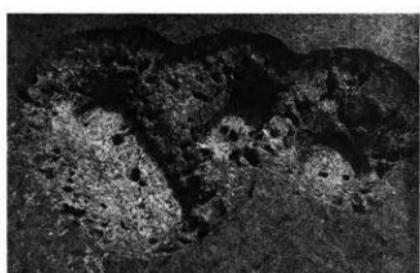


図5 7区317・316・333号土坑(左から・西より)

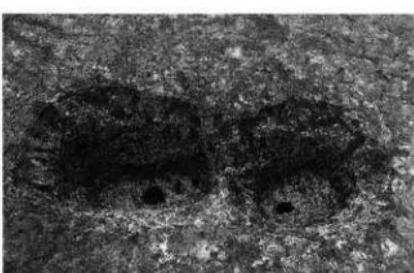


図6 7区308・309号土坑(左から・北より)

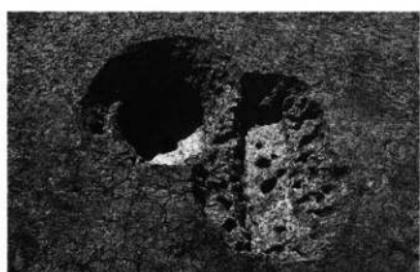


図7 7区426・430号土坑(左から・東より)

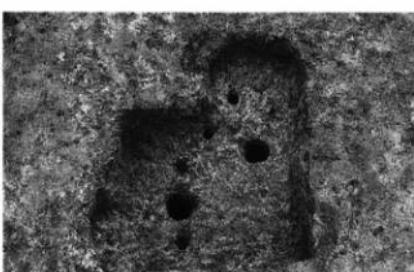


図8 7区36・37号土坑(左から・北東より)

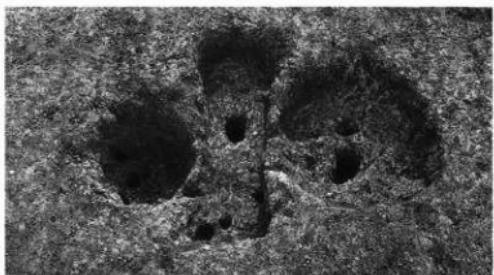


図1 7区56・57・58号土坑(左から・北より)

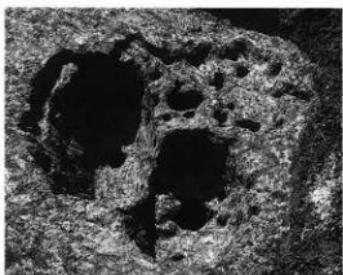


図2 7区67(左下)・68(左上)・69号土坑(北より)

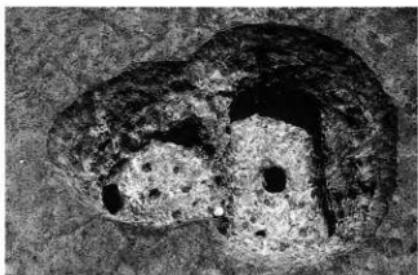


図3 7区97・98号土坑(左から・西より)

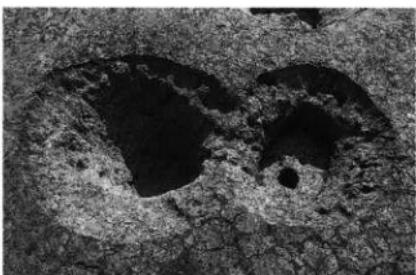


図4 7区382・381号土坑(左から・北東より)



図5 7区落し穴(南より)



図6 7区落し穴(南より)



図7 7区落し穴(東より)



図8 7区落し穴(南より)



図9 7区方形堅穴(北より)



図10 7区方形堅穴(北より)



図1 7区溝址(西より)



図2 7区(西より)



図3 7区(北東より)



図4 7区(北西より)



図5 7区(北西より)

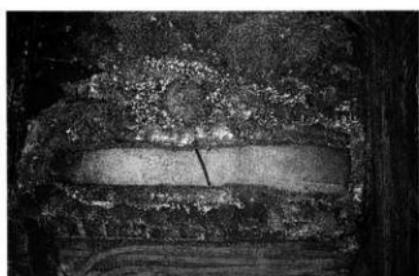


図6 4区(上空より)



図7 5区(東より)



図1 表土剥ぎ



図2 作業風景(1区)



図3 実測風景(2区)



図4 雪の中の発掘(7区)



図5 作業風景(7区)



図6 発掘に携わった方々(平成8年度)



図7 発掘に携わった方々(平成9年度)

報告書抄録

ふりがな	もろおかだいら いせき								
書名	師岡平遺跡								
副書名	平成8・9・10年度県営圃場整備事業古田地区に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書								
編著者名	柳川英司・百瀬一郎・河西克造								
編集機関	茅野市教育委員会								
所在地	〒391-8701 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 TEI.0266-72-2101								
発行年月日	西暦1999年3月25日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 °'\"	東緯 °'\"	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因		
もろおかだいら 師岡平	とよひら 豊平 上古田	20214	78 36° 0' 10"	138° 12' 194"	1996.5.10 1997.3.21 1997.4.15 1997.11.12	25,000m <sup>2</sup>	県営圃場 整備事業 古田地区 に伴う発 掘調査		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
もろおかだいら 師岡平	集落址	縄文時代 前期末葉～ 中期初頭 中期後半  中世  近世以降	落し穴 205基 竪穴住居址 2軒・土坑 137基 竪穴住居址 5軒・土坑 10基  掘立柱建物址 10軒・ 方形竪穴 1基・葬送施 設 92基・溝址 8本  溝址 2本	縄文時代 押型文土器・表裏縄 文土器・前期末葉上 器・中期初頭土器・ 黒耀石製石器・剥片・ 打席石斧・磨製石斧・ 凹石・石皿 中世・近世 陶器片・磁器片・錢・ 銅製品・鉄製品・編み 石・石臼	・縄文時代の 狩猟場 ・縄文時代前 期末～ 中期初頭・ 中期後半 の集落址 ・中世の集落址				

---

---

## 師岡平遺跡

—— 平成8・9・10年度県営圃場整備事業古田地区に伴う  
理 藏 文 化 財 緊 急 発 挖 調 査 報 告 書 ——

平成11年3月15日 印 刷

平成11年3月25日 発 行

編 集 茅野市教育委員会  
発 行 茅野市教育委員会  
長野県茅野市塙原二丁目6番1号  
☎(0266) 72-2101(代)  
印 刷 有限会社森仙印刷所  
長野県茅野市本町西3-1

---

